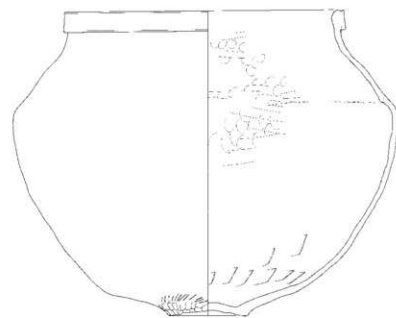


長者山城跡

(第4地点第2次)

渡里揚水機場吐出し水槽工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2020

水戸市教育委員会
株式会社 地域文化財研究所

長者山城跡

(第4地点第2次)

渡里揚水機場吐出し水槽工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

水戸市教育委員会
株式会社 地域文化財研究所





長者山城跡 全景（南上空から那珂川上流を望む）



同 全景（北上空から水戸市街を望む）





SA01-02, SD01 全景 (南西から)



SA01 構築状況 (南から)



SD01 土層断面D (西から)



SD02 土層断面A (南から)



SD03 土層断面 (北西から)

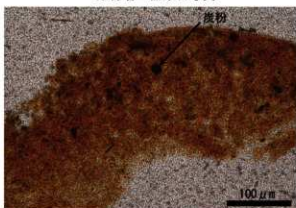




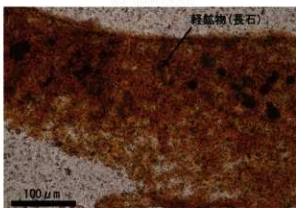
漆附着土器集合写真



炉壁集合写真



S101-11 漆薄片



S101-11 漆薄片



中世遺構外出土遺物-3



ごあいさつ

水戸市は那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。そして、私たちの祖先もこの豊かな自然のもと生活を営んできました。

長者山城跡は、那珂川の右岸に位置する台地上に立地し、この一帯は那珂川の恵みにより縄文時代から近世に至るまでの連続とした人々の生活の営みを垣間みることができます。長者山城跡の西側には、古代常陸国那賀郡正倉院である国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」長者山地区が隣接しており、この地が当時から地域の重要拠点として機能していたことがうかがえます。また、長者山城跡は、茨城県指定史跡「水戸城跡（皇及び堀）」や、平成31年に水戸市の地域文化財に認定された河和田城跡とともに、本市における中世史を紐解くうえで重要な遺跡です。その範囲内には、現在も土塁・堀など、往時を偲ばせる遺構が遺されており、この地に伝わる「一盛長者伝説」は、『水戸郷土かるた』にも詠まれています。

歴史的文化的遺産である埋蔵文化財は、その性格上、一度壊されてしまうと二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世に伝えていかなければならない貴重な財産です。

近年、渡里周辺の都市化が大きく進み、大小様々な開発事業が進められていくなかで、この地域に位置する遺跡の様相も大きく変わりつつあります。都市化と文化財保護の両立は、常々行政の大きな課題として懸念されることはありませんが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき保護・保存に努めているところです。

このたび計画された渡里揚水機場吐出し水槽工事につきましては、文化財保護の観点から遺跡への影響を考慮し、関係機関との十分な協議を重ねてまいりました。その結果、今回の計画によって、遺跡の一部について現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査では、本市を代表する戦国期の城郭にふさわしい、複数の土塁・堀等の大掛かりな防衛施設が発見され、長者山城が当時の地域社会において、重要な軍事拠点として認識されていたことを裏付ける、重要な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書を、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、調査実施にあたり御理解と御協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

令和2年3月

水戸市教育委員会

教育長 志田晴美



例 言

- 1 本書は、渡里揚水機場吐出し水槽工事に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施された、長者山城跡第4地点の第2次発掘調査報告書である。
- 2 調査は、水戸市より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が水戸市教育委員会の指導の下に行った。
- 3 遺跡の所在地及び面積、調査期間、担当者など調査体制は下記の通りである。

所在地	茨城県水戸市渡里町字長者山3154-5～7, 10, 43, 50, 字アラヤ3041-1
面積	1,100㎡
調査期間	令和元年(2019)7月29日～同年11月1日
調査担当者	間宮正光
調査員	斎藤 洋
調査参加者	[発掘調査]

野村浩史 高安幸且 高安丈夫 大貫浩一 北村 昶 鈴木潤一 石島 昇
関澤昌宏 長峰和行 角谷秀夫 出川 孝 宇留野初男 宇留野広大
萩野谷幸次 川崎剛史 高久照美 市毛祐一 栗原芳子 小野健治
安井忠一 斎藤周三 芥川 彰 根矢 稔 小堤光一 岩田時彦
[整理調査]

野村浩史 藤井陽子 増田香理 小林真千子 川村理華 木村春代
遠藤恵子 田口るみ子 横 勝雄 田中成光 古里兼吉 今野秀樹

- 4 整理調査及び本書の作成は間宮が担当し、斎藤の協力を得た。
- 5 執筆分担は、第1章第1節、第2章第1節・第2節・第4節が米川暢敬(水戸市教育委員会)、第4章がバリノ・サーヴェイ株式会社、その他が間宮である。
- 6 今次調査では漆とみられる有機化合物の付着した土器が複数出土し、漆工房に関わる遺物の可能性が生じた。このため、有機化合物の同定を目的として赤外分光分析、赤色顔料等の混和の有無を確認するため、蛍光X線分析及び薄片作成による顕微鏡観察などの自然科学分析を行った。分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果は第4章に掲載している。
- 7 調査記録及び出土品は、一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管・管理している。
- 8 調査においては下記の方々にご指導・ご協力を賜った。(敬称略・順不同)

齋藤弘道 川村満博 関口慶久 比毛君男 広瀬季一郎 越田真太郎 額賀大輔
川又隆一郎 野内智一郎 五十嵐雄大 高城大輔 赤堀岳人 矢作健二 田中義文
齋藤紀行 見留武士

農林水産省関東農政局那珂川沿岸農業水利事業所 茨城県教育庁文化課
水戸市教育委員会 水戸市埋蔵文化財センター 水戸市立博物館 和洋女子大学
上高津貝塚ふるさと歴史の広場 バリノ・サーヴェイ株式会社 スギハラ

凡 例

- 調査において使用した略号は次の通りである。
長者山城跡 第4地点……ミ100-004
竪穴建物跡……SI 性格不明遺構……SX 土塁……SA 堀跡・溝跡……SD
土坑……SK ビット……P
- 調査区には公共座標（世界測地系）にしたがい10m×10mの方眼を被せ、北西端を起点に東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットを付したグリッドを設け調査の基準とした。なお、実測図中の方位は座標北を示し、土層断面図及び断面図に記した数値はそれぞれ標高を示す。
- 遺構の形態及び規模は基本的に現存している形状で判断し、計測は壁上端を基準に行った。主軸方向は長軸線を軸線に、座標北に対して何度偏斜するかを記載した。深度は検出面から、遺構内施設については底面からの深さである。
- 土坑・ビットの平面形態について、方形及び円形基調の遺構では、長軸に対し短軸が8割以上を計測するものを方形あるいは円形、8割未満を長方形あるいは楕円形とした。
- 色相は、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帖』に基づいた。
- 遺物の年代は、中世においては全国シンポジウム『中世窯業の諸相』及び茨城県考古学協会シンポジウム『茨城中世考古学の最前線』で提示された編年を主に用いた。
- 注記は、凡例1に示した略号を用いて、遺跡番号・遺構・出土位置・出土日月の順で行った。接合はセメダインCを用いて臨み、その後分類及び実測遺物を抽出し、遺構ごとの器種構成と数量を把握した。成果は出土遺物集計表としてまとめている。
- 出土遺物観察表中の計測値は（ ）が復元値、（ ）が残存値を示す。単位はcmである。
- 出土遺物観察表及び出土遺物集計表、写真図版中の遺構名は略号を用いて種別ごとに記載した。
- 出土遺物の集計は、接合後約1cm四方以上の遺物に対して行った。
- 掲載遺物には、遺構ごとに番号が付されており、本文・挿図・図版とも一致している。
- 表紙に使用した図は、中世遺構外出土遺物-3で、縮尺は1:10である。
- 本書に用いた基本的な挿図縮尺及びアミ掛けなどは下記の通りである。

挿図縮尺 遺構：全体図……1:600（拡大図1:300）

土塁・堀跡・溝跡……1:100（全体図1:300）

竪穴建物跡・性格不明遺構・土坑……1:60

遺物：土器・陶磁器・石製品・金属製品・鉄滓……1:3、瓦……1:4

※上記は基本縮尺であり、これ以外については図中に明示した。

アミ掛け

■……漆付着範囲

■……黒色処理範囲

■……施軸範囲

■……繊維混入（断面）

■……被熱範囲

■……旧表土

その他

●……土器・その他

■……漆付着土器

▲……製鉄関連遺物

目次

本文目次

巻頭図版

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 長者山城跡の現況と構造	5
第4節 長者山城跡における既往の調査	6

第3章 調査の成果

第1節 基本堆積土層	7
第2節 検出された遺構と遺物の概要	7
第3節 先史時代	
(1) 土坑	9
(2) 遺構外出土遺物	10
第4節 古代	
(1) 竪穴建物跡	11
(2) 性格不明遺構	20
(3) 溝跡	21
(4) 土坑	23
(5) ビット	24
(6) 遺構外出土遺物	24
第5節 中世	
(1) 土塁	25
(2) 堀跡	25
(3) 溝跡	38
(4) 大型土坑	41
(5) 土坑	43
(6) ビット	49
(7) 遺構外出土遺物	49

第4章 長者山城跡出土土器付着物の自然科学分析

第5章 総括

第1節 土地利用の変遷	63
第2節 長者山城における調査区の性格と構造	65
(1) 堀の配置からみた導線と虎口	66
(2) 改修の時期とその要因	67
(3) 長者山城の勢力	67
(4) 長者山城の終焉	67

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	遺跡の位置図	第28図	SA02, 出土遺物	31
第2図	遺跡周辺の旧地形図	第29図	SD02全体図と遺物の分布	32
第3図	周辺の遺跡位置図	第30図	SD02, 出土遺物(1)	33
第4図	長者山城跡の現況と調査地点位置図	第31図	SD02, 出土遺物(2)	34
 4	第32図	SD02-03	35
第5図	基本堆積土層	第33図	SD03	36
第6図	第4地点第2次調査全体図	第34図	SD03出土遺物	37
第7図	SK09・22・26, SK09・26出土遺物	第35図	SD04, 出土遺物	38
第8図	先史時代遺構外出土遺物	第36図	SD07, 出土遺物	39
第9図	SI01-02-08	第37図	SD09-12, SD09出土遺物	40
第10図	SI01出土遺物(1)	第38図	SK16	41
第11図	SI01出土遺物(2)・SI08出土遺物	第39図	SK01~06	42
 13	第40図	SK07-08・10~12・14, SK08出土遺物	44
第12図	SI03-04, 出土遺物	 44	
第13図	SI05, 出土遺物	第41図	SK17~21, SK17・18・21出土遺物	46
第14図	SI07, 出土遺物	第42図	SK23~25, 27・28・31, SK24・28出土遺物	48
第15図	SI06, SX01, SI06出土遺物(1)	 48	
第16図	SI06出土遺物(2)	第43図	中世遺構外出土遺物	50
第17図	SI06出土遺物(3), SX01出土遺物(1)	第44図	付着物のFT-IRスペクトル	60
 19	第45図	付着物のX線回折図	60
第18図	SX01出土遺物(2)	第46図	SI01-11内面付着物の蛍光X線定性 分析結果	61
第19図	SD05-06, 出土遺物	 61	
第20図	SD08・10・11, SD10出土遺物	第47図	SI06-①内面付着物の蛍光X線定性 分析結果	61
第21図	SK13-15・29・30	 61	
第22図	P11出土遺物	第48図	古外-5内面付着物の蛍光X線定性 分析結果	61
第23図	古代遺構外出土遺物	 61	
第24図	SA01-02, SD01全体図と遺物の分布	第49図	遺構変遷図	64
 26	第50図	河和田城跡第26地点出土土師質土器 組成図	65
第25図	SA01, 出土遺物	 65	
第26図	SA02, SD01(1)	第51図	土塁・堀跡配置概念図	66
第27図	SA02, SD01(2), SD01出土遺物	 66	

表目次

第1表	長者山城跡周辺の遺跡一覧	2	第7表	SI07-08, SX01, SD05-06-10, P11, 古代遺構外出土遺物観察表	53
第2表	長者山城跡における既往の調査一覧		第8表	古代遺構外, SA01-02, SD01 ~ 03 出土遺物観察表	54
第3表	古代ビット一覧表	24	第9表	SD03-04-07-09, SK08-17-18-21-24-28, 中世遺構外出土遺物観察表	55
第4表	中世ビット一覧表	49	第10表	出土遺物集計表	56
第5表	SK09-26, 先史時代遺構外, SI01 出土遺物観察表	51	第11表	漆付着土器一覧	58
第6表	SI01-03 ~ 06出土遺物観察表	52	第12表	FT-IR測定条件	59

写真図版目次

巻頭図版1	長者山城跡全景	同全景
巻頭図版2	SA01-02, SD01全景	SA01構築状況 SD01土層断面D SD02土層断面A SD03土層断面
巻頭図版3	漆付着土器集合写真	炉壁集合写真 SI01-11漆薄片 SI01-11漆薄片 中世遺構外出土遺物-3

図版1	調査区全景	同全景	調査前現況	調査前現況
図版2	SK09全景	同土層断面	SK22全景	SK26全景
図版3	SI03全景	SI04全景	同遺物出土近景	SI05全景
図版4	SI06-P1遺物出土近景	SX01遺物出土近景	SI07全景	同遺物出土近景
図版5	SD09-10全景	SD10土層断面	SK13全景	同土層断面
図版6	SA01-02, SD01全景	SA01全景	同土層断面	SA02土層断面
図版7	SD02-03全景	SD01土層断面A	同土層断面C	SD02全景
図版8	SD02土層断面	SD03全景	SD04全景	SD04, SK04土層断面
図版9	SK16土層断面	SK01全景	SK02全景	SK03全景
図版10	SK08全景	SK10全景	SK11全景	SK12全景
図版11	SK23全景	SK24全景	SK25全景	SK27全景
図版12	SK09-26, 先史時代遺構外, SI01出土遺物		SK28全景	SK31全景
図版13	SI01-03 ~ 06出土遺物		P01 ~ 14全景	P18 ~ 21全景
図版14	SI06 ~ 08, SX01, SD05-06-10, P11, 古代遺構外出土遺物			
図版15	古代遺構外, SA01-02, SD01 ~ 04-07出土遺物			
図版16	SD09, SK08-17-18-21-24-28, 中世遺構外出土遺物			



第1図 遺跡の位置図 (1:25,000)



第2図 遺跡周辺の旧地形図 (1:20,000)

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成26年8月5日付けで、農業用施設用地としての開発実施のため、農林水産省関東農政局那珂川沿岸農業水利事業所長（以下「事業者」という。）から、水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」が提出された。

この時点では工事計画が具体化しておらず、市教委は、照会のあった地点が周辺の埋蔵文化財包蔵地「長者山城跡」、「台渡里官衙遺跡」の範囲内に該当する旨回答し、計画が具体化した際には、文化財保護法（以下「法」という。）第94条第1項に基づく通知を要することを伝達するに留まった。

その後、計画が渡里揚水機場吐出水槽工事として具体化し、市教委は平成30年9月11日から13日にかけて試掘調査を実施し、工事の影響範囲内で長者山城の土塁・堀跡を検出するに至った。

揚水機場吐出水槽という大規模な構造物の構築に際し、直下30cm程度に確認された埋蔵文化財への影響は不可避との想定から、市教委は、これら埋蔵文化財への現状保存について事業者と度重なる協議に臨んだが、試掘調査によって確認された埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達した。

よって、市教委は、事業者から提出された法94条第1項に基づく通知に、次善の策として記録保存を目的とした発掘調査を実施すべき意見書を付して、茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あてに進達し、県教委教育長からは埋蔵文化財が影響を受ける部分については工事着手前に発掘調査を実施することの通知があった。その後、市教委と事業者との諸調整を経て、水戸市は事業者と発掘調査業務委託契約を締結したうえで、当該発掘調査における民間組織の支援導入のため、株式会社地域文化財研究所との発掘調査業務委託契約を締結し、調査を実施した。（米川）

第2節 調査の方法と経過

調査は、現況の把握、表土除去、遺構確認、遺構掘り下げの順で進め各段階を記録した。なお、堀跡は深いため安全上法面を構築して臨み、土塁は人力にて除去した後、下の遺構を調査している。遺構の掘り下げは、堆積土層と遺構間の前後関係を把握するための土層観察用ベルトを設け、出土遺物は現位置での記録を基本とした。ただし、微細な遺物は土層観察用ベルトを用いて区を設定し、一括して対応している。なお、堀跡はグリッドの層位ごとに取り扱った。

記録は25cm間隔の等高線による1:200の全体図、遺構は1:20の縮尺を基本に、平・断面図を作成した。なかでも堀跡と土塁は一体化して作図し、等高線を加えて表現している。写真撮影は、デジタルカメラ、リバーサルフィルム6×7判を使用した。この際調査区際の土塁については、可能な範囲で草刈りを行い形状がわかるように配慮している。空撮はドローンを用いて城郭遺構と全体終了時の2回実施した。

発掘調査は、7月29日から開始し、現況写真撮影後、重機を用いて表土除去に着手した。8月1日、精査及び遺構確認を行う。SD01は粘土・小礫で埋め戻され破城の可能性が生じる。2日、堀跡の掘り下げに取り掛かり、表土除去は6日に終了する。9月4日、連日の酷暑のため難航したが、SD01の規模が明らかになる。10月3日、空撮を行い、土塁の除去に着手する。7日、城郭以前の調査をはじめる。15日、台風19号の被害は事前の対策もあってか軽微であり調査を継続する。18日、土塁下の旧表土中より後期様式の古瀬戸製品が出土した。30日、水戸市教育委員会より、農林水産省関東農政局那珂川沿岸農業水利事業所立ち会いのもと終了確認を受け、11月1日、空撮を実施し現場調査を終了する。

整理調査は発掘調査によって得られた出土品及び記録類を対象として行った。出土品は遺物収納箱10箱分で、作業は、遺物水洗い・注記、図面・写真の整理、遺構図面の修正、遺物の接合及び分類・集計、実測、トレース、編集へと進めた。掲載遺物は135点である。なお、遺物の取り扱いはい例に示した。また、これと併行して土器に付着した有機化合物の自然科学分析を実施している。

整理調査は、終了書類を関係機関へ提出した後、11月11日、遺物の水洗いに着手し開始した。その後、注記及び接合、遺構図面修正を行い、遺構図面のトレースに取り掛かる。12月中旬には遺物の実測を開始、1月のトレース、編集を経て、調査資料を分析し報告書にまとめた。(間宮)



第3図 周辺の遺跡位置図 (1:25,000)

第1表 長者山城跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
024	アヲヤ遺跡	集落跡	縄文土器(早・中・後・晩)・石斧・石剣・土偶、土師器(古・奈・平)、須恵器	
026	西原遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	
029	安戸星遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古前)	
064	堀遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	前方後円(2)、円8(11)
080	西原古墳群	古墳群	土師器(古)、須恵器、鉄鏝・勾玉・管玉・丸玉・小玉・薬玉・銅環	前方後方1、円8(13)
088	安戸星古墳群	古墳群	ガラス玉	前方後方0(1)、円0(12)埋藏
098	台渡里廃寺跡	寺院跡	土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)、布目瓦・軒丸瓦・平瓦、土師質土器、内耳土器	
100	長者山城跡	城館跡		
121	渡里町遺跡	集落跡	縄文土器(早・中・後)、土師器(古)、須恵器	
210	仲根遺跡	集落跡	縄文土器(早・中・晩)・石製品・土製品、弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器(古・奈・平)	
276	台渡里官衙遺跡	官衙跡/集落跡	縄文土器(晩)、土師器(古・奈・平)、須恵器(古・奈・平)、軒丸瓦、平瓦、鉄製品(古)、内耳土器、磁器	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

水戸市は、日本最大を誇る関東平野の北東部に位置する。市域の北部には、八溝山地を横切り、鷲子山塊と鶴足山塊とを南北に分ち、西から東へ流れる那珂川とその支流により沖積台地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。東茨城台地はその西端で八溝山地の外縁にあたる丘陵へと続き、市域西部を形成している。茨城台地のうち、水戸市域にあたる部分を特に水戸台地と呼ぶことがあるが、この台地是那珂川とその支流によって開析された樹枝状の支谷により大きく4つに細分され、北西からそれぞれ上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地と呼ばれる。

長者山城跡は、その上市台地の北端に位置する標高30m程の台地縁辺部に立地する。台地に北面して田野川が西から東へ流れ、台地の北東縁辺に沿うように流れる那珂川に合流する。合流地点は台地の尽きるところにあり、ここから那珂川が大きく蛇行し、南東の鹿島灘へ向かい流れていく。

第2節 歴史的環境

長者山城跡とその周辺は、縄文時代から近世にかけて断続的に人々の生活が営まれてきた地域である。この地域では、奈良・平安時代の様相がしばしば注視されるが、それは長者山城跡と範囲を重複して立地する国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」を内包する台渡里廃寺跡、台渡里官衙遺跡が存在し、早くからその周辺に存在する関連集落が目目されてきたからにほかならない。

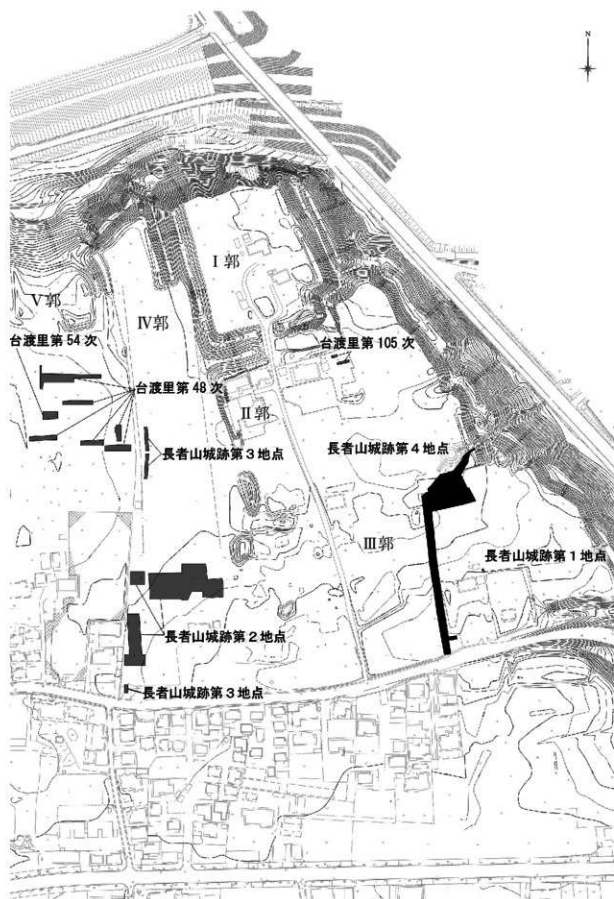
長者山城跡の西側に位置するアラヤ遺跡では、縄文時代早期後葉の堅穴状遺構8基が確認され、周辺に所在する西原遺跡、安戸星遺跡、渡里町遺跡などからは早期から晩期にかけての土器が万遍なく出土しており、縄文時代からの活発な土地利用がうかがわれる。

弥生時代は、土器の表面採集に留まる程度であり、今後の資料の蓄積が待たれるところである。

古墳時代を迎えると、前代同様集落が営まれるが、特筆すべきはこの地域における造墓活動であろう。台地縁辺という好立地もあってか、西原古墳群をはじめ、安戸星古墳群など、前期から終末期にかけて活発に古墳が築造されている。なかでも、前方後方墳を擁し、前期から終末期まで断続的に古墳が築造された西原古墳群や、那珂川流域でも最大級の規模を誇る中期の前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」を擁する愛宕山古墳群などは、該期における在り地首長の動態を探るうえで、また、次代へと続く権力の系譜を辿るうえで極めて重要である。

奈良・平安時代に至っては、台渡里廃寺跡、台渡里官衙遺跡群において、常陸国那賀郡衛及びその周辺寺院が造営され、直近に位置する堀遺跡は官衙に近接する関連集落としての性格を強く帯びるようになる。台渡里官衙遺跡を中心に堀遺跡と対になる位置には渡里町遺跡が存在し、灰軸陶器や瓦の出土がみられるなど、こちらも堀遺跡同様官衙関連集落としての特徴を示している。

当該地域における中世の様相としては、まずは台地縁辺部に春秋氏の居城として伝えられる長者山城が築かれたことが特筆される。長者山城跡における既往の調査については後述することとするが、その直近に立地するアラヤ遺跡、台渡里廃寺跡では瓦礫道が発見されており、長者山城跡との関連が指摘されている。また、台渡里廃寺跡では、15世紀～16世紀初頭のワカラケや内耳土器、播磨などが出土した井戸跡、寺院の堂宇に使用されていた礎石を落とし込んだ溝跡の発見が報告されている。平成26年度以降現在も継続して行っている国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」観音堂山地区の確認調査においても、溝跡などの中世に帰属する遺構群が発見されており、これらも同じく長者山城の築城に



第4図 長者山城跡の現況と調査地点位置図 (1:2,500)

はじまる土地利用との関わりのなかで理解すべきものであろう。

以降、近世に至るまで、当該地域の土地利用は連続とされており、国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」南方地区における範囲確認調査の際には、古代寺院の塔跡の掘込総地業上及びその周辺から、多数の中・近世の土器類とともに、五輪塔の部材、墓碑片などが出土している。この塔跡の南側では「咸平元寶」などの北宋銭や焼土・炭化物・骨粉を含む中世の火葬墓が集中して営まれている状況が確認されたことから、中・近世には古代寺院の塔跡が信仰の対象となっており、墓域としての土地利用があった可能性が指摘されている。また、前述の観音堂山地区では、拳大の円礫により構成される集石遺構が発見されており、17世紀後半の瀬戸・美濃産の陶器や波佐見産の磁器碗、17世紀後半の瀬戸・美濃産陶器大鉢、18世紀前半の肥前系磁器碗の出土が報告されている。同地では、遺構外の出土ではあるが、横乱坑から近世から近代にかけての製品とみられるカワラケとともに益子焼の土瓶や土人形（恵比寿）が出土しており、これらは間接的にはあるものの、当該地域における近世村落の成立が17世紀前半まで遡る可能性を示す資料との評価がなされている。台渡里遺跡では、厚手碗や銅銭・鉄銭を副葬した18世紀以降の近世墓が4基発見されており、該期の土地利用の一端をうかがうことができる。（米川）

第3節 長者山城跡の現況と構造

長者山城跡は、那珂川と田野川の合流点を臨む比高約20mの台地上に築かれた中世城郭である。遺跡の立地する台地上には古代において那賀郡衙が営まれ、周辺寺院を含めて台渡里官衙遺跡群と呼ばれるなど、主要部分は国指定史跡に指定されている。

また、当地は、古代東海道的那珂川の渡河地点にあたり、平安時代末期における富裕人の存在を示唆する「一盛（守）長者伝説」が伝わる。

長者山城については、良質な史料は残されておらず、全容は明らかとはいえない。一般には土塁や堀跡から、戦国時代に江戸氏家臣の春秋氏により築城され、春秋駿河守が在城し、天正18年（1590）、佐竹氏の攻撃を受けて江戸氏は没落、長者山城も終焉を迎えたと考えられてきた。

具体的な構造は、『水戸市史』をはじめ、『日本城郭大系』・『図説茨城の城郭』などの文献で紹介され、特に近年、五十嵐雄大氏により11の郭からなる縄張り図が提示されている。なお、第4図中の郭名称は『水戸市史』に準じた。

主郭は台地北東角のⅠ郭に相当し、宅地となっている。平面形態は東西約20m、南北約30mを測る長方形で、下草刈りがなされた良好な保存状態にある最大高5mの土塁と最大幅10mの堀により圍繞される。以下下位の郭を連ね、現在Ⅱ郭の一部は宅地、Ⅳ郭はゴルフ練習場であったものが太陽光発電施設となる。土塁は所々残存しており、二重土塁が多用されているようであるが、東側は藪となりわかりづらい。斜面については北側の台地裾を東流する田野川が堀の役目を果たし、斜面は複数の塹堀により守られている。一方、東側の斜面はさらに強固な防御線が構築され、土塁とそれに伴う横堀が良好な状態で残るなど、北及び東へ向けた防御の意識がくみ取れる。

全体としては少なくとも東西250m、南北350mの規模はあり、周辺をみると「宿屋敷」・「アラヤ」の地名が確認されることから外縁には「宿」が設けられ、城域はさらに広がるとみられる。構造からは長期間の使用がうかがわれ、当城のおかれた政治・軍事状況により、時期を経るにつれ拡大し、水陸交通の結節点を掌握する拠点の城郭に成長したものと理解される。（関宮）

第4節 長者山城跡における既往の調査

長者山城跡は、古くから春秋氏の居城として伝えられ、現在も一部の土塁・堀が現存し、往時の姿を偲ばせている。これまで、長者山城跡については、縄張り図の作成はあったものの、基本的には小規模な発掘調査が行われているのみであり、十分な調査成果が蓄積されてきたとは言えない状況にある。そのため、今般の発掘調査は長者山城跡における初の大規模調査であり、今後の調査・研究にとって大きな意義を持つものである。

長者山城跡の調査として地点名が振られているものは今般の調査を含め計4地点であるが、長者山城跡は国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」をその範囲内を含む台渡里官衙遺跡と重複していることもあって、台渡里官衙遺跡（群）の調査としての地点名を有するものも存在する。それらを含めると、当該遺跡の範囲内においては延べ7地点において調査が実施されたことになる。ここでは、これら長者山城跡として括られた範囲内における調査成果を概観する。

当該遺跡における調査は、その大半がトレンチによる試掘・確認調査であるが、全ての調査において、遺構・遺物の検出に至っている。第1地点で発見された遺構は古代に帰属すると考えられる溝跡であったが、台渡里官衙遺跡の範囲確認調査として実施された台渡里第48次・第54次調査では土坑・瓦礫道が、第105次調査では堀跡が発見されている。長者山城跡第3地点においても、土塁及び堀跡が発見されている。当該遺跡における既往の調査で唯一の本調査である長者山城跡第2地点では、中世に帰属する遺構として、堀跡2条、地下式坑3基、井戸跡8基（古代に帰属する可能性があるものも含まれる）、桶埋設遺構1基を中心として、多数の土坑・ピット群が切り合う状況で確認された。これらの遺構群は、陶器・磁器などの出土遺物から15世紀後半から16世紀代に形成されたものと考えられている。

それぞれの調査において、堀跡や土塁をはじめとする、長者山城を構成した構築物の一部を確認しているが、そもそも極めて巨大な構造物である城の調査としては、それでもまだ詳細な調査面積と言わざるを得ないのが現状である。そのため、長者山城跡における調査は、未だその途上にあると言わざるを得ず、今後、当該遺跡における調査成果の検討はもちろんのこと、周辺遺跡において発見されている該期の遺構群の様相も踏まえ、中世における長者山城とその周辺地域における土地利用について検討を進めねばなるまい。

(米川)

第2表 長者山城跡における既往の調査一覧

長者山城跡								
地点名	次数	種別	調査年度	調査箇所	調査原因	遺構	遺物	備考
第1地点	1	試掘	H17	渡里町3154-9、 3154-85	個人住宅建築	○	○	
	2	本調査	H18	渡里町3044-1ほか	個人住宅建築	○	○	
第3地点	1	試掘	H28	渡里町3044-1ほか	太陽光発電 施設建築	○	○	
	1	試掘	H30	渡里町3154-51ほか	湯水機場吐出し 水槽工事	○	○	今回調査地点
第4地点	2	本調査	H31/R1	渡里町3154-5ほか				

台渡里官衙遺跡（長者山城跡との重複範囲内）

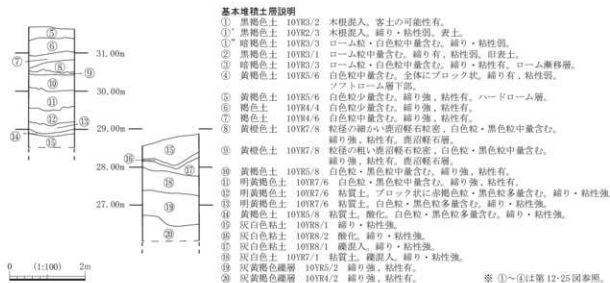
次数	種別	調査年度	調査箇所	調査原因	遺構	遺物	備考
第48次	確認	H20	渡里町3147ほか	範囲確認	○	○	
第54次	確認	H21	渡里町3119ほか	範囲確認	○	○	
第105次	試掘	H24	渡里町3154-65	個人住宅建築	○	○	

第3章 調査の成果

第1節 基本堆積土層

調査区は、那珂川右岸に形成された台地の東部縁辺に設定された。現在みられる調査区の地形は、東西方向がほぼ平坦、南北方向では北端の標高が32.00m、南端は29.25mとなり、約3mの高低差を持つ。基本堆積土層は、北部と南部の2カ所で、堀跡の壁面を利用して観察・記録した。

調査区は現在の揚水機場建設時に利用されていたようで、客土とみられる①層や攪乱が確認される。①'あるいは①"層を除去すると②層の旧表土層となる。旧表土の下を中心とした検出で、③層のローム漸移層、ソフトローム層、ハードローム層、鹿沼軽石層、粘土層へと続く。なお、今市・七本桜テフラは認められていない。調査区の大部分は削平を受けて、北部では③層のハードローム層、南部では④層の鹿沼軽石層あるいは下部の⑩層が遺構検出面となり、南へ向け大規模な地業が為されている。また、現在バス通りとなる道路は低く、堀跡が存在する可能性もある。

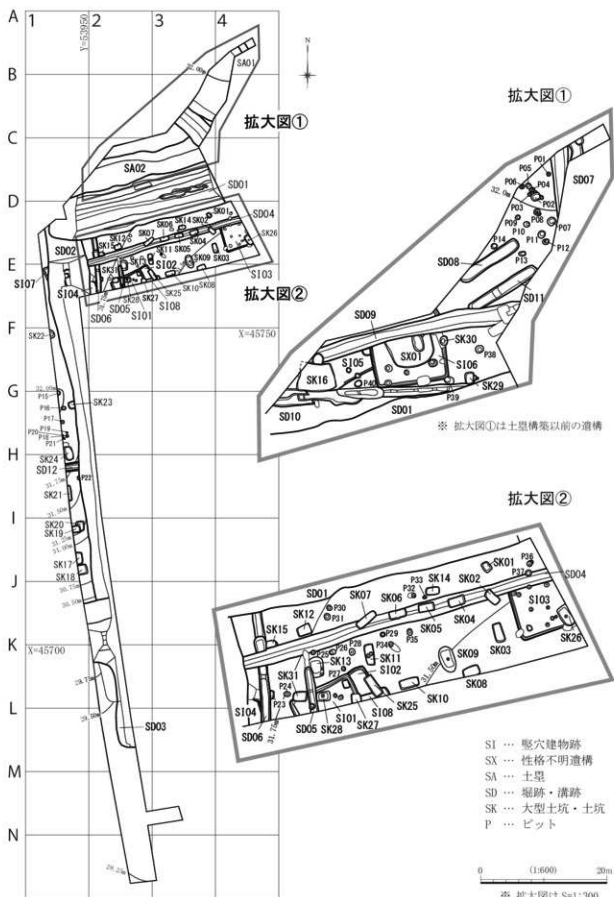


第5図 基本堆積土層

第2節 検出された遺構と遺物の概要

今次調査は、中世城郭と周知されている長者山城跡の中央東部の台地縁辺において実施され、陥穴とみられる縄文時代の土坑3基、7世紀前半～8世紀前半の堅穴建物跡8軒・性格不明遺構1基・溝跡5条・土坑4基・ピット4基、中世の土壘2条・堀跡3条・溝跡4条・大型土坑1基・土坑23基、ピット36基が発掘された。古代に帰属する堅穴建物跡の多数は7世紀末～8世紀前半に位置付けられ、鉄滓に混じり埴埴や羽巾、炉壁、漆の付着した土器が出土し、製鉄（精錬）と金属加工、漆工房が営まれていた。一方、中世では数時期にわたる変遷が確認され、複数の土壘や堀跡の大掛かりな防衛施設が調査された。特に、16世紀末の堀跡（SD01）は、幅7.20m、深さ4.67mの規模で、人為的に埋め戻されるなど、長者山城は破城が実施され終焉を迎えたことを示している。

遺物は、縄文時代早期を最古に、前・中・後期、弥生時代後期、古墳時代末～奈良・平安時代、中世に帰属するものが得られた。総数は997点を数え、収納箱10箱分に相当する。



第6図 第4地点第2次調査全体図

※ 拡大図①は S=1:300

第3節 先史時代

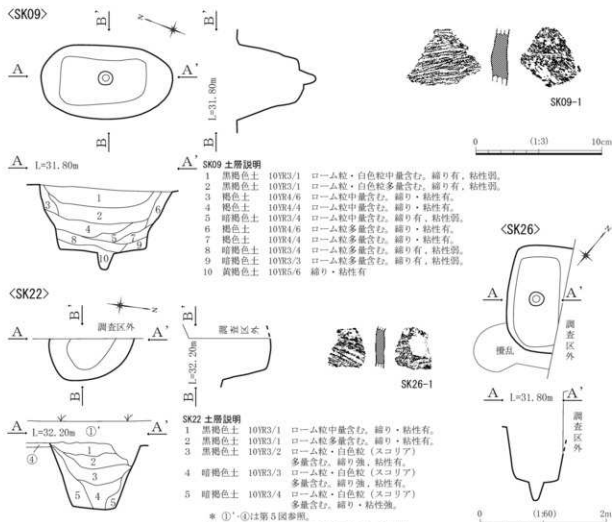
(1) 土坑

SK09 (第7図, 第5表, 図版2・12)

調査区北部, D・E-3グリッドに位置する。平面は楕円形で, 陥穴と判断した。規模は東西1.13m, 南北2.07m, 深さ1.04mを測り, 主軸方向はN-20°-Wを示す。底面は平坦で, 中央に直径22cm, 底面からの深さ23cmのビットを伴い, 壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は底面に黄褐色土が覆い, 中層に暗褐色土と褐色土, 上層に黒褐色土の堆積が確認される。いずれもローム粒の含有が顕著で良く締まる。遺物は茅山式の土器片が1点出土した。時期は縄文時代早期である。

SK22 (第7図, 図版2)

調査区中央部, F-1グリッドに位置し, 西部部分の1/2以上が調査区外になる。平面は円形基調で, 陥穴と判断した。検出範囲の規模は東西0.94m, 南北0.70m, 深さ1.05mを測り, 主軸方向を東西に仮定するとN-47°-Wを示す。底面は平坦で, 壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は下層に暗褐色土, 上層に黒褐色土が堆積し, 下層にはスコリアとみられる白色粒が確認され堅く締まっていた。遺物は出土していない。時期は覆土がSK26に類似することから縄文時代早期である。



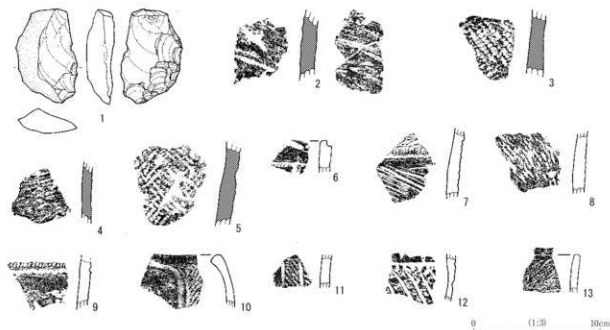
第7図 SK09-22・26, SK09-26 出土遺物

SK26 (第7図, 第5表, 図版2・12)

調査区北部, D-4 グリッドに位置する。東部分の一部が調査区外になる。S103と重複し本跡が古い。平面は隅角に丸味を持つ長方形で, 陥穴と判断した。規模は東西0.90m以上, 南北1.70m, 深さ0.88mを測り, 主軸方向はN-30°-Wを示す。底面は平坦で, 中央に直径22cm, 深さ30cmのピットを伴い, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は下層に黄褐色土, 中層に暗褐色土と褐色土, 上層に黒褐色土が堆積し, ローム粒を含有する。さらに下層にはスコリアとみられる白色粒が確認され, 堅く締まっていた。遺物は茅山式の土器片が1点出土している。時期は縄文時代早期である。

(2) 遺構外出土遺物 (第8図, 第5表, 図版12)

今次調査において大きな面積を占めるのは中世の堀跡であり, 堀跡からは中世以外の遺物が多く出土している。ここでは, 遺構に伴わない縄文, 弥生時代の遺物を報告する。なお, 縄文土器の全量は41点, 弥生土器は図示した1点のみである。縄文土器は, 早期茅山式, 前期黒浜式・浮島Ⅱ式・粟島台式, 中期加曾利EⅢ式, 後期称名寺Ⅱ式・加曾利B2式の資料を実測した。1は縄文時代早期以降に比定される二次加工のある剥片で, 縦長剥片を素材とし, 右下に調整痕が認められる。石材は那珂河流域の遺跡でみられる流紋岩(メノウの集合岩)である。2は茅山式の胴部片で, 表裏両面に貝殻条痕文を施す。3・5は単節縄文により羽状を構成し, 4は無節縄文を施文する黒浜式の一群である。6・7は変形爪形文と沈線文を施した浮島Ⅱ式, 8・9は粟島台式の胴部片に比定される。10は加曾利EⅢ式で, 緩やかな波状口縁となり, 逆U字状の沈線区画と単節縄文により文様を構成する。11は沈線区画内に単節縄文を充填する称名寺Ⅱ式の胴部片, 12は沈線下に刺突列と斜行沈線を施した加曾利B2式の土器である。13は弥生土器の口縁部片で, 口唇部と外面に附加条1種縄文が確認され後期に比定される。



第8図 先史時代遺構外出土遺物

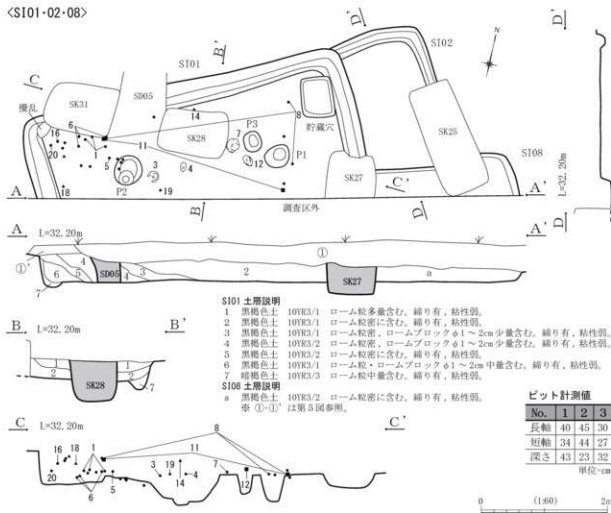
第4節 古代

(1) 竪穴建物跡

SI01 (第9・10・11図, 第5・6表, 図版2・12・13)

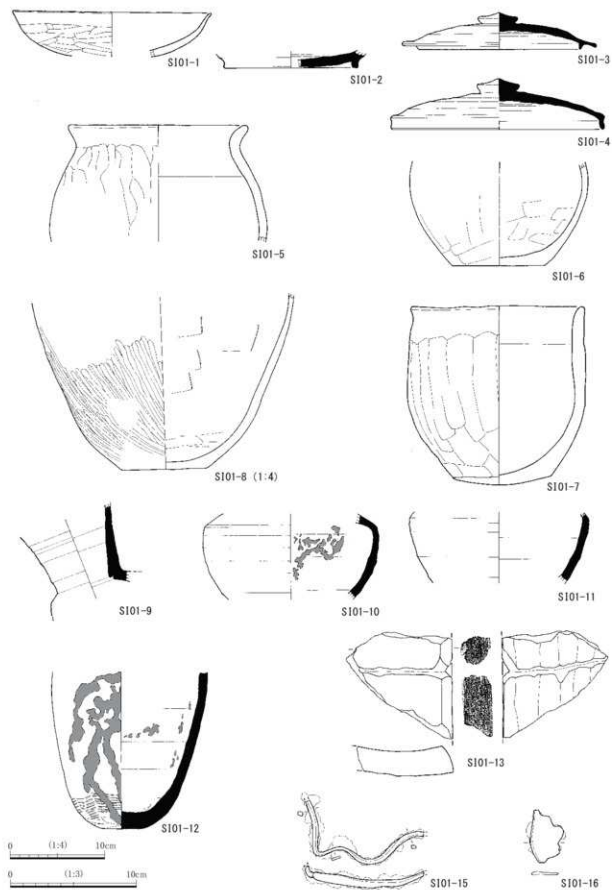
調査区北部, E-2 グリッドに位置する。南部分の1/2以上が調査区外になる。SI02・08, SD 05, SK27・28・31と重複し, SD05, SK27・28・31より古く他よりも新しい。平面は方形と判断され, 東西に主軸を仮定するとN-65°E方向を示す。規模は東西5.33m, 南北2.43m以上, 深さは0.35mを測る。覆土は黒褐色土を主体とする。床面はローム層中に構築された直床で, 全体に平坦となって中央部が硬化している。壁は垂直に立ち上がり, 幅15~30cm, 深さ3~10cmの壁溝が全周する。ピットは3本が検出され, P1・2が主柱に相当し, 黒褐色土が覆う。北東角に東西50cm, 南北65cm, 深さ20cmの貯蔵穴が位置し, ローム粒・ロームブロック・炭化粒を含む暗褐色土が堆積する。火処は検出されないが, 柱と貯蔵穴の位置を考慮すると東カマドの可能性が高い。遺物は西部分の床面にまとり, 土師器の坏・甕, 須恵器の坏・蓋・壺・瓶類, 平瓦, 鉄釘・不明鉄製品, 羽口, 鉄滓, 炉壁, 砥石など89点が出土した。1の坏は扁平で口縁部は外反し, 蓋にはかえりを持つものとないが共存する。鍛冶炉は確認できないが, 羽口, 鉄滓(321.4g), 炉壁(305.3g)が出土し, 漆が付着した9の平瓶, 10・11・12の壺・瓶類がある。時期は8世紀初頭である。

<SI01-02-08>



第9図 SI01-02-08

第3章 調査の成果



第10図 S101 出土遺物 (1)

SI02 (第9図, 図版2)

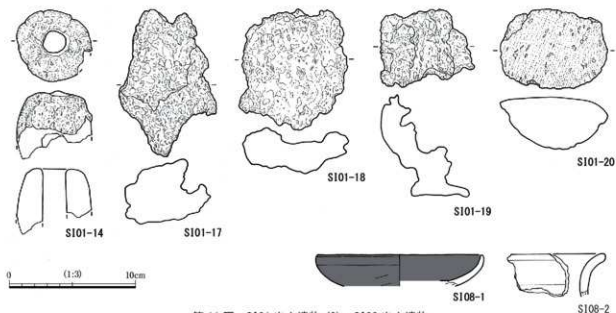
調査区北部, E-2 グリッドに位置する。SI01・08, SK25・27と重複し本跡が最も古い。大半を壊され床面のみを検出である。平面は方形と判断され, 南北に主軸を仮定するとN-30°-W方向を示す。規模は東西1.35m以上, 南北2.80m以上を測る。床面はローム層中に構築された直床で, 全体に平坦であり, 幅15~23cm, 深さ5cmの壁溝が巡る。ピット及び火処は検出されていない。遺物は床面から土師器の甕1点が出土している。時期は遺物と遺構間の重複関係から古墳時代末とみられる。

SI03 (第12図, 第6表, 図版3・13)

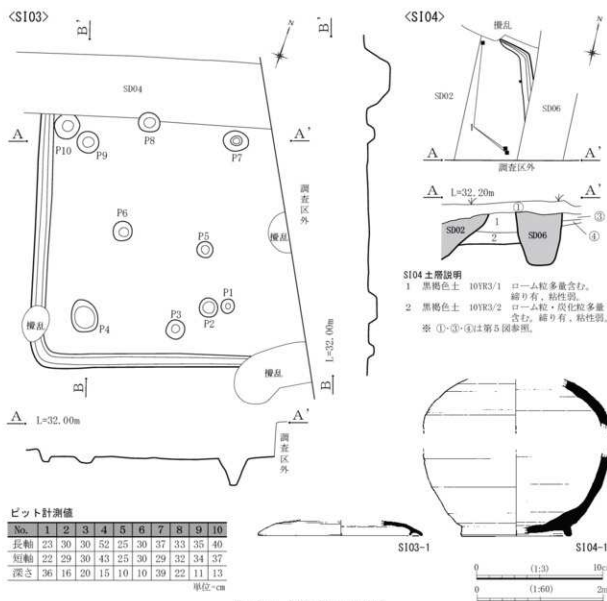
調査区北部, D-4 グリッドに位置する。東部分の1/3程が調査区外になる。SD04, SK26と重複し, SK26より新しいもののSD04よりは古く北部分を壊される。平面は壁溝から方形と判断され, 南北に主軸を仮定するとN-18°-W方向を示す。規模は東西4.35m以上, 南北はSD04内に北壁が存在していたと考えられ, 最大で4.65mとなる。なお, 中世以降の削平で掘り込みは失われている。床面はローム層中に構築された直床で, 全体に平坦であり, 部分的に硬化する。幅20cm, 深さ4~10cmの壁溝が全周している。ピットは10本が検出され, その覆土は壁溝とともに黒褐色土を主体とする。遺物は床面及び壁溝より土師器の坏・甕, 須恵器の蓋が合計5点出土した。1の須恵器の蓋はかえりを持つ。時期は蓋の型式学的編年から7世紀末~8世紀初頭である。

SI08 (第9・11図, 第7表, 図版2・14)

調査区北部, E-2・3 グリッドに位置する。南部分の大半が調査区外になる。SI01・02, SK25・27と重複し, SI01, SK25・27より古くSI02よりも新しい。平面は方形と判断され, 東西に主軸を仮定するとN-75°-E方向を示す。規模は東西2.25m以上, 南北0.67m以上, 深さは0.23mを測る。覆土はローム粒の含有が顕著な黒褐色土を主体とする。床面はローム層中に構築された平坦な直床で, 壁は垂直気味に立ち上がる。壁溝及びピット, 火処は検出されていない。遺物は土師器の坏2点・甕2点が床面から出土した。1の土師器の坏は器高が低く器壁は厚い。2の土師器の甕は口唇部を丸く収めている。時期は遺物からSI01に先行し, 7世紀後半とみられる。



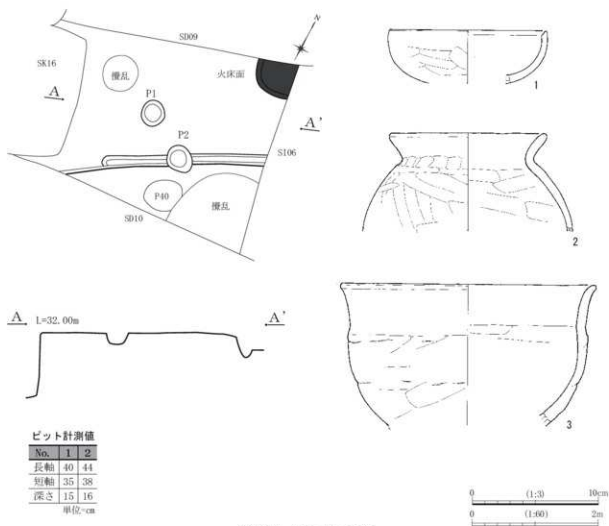
第11図 SI01出土遺物(2)・SI08出土遺物



第12図 SI03-04. 出土遺物

SI04 (第12図, 第6表, 図版3・13)

調査区北部、E-1・2グリッドに位置する。南側1/2以上が調査区外になる。SD02・06と重複し、本跡が最も古く西側をSD02に大きく壊されている。平面は残存する壁が直線状であることから方形と判断され、南北に主軸を仮定するとN-17°-W方向を示す。規模は東西1.05m以上、南北1.82m以上、深さは0.50mを測る。覆土はローム粒の含有が顕著な黒褐色土を主体とし、下層には炭化粒を多量に含む。床面はローム層中に構築された直床で、全体に平坦であり硬化する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、幅7~14cm、深さ8cmの壁溝が巡る。ビット及び火処は確認されていない。遺物は流れ込みとみられる縄文土器の他、壁際の床面から須恵器長頸甕の可能性の高い壺・瓶類2点が出土した。この2点は同一個体になると推定されるが接合はしない。内外面及び割れ口に漆が付着し、漆の輪送用容器と考えられる。時期は遺物から8世紀と判断した。



第13図 S105. 出土物

S105 (第13図, 第6表, 図版3・13)

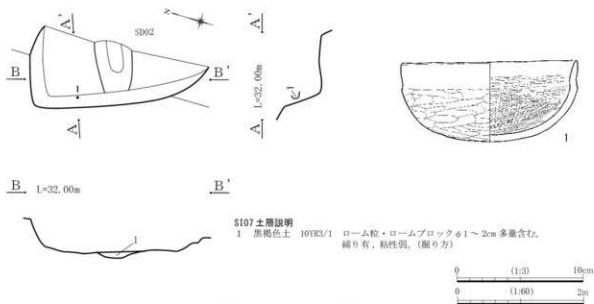
調査区北部, C-2グリッドに位置する。土壁下からの検出である。この他S106, SD09, SK16と重複し, 本跡が最も古く遺存状態は悪い。平面は残存する壁が直線状であることから方形と判断され, 東西に主軸を仮定するとN-60°-E方向を示す。規模は東西4.00m以上, 南北2.20m以上, 調査区際の土層断面にみる深さは0.38mを測る。覆土はローム粒を顕著に含有した暗褐色土が床面を覆い, 上層に黒褐色土が堆積する。床面はローム層中に構築された平坦な直床で, 全体にわたり硬化する。壁は南壁のみ残存し, 僅かな立ち上がりである。壁下に幅15~17cm, 深さ5~10cmの壁溝が巡る。ビットは2本が検出され, その覆土は黒褐色土を主体とし, ローム粒・ロームブロックを顕著に含む。直接火処は認められないが, 東壁際に火床面とみられる円形の掘り込みが確認でき, 東カマドの可能性が高い。遺物は流れ込みとみられる縄文土器を除くと, 床面より土師器の坏・鉢・甕, 須恵器の坏・盤が合計20点出土した。1は口唇部内面が面を為す土師器の坏である。2は土師器の甕, 3は大振りで器高がやや低めなため甕よりも鉢に考えたものである。時期は遺物から7世紀末~8世紀初頭と判断した。

S106 (第15・16・17図, 第6表, 図版3・4・13・14)

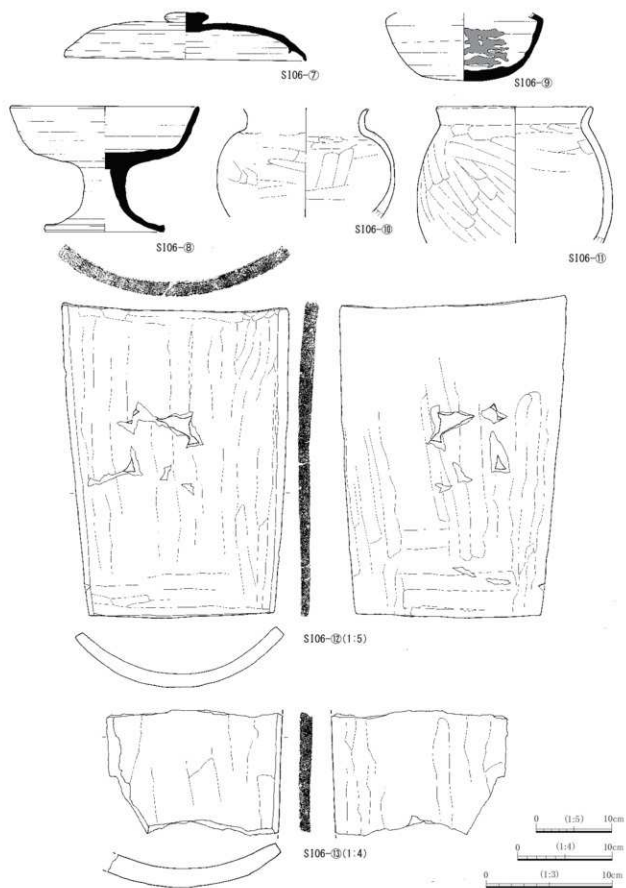
調査区北部, C-2・3グリッドに位置する。土壁下の検出である。S105, SX01, SD09, SK30, P39と重複し, S105より新しいもの他よりは古い。ただ, SX01の機能時に本遺構の一部が利用された可能性もあり遺物は混在する。平面は方形で, 南北に主軸を仮定するとN-8°-W方向を示す。規模は東西5.80m, 南北5.40m以上, 深さは0.40mを測る。覆土はローム粒・ロームブロック・黒褐色土ブロックの含有が顕著な暗褐色土を主体とする。床面はローム層中に構築された直床で, 全体に平坦で硬化する。壁は垂直気味に立ち上がり, 壁下に幅15~20cm, 深さ8~13cmの壁溝が巡る。ピットは4本が検出され, P1・2が主柱を構成し, 対を為すピットはSD09内に存在したとみられる。ピットの覆土は黒褐色土が主体で, P1内からは⑫の平瓦が出土している。火処は確認されておらず, 遺物は流れ込みの縄文土器を除くと土師器の坏・甕・甗, 須恵器の坏・甕・高坏・蓋・壺・瓶類・甕, 平瓦が合計89点出土した。ただし, SX01との境が不明瞭なため垂直分布によって判断した部分もあり, 若干の増減があるかもしれない。土師器の坏は小型化している。⑪は主として内面に漆が付着し, 漆塗りのパレットに用いられていた。須恵器の蓋にはかえりがある⑦が確認できる。⑨は長頸壺とみられる壺・瓶類で, 内外面及び割れ口に漆が付着する。⑫・⑬の平瓦は表裏両面がヘラケズリされ, 同一の生産地である。時期は7世紀末とおきたい。

S107 (第14図, 第7表, 図版4・14)

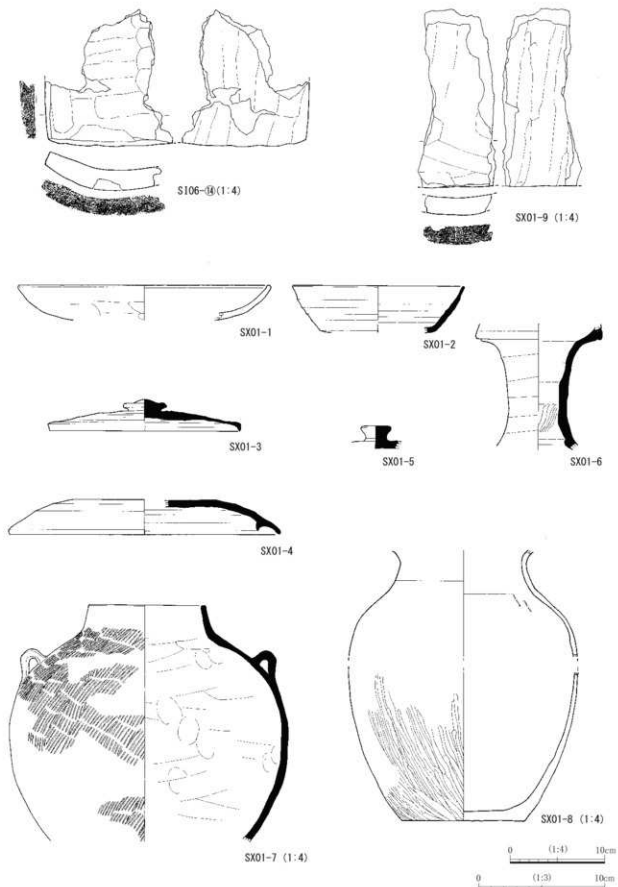
調査区北部, E-1グリッドに位置する。SD02と重複し, 大半をSD02に壊され遺存状態は悪い。平面は北西の隅角が確認されたことにより方形と判断される。南北に主軸を仮定するとN-17°-W方向を示す。規模は東西1.25m以上, 南北2.80m以上, 最も遺存状態の良い北西部で深さは0.53mを測る。覆土はローム粒の含有が顕著な暗褐色土を主体とする。床面は平坦であるが, 黒褐色土を用いて部分的に10cm程の厚さで床を貼っていた。壁は垂直気味に立ち上がる。壁溝, ピット, 火処は確認されなかった。遺物は覆土中より土師器の坏1点の出土である。本資料は容量があり, 口縁部と体部との境ににぶい稜を持つ。時期は遺物を重視すると7世紀前半である。



第14図 S107, 出土遺物



第16図 S106出土遺物(2)

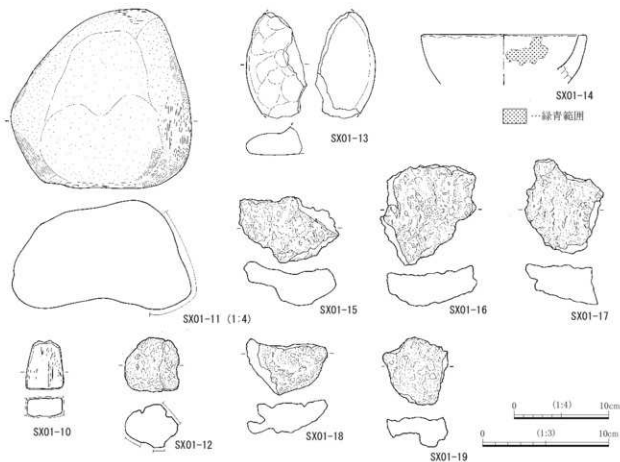


第17圖 S106出土遺物(3), SX01出土遺物(1)

(2) 性格不明遺構

SX01 (第15・17・18図, 第7表, 図版3・4・14)

調査区北部, C-2・3グリッドに位置する。土塁下の検出である。炉及び被熱の痕跡は確認できないが, 製鉄関連遺物の出土と砂質土から工房跡に関係する可能性がある。SI06, SD09と重複し, SI06より新しくSD09よりは古い。平面は隅角に丸味を持った方形と判断され, 上部は大きく開くがSI06との境は不明瞭である。砂質土の堆積状態と出土遺物からSI06の床面の一部を利用した可能性がある。さらに, 底部は東側に一段低く平面楕円形の掘り込みを伴う。SK30も本遺構に伴うかもしれない。南北に主軸を仮定するとN-18°-W方向を示す。規模は東西3.65m, 南北2.50m以上, 調査区際の土層観察での深さは0.45mを測る。覆土は床面と南側から灰黄褐色の砂質土が確認され, 遺構の大部分をローム粒の含有が顕著な黒褐色土が覆う。砂質土には少量ながら焼土粒を含む。床面はローム層中に構築された直床で, 長楕円形の掘り込みへ向け緩やかに傾斜する。この掘り込みは東西0.83m, 南北1.43m, 深さ0.26mと, 東西0.83m, 南北1.00m, 深さ0.14mの2基である。古代の遺物は, 土師器の坏・甕・甕, 須恵器の坏・蓋・長頸壺・双耳壺・甕, 平瓦, 埴輪・埴埴蓋, 砥石, 鉄滓(100g), 炉壁(570g)が合計102点出土している。この他泥岩や片岩が確認される。なお, 砂質土中の遺物及び鉄滓や炉壁は本遺構に帰属すると判断した。出土遺物には甕が確認され, 須恵器の坏には新しい様相がうかがわれる。ただし, 4の蓋は新治窯跡群産でかえりを持ち, SI06に帰属する可能性もある。9の平瓦は表裏両面をヘラケズリし, SI06-⑫・⑬と同一産地とみられる。11の砥石は金床石に使用可能な大型である。時期は8世紀前半としておきたい。



第18図 SX01 出土遺物(2)

(3) 溝跡

SD05 (第19図, 第7表, 図版4・14)

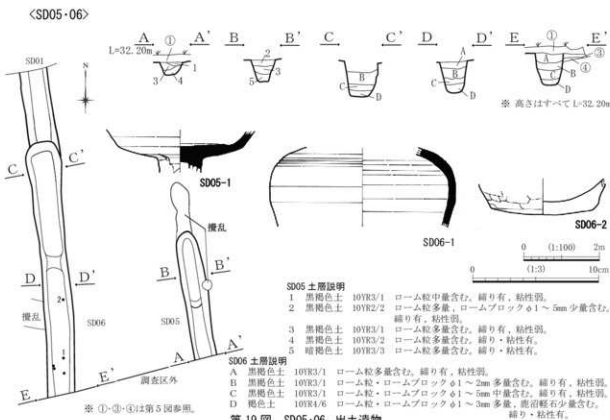
調査区北部を南北方向に、南の調査区外へと直線状に延びSD06と併走する。SI01, SK13・28・31と重複し、SI01, SK13より新しくSK28・31よりは古い。検出全長は3.40mで、走行方向はN-9°-Wを示す。断面形状は箱形である。規模は上端幅0.68m, 下端幅0.32m, 深さ0.34~0.65mを測り、底面は北が低く16cmの高低差を持つ。覆土は黒褐色土を基本とし、北部分の底面に暗褐色土が覆う。遺物は土師器の甕, 須恵器の高坏, 羽口が合計5点出土した。時期は8世紀前葉以降である。

SD06 (第19図, 第7表, 図版4・14)

調査区北部を南北方向に、南の調査区外へと直線状に延びSD05と併走する。SI04, SD01・04, SK15, P23と重複し、SI04, SK15, P23より新しくSD01・04よりも古い。北側はSD01に壊され、SD01内で本遺構は止まる。検出全長は8.70mで、走行方向はN-8°-Wを示す。断面形状は箱形である。規模は上端幅0.70~0.80m, 下端幅0.40~0.53m, 深さ0.48~1.04mを測り、中央部が深くなる。覆土は底面に褐色土, その上に黒褐色土を主体とした堆積が確認され、埋め戻しと判断される。古代の遺物は、上層を中心に土師器の坏・甕, 須恵器の坏・壺・瓶類・甕が合計19点出土した。1の長頸甕は上層, 2の甕は下層から得られている。時期は8世紀前葉以降である。

SD08 (第20図, 図版4)

調査区北部を東西方向にSD11と併走する。検出全長は5.70mで、走行方向はN-55°-Eを示し、断面形状は箱形である。規模は上端幅0.94m, 下端幅0.65m, 深さ0.53~0.66mを測り、底面は平坦となるが、北へ向け緩やかに低くなる。高低差は13cmである。覆土は黒褐色土の堆積を基本とする。遺物は出土していない。時期は掘り込み層位から古代とみられる。

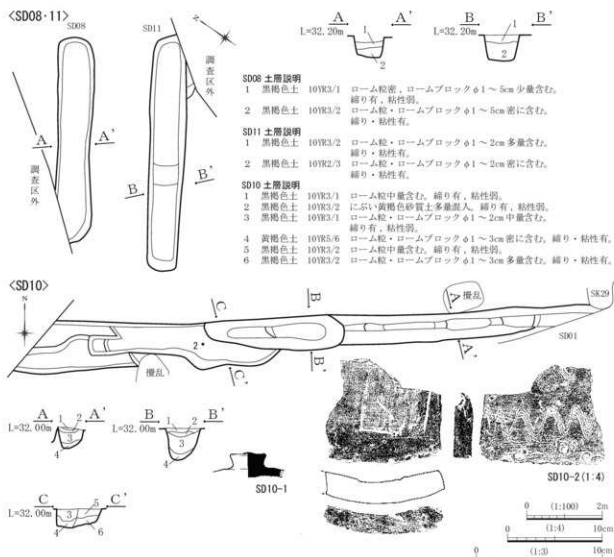


SD10 (第20図, 第7表, 図版5・14)

調査区北部を東西方向へ直線状に延び、土塁下の検出である。SD01, SK16・29と重複し本跡が最も古く、東側はSD01に横され、西側は調査区外になる。検出全長は15.55mで、走行方向はN-90°を示す。断面形状は箱形である。規模は上端幅0.82～1.38m, 下端幅0.28～0.73m, 深さ0.55～0.85mを測り、部分的に深くなる。覆土は底面に黄褐色土, その上に黒褐色土が堆積し, 上部にSX01と同じ砂質土が覆う。人為的な埋め戻しである。遺物は縄文土器の他土師器の甕, 須恵器の杯・壺・蓋・瓶類, 平瓦が合計17点出土した。1の須恵器蓋はC-2グリッドの上層, 2の平瓦は西部中層の出土であった。時期はSX01と同じ砂質土が覆うことから8世紀前半以前の古代である。

SD11 (第20図, 図版4)

調査区北部を東西方向に、東の調査区外へと直線状に延びる。SD09と重複し本跡が古い。検出全長は6.18mで、走行方向はN-55°-Eを示す。断面形状は箱形である。規模は上端幅0.94m, 下端幅0.62m, 深さ0.52～0.73mを測り、中央部が最も深い。覆土は黒褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しである。古代の遺物は、下層より土師器甕の細片2点が出土した。時期は古代である。



第20図 SD08・10・11, SD10 出土遺物

(4) 土坑

SK13 (第21図, 図版5)

調査区北部, E-2 グリッドに位置する。SD05と重複し本跡が古い。平面は隅角に丸味を持つ長方形である。規模は東西1.05m, 南北1.62m, 深さ0.53mを測り, 主軸方向はN-5°-Wを示す。底面はほぼ平坦で, 壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土が3層に分層される。古代の遺物は坏・壺・甕, 須恵器の坏・壺・瓶類, 鉄滓が合計11点出土した。時期は古代である。

SK15 (第21図, 図版5)

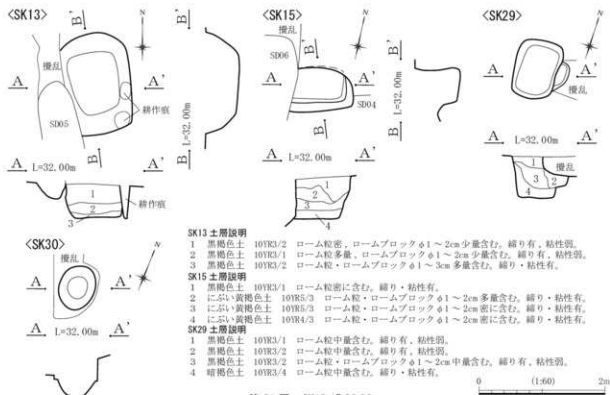
調査区北部, D-2 グリッドに位置する。SD04・06と重複し本跡が最も古い。平面は隅角に丸味を持つ長方形である。規模は東西0.97m以上, 南北0.70m, 深さ0.65mを測り, 主軸方向はN-78°-Eを示す。底面はほぼ平坦で, 壁は垂直気味に立ち上がる。覆土はにぶい黄褐色土を主体とし, 上部に黒褐色土が覆い, 人為的な埋戻しと判断される。遺物は出土していない。時期は古代である。

SK29 (第21図, 図版5)

調査区北部, C-3 グリッドに位置する。SD10と重複し本跡が新しい。平面は方形である。規模は東西0.90m, 南北0.95m, 深さ0.65mを測り, 主軸方向はN-0°を示す。底面は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦で, 二段に掘り込まれ, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は底面に暗褐色土が堆積し, 黒褐色土が覆う。遺物は出土していない。時期は重複関係から古代である。

SK30 (第21図, 図版5)

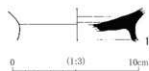
調査区北部, C-3 グリッドに位置する。上部を擾乱され遺存状態は悪い。SI06と重複し本跡が新しい。配置からSK01と関わる可能性がある。平面は楕円形で, 規模は東西0.55m, 南北0.70m, 深さ0.60mを測り, 主軸方向はN-0°を示す。底面は中央が深く, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土はローム粒を含有した黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は古代である。



第21図 SK13-15-29-30

(5) ビット (第6・22図, 第3・7表, 図版5・14)

調査では遺構に伴わない単独のビットが40基確認され、P11・23・37・40の4基が古代に帰属する。平面は円形, 楕円形, 方形が混在し, 覆土はローム粒・ロームブロックの含有が顕著な黒褐色土を主体とする。遺物はP11から須恵器の坏1点, P23から流れ込みの縄文土器片が1点出土している。



第22図 P11出土遺物

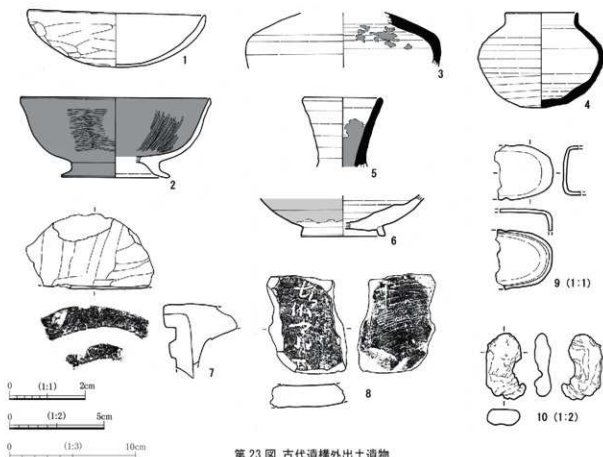
第3表 古代ビット一覧表

()は残存額 単位=cm

No.	位置	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ	主な覆土	No.	位置	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ	主な覆土
11	B-4	円形	円筒形	60×53×35	黒褐色土	37	D-4	円形	円筒形	51×48×36	黒褐色土
23	E-2	方形	直方形	56×(30)×56	黒褐色土	40	C-2	楕円形	杭状	60×46×52	黒褐色土

(6) 遺構外出土遺物 (第23図, 第7・8表, 図版14・15)

古代に帰属し遺構に伴わない遺物を報告する。1・2は土師器の坏である。2はロクロ成形で高台を伴い, 今次調査の古代において最新遺物になる。3～5は須恵器の壺・瓶類で, 3・5には漆が付着する。4は小型壺である。6は高台と軸の状態から灰軸陶器の壺類と判断した。7は軒丸瓦の内区が失われた瓦当部片で, 内区を太い圈線で囲む。なお, 紙面上の制約から写真(図版16)で報告したが, 未掲載の平瓦の凸面には格子目及び縄叩きが確認される。8は「土師部小口」の可能性のある文字瓦である。9・10はSK31の上層から出土した銅製品で, 9は小型の鈍尾, 10は時期不明であるが, 質量があり熔解した銅のインゴットとみられる。



第23図 古代遺構外出土遺物

第5節 中世

(1) 土塁

SA01 (第24・25図, 第8表, 巻頭図2, 図版6・15)

調査区北東端部に位置する。台地縁辺部に地形に沿いながらN-27°-Wの南北方向に遺存し、外側の斜面には大規模な横堀を伴う。今次調査では土塁の一部分をトレンチ状に掘り下げ、構築状況の記録を採った。構築にあたっては、旧表土を斜面側のみ除去し、芯となる第13層には堀の掘削により得られた礫を積み上げ、第10・12層の黒色土と第11層の明黄褐色土を緩和材とし、さらに第9層灰黄褐色の粘質土で覆い、崩壊を防止していた。一方、Bラインの土層観察では、SA02に用いられている土砂と類似した堆積が観察されるなど、両者は接続していたとみられる。土塁の基底部幅(敷)は8.00m、旧表土上の残存高は1.50mを計測する。なお、土塁下からSD07が検出されている。遺物は土師質土器の播鉢1点、内耳鍋1点が出土した。1は外面に煤が付着する播鉢で、鍋に転用使用されている。構築時期は明らかではないが、長者山城廃絶まで機能したとみられる。

SA02 (第24・26・27・28図, 第8表, 巻頭図版2, 図版6・15)

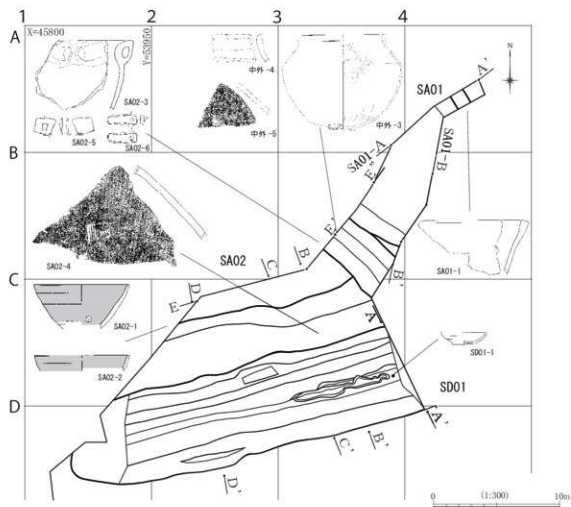
調査区北端部に位置する。N-74°-Eの東西方向に構築され、南にSD01が併走する。現況は削平を受け、頂部が平坦となった僅かな高まりを認めるのみで、1/3は調査区外になる。さらに、西側の調査区際に明瞭な土塁は確認できず、約4mの空間を持って西へ直線状に再び延びる。東端はSA01に接続すると想定されるが、溝状の現代の攪乱により壊されていた。調査区内の確認現長は17.70mで、調査では横断の南北方向に3カ所、縦断の東西方向に1カ所を断ち割り構築技法の記録を採った。構築にあたって旧表土は除去していない。基本的な積み方は、外側へ向け傾斜した状態を示し、芯には黒褐色土が確認され、ロームブロックや鹿沼軽石の含有が顕著な黄褐色土や褐色土・黒褐色土を層状に積み上げ、ローム粒・粘土ブロック・鹿沼軽石を含有したにぶい黄褐色土で覆い、崩壊を防止していた。土塁の基底部幅(敷)は6.50m以上、旧表土上の残存高は0.80～1.00mを計測する。なお、土塁下からは古代に帰属するSI05・06, SX01, SD10, 中世のSD09, SK16が検出されている。遺物は縄文時代、古代を除き中世に帰属するものでは、古瀬戸の平碗3点、常滑の甕6点、ロクロ成形の土師質土器皿1点・内耳鍋4点、時期不明であるが鉄製品2点が出土している。特に1・2の古瀬戸製品の平碗は旧表土上面からの出土で、後期様式I～III期に比定される。この遺物を重視すると、旧表土は14世紀末～15世紀前半には形成されていたと考えられる。構築の時期は遅くとも16世紀末で、長者山城の廃絶まで機能している。

(2) 堀跡

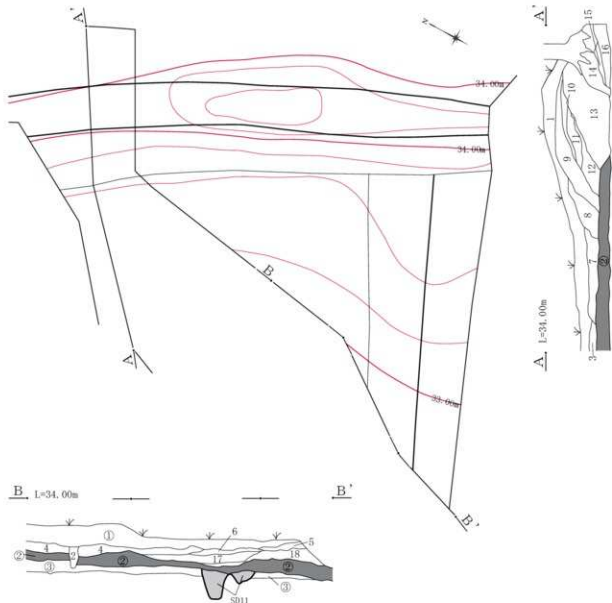
SD01 (第24・26・27図, 第8表, 巻頭図版2, 図版6・7・15)

調査区北部を直線状に東西方向へ横断する。東端は調査区外となりさらに延び、西端はD-1グリッドで止まる。この部分については新旧関係を把握するため土層断面図の作成を試みたところ、崩落があり記録できなかった。ただ土層観察においてSD02が古いことは確認できた。また、溝跡のSD06・10と重複し本跡が最も新しい。検出された全長は24.50mで、走行方向は、N-74°-Eである。北側に土塁のSA02を伴い、水平方向を基準とした壁の傾斜角度は北の土塁(SA02)側が65°、南側が60°で、形状は中央部が最も深くなる「U」字状である。いわゆる毛拔堀の範疇に含まれるとみられる。北壁の中位に方形の掘り込み、南部分の上位に段を持つ。前者は城郭構築以前の地下式坑などの大型遺構の可能性があり、後者は構築時の掘り過ぎと判断した。上端幅は7.20m、下端幅は0.60～1.30m、深度は東端の調査区際で4.50m、西端で4.67mを測る。底面は凹凸が激しいが東西の高低差はなく一定

する。埋没状況の記録は土塁と一体化させ3ヵ所を設定した。これによると基本的には、下層は塁壁及び土塁の崩落による自然堆積層が確認され、中層は砂質土、上層は礫を混入した人為的な埋戻しである。SD02と重複部分に近い西側では南北両側から交互に埋め戻され、全体として上部を粘土・礫を含有させるなど強固な状態であった。調査当初この状況は『水戸市史』の堀の開口をうかがわせる記述から現代の埋め戻しを考えたが、堀跡の両側より土砂が投げ込まれたDの土層断面によって、機能停止後早い段階で行われた破城の痕跡と理解した。また、南側には粘土の含有が顕著であり、南側に土塁を伴っていたことが明らかである。ただし、土量からすると小型土塁と判断される。古代の遺物は多いものの中世の遺物は、土師質土器皿の1点のみであった。中世に帰属する遺物が少ない事実は、掘削から廃絶までの時間が短かったと判断される。報告した1は東側の第68層からの出土で、ロクロ成形の小型品である。口縁部の肥厚は弱いもののナデによる稜が比較的上部に僅かに認められている。時期は出土遺物から16世紀末には機能していた。



第24図 SA01-02, SD01 全体図と遺物の分布

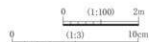


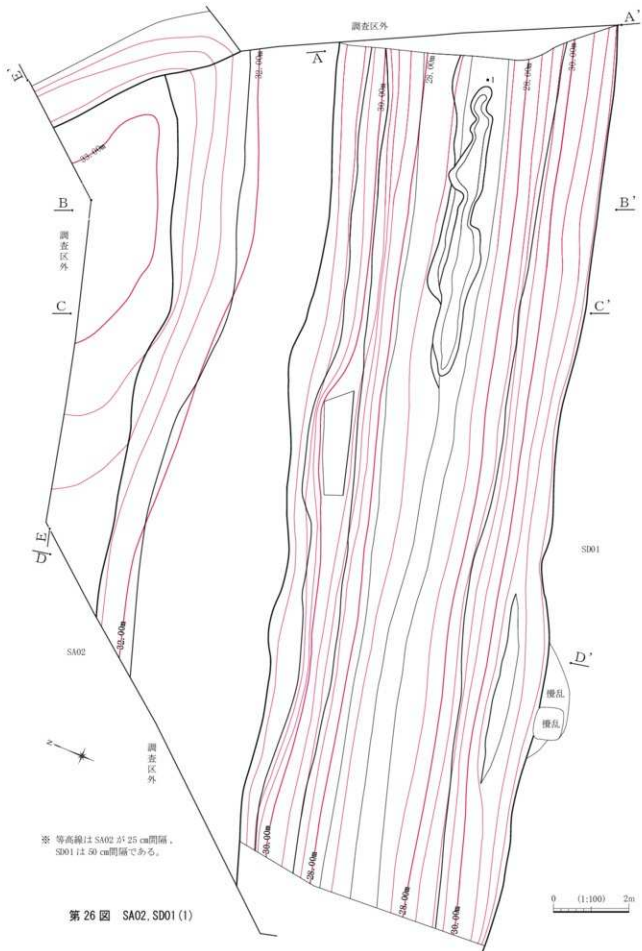
SA01 土層説明

- 1 黒褐色土 10YR2/3 小礫密に含む。木根混入。締り・粘性弱。黄土。
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒・粘土粒多量。締り・粘性弱。
- 3 黒褐色土 10YR2/3 小礫多量含む。締り有。粘性弱。
- 4 黒褐色土 10YR2/3 粘土粒多量。小礫少量含む。締り有。粘性弱。
- 5 黒褐色土 10YR3/1 粘土粒少量含む。締り有。粘性弱。
- 6 黒褐色土 10YR3/3 ローム粒・炭屑軽石多量含む。締り・粘性有。
- 7 黒褐色土 10YR2/3 小礫密。粘土粒多量含む。締り有。粘性弱。
- 8 黒褐色土 10YR3/1 小礫・粘土粒少量含む。締り有。粘性有。
- 9 灰黄褐色土 10YR6/2 粘質土。小礫多量含む。締り強。粘性有。
- 10 黒色土 10YR2/1 ローム粒中量含む。締り・粘性弱。
- 11 明黄褐色土 10YR6/6 ロームブロックφ1~30cm・黒色土中量含む。ローム土主体。締り有。粘性弱。
- 12 黒色土 10YR2/1 ロームブロックφ1~3cm少量含む。締り有。粘性弱。
- 13 に近い黄褐色土 10YR6/3 粘質。締り強。粘性なし。
- 14 黒色土 10YR2/1 ローム粒中量。小礫少量含む。締り有。粘性弱。
- 15 灰黄褐色土 10YR5/2 粘質土。締り・粘性強。
- 16 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒多量。粘土粒少量含む。締り・粘性有。
- 17 黒色土 10YR2/1 ロームブロックφ1~3cm少量含む。締り有。粘性弱。
- 18 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒・ロームブロックφ1~2cm・炭屑軽石密に含む。黒色土混入。締り・粘性有。

※ ①・②・③は第5図参照。

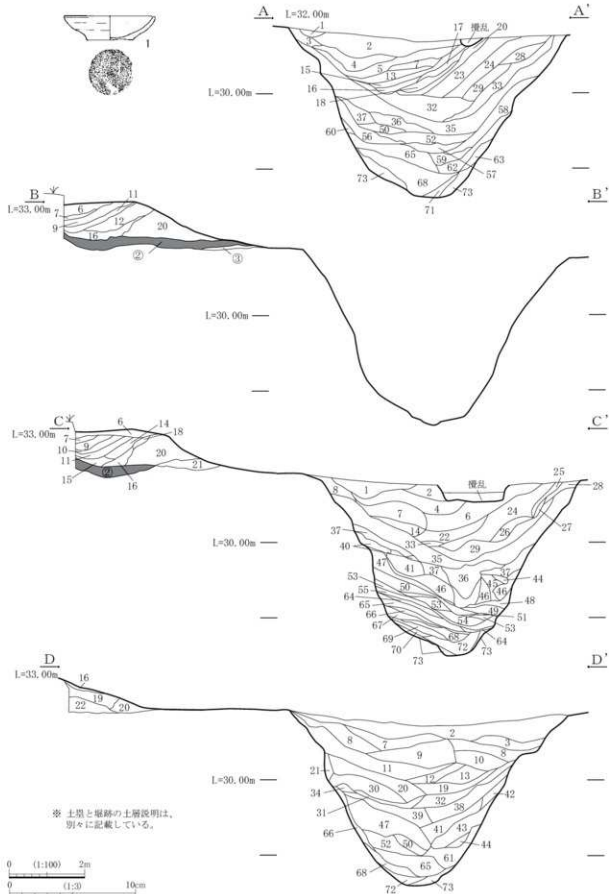
第25図 SA01. 出土遺物





※ 等高線は SA02 が 25 cm 間隔、
SD01 は 50 cm 間隔である。

第 26 図 SA02, SD01 (1)

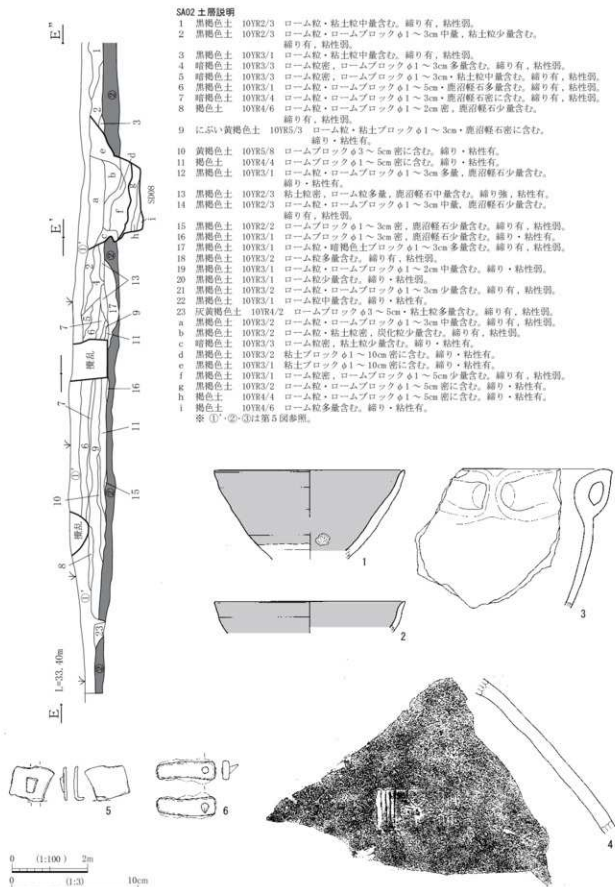


第27図 SA02, SD01 (2), SD01 出土遺物

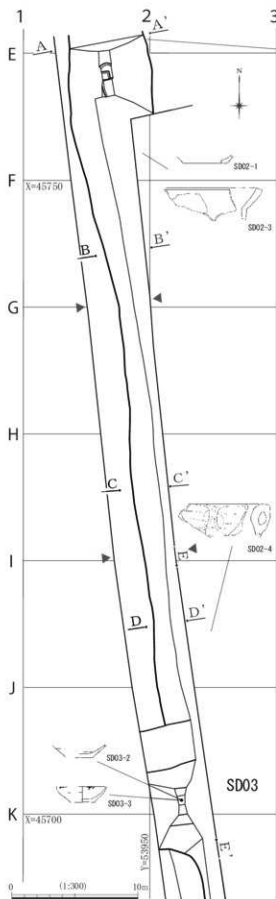
第3章 調査の成果

SD01 土層説明

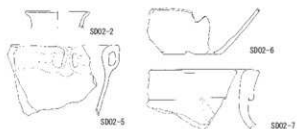
- 1 黒褐色土 10YK3/1 ローム状微塵を含む。締り有、粘性弱。
- 2 暗褐色土 10YK3/4 ローム状・粘土ブロックφ1～3cm中を含む。締り強、粘性有。
- 3 暗褐色土 10YK3/3 ローム状、炭泥層石少量含む。締り有、粘性弱。
- 4 暗褐色土 10YK3/3 ローム状、粘土ブロックφ1～3cm・粘土ブロックφ1～3cm中、炭泥層石中を含む。締り強、粘性有。
- 5 黒褐色土 10YK3/1 ローム状・粘土粒多量、炭泥層石中を含む。締り・粘性有。
- 6 灰黄褐色土 10YR6/2 小礫密に含む。締り強、粘性なし。
- 7 褐色土 10YR4/1 粘質土。粘土状。ローム状中量、炭泥層石少量含む。締り強、粘性有。
- 8 暗褐色土 10YK3/3 ローム状多量含む。締り有、粘性弱。
- 9 褐色土 10YR6/1 粘土ブロックφ3～10cm・小礫密に含む。締り・粘性強。
- 10 暗褐色土 10YK3/4 ローム状多量。粘土粒中を含む。締り有、粘性弱。
- 11 黒褐色土 10YK3/2 ローム状多量。炭泥層石中を含む。締り・粘性弱。
- 12 褐色土 10YR4/6 ローム状・粘土粒少量含む。締り有、粘性弱。
- 13 灰黄褐色土 10YR4/2 粘質土。ローム状多量、炭泥層石少量含む。締り・粘性強。
- 14 灰黄褐色土 10YR4/2 粘質土。炭泥層石中を含む。褐色土混入。締り・粘性有。
- 15 黒褐色土 10YK3/2 ローム状・粘土粒多量、炭泥層石少量含む。締り・粘性強。
- 16 黒褐色土 10YK3/1 ローム状・粘土粒多量、炭泥層石微塵含む。締り・粘性強。
- 17 褐色土 10YR4/4 ローム状・粘土粒多量含む。締り・粘性有。
- 18 褐色土 10YR4/4 ローム状・粘土粒中量含む。締り・粘性有。
- 19 灰黄褐色土 10YR4/2 粘質土。粘土粒・粘土ブロックφ1～3cm中量、炭泥層石少量含む。締り・粘性強。
- 20 黒褐色土 10YK3/2 ローム状多量。炭泥層石中量含む。締り・粘性弱。
- 21 黒褐色土 10YK3/1 炭泥層石多量含む。締り有、粘性弱。
- 22 灰黄褐色土 10YR6/2 粘質土。粘土ブロックφ1～5cm多量、炭泥層石・小礫中量含む。締り・粘性強。
- 23 近い黄褐色土 10YR7/2 粘土状、炭泥層石多量含む。締り・粘性有。
- 24 褐色土 10YR4/1 粘土状・小礫中量含む。締り・粘性強。
- 25 近い黄褐色土 10YR7/2 粘質土。締り・粘性強。
- 26 褐色土 10YR6/1 砂質土。粘土粒・炭泥層石中量含む。締り・粘性弱。
- 27 近い黄褐色土 10YR7/2 粘土状・炭泥層石多量含む。締り有、粘性弱。
- 28 近い黄褐色土 10YR7/2 粘土状・小礫密に含む。締り強、粘性弱。
- 29 褐色土 10YR6/1 粘土状・炭泥層石多量含む。締り・粘性強。
- 30 黒褐色土 10YR2/2 ローム状・炭泥層石少量含む。黒色土混入。締り有、粘性弱。
- 31 褐色土 10YR4/6 ローム状・炭泥層石中量、粘土粒少量含む。締り有、粘性弱。全体にボンボン。
- 32 灰黄褐色土 10YR4/2 粘質土。粘土ブロックφ1～10cm中、炭泥層石少量含む。締り・粘性強。
- 33 暗褐色土 10YK3/4 ローム状・粘土粒多量含む。締り・粘性有。
- 34 黒褐色土 10YK3/1 黒色土混入。締り有、粘性弱。
- 35 黒褐色土 10YR2/3 ローム状中量。炭泥層石少量含む。締り有、粘性弱。
- 36 黒褐色土 10YR2/2 ローム状多量。炭泥層石少量含む。締り有、粘性弱。
- 37 黒褐色土 10YR2/2 ローム状多量含む。締り・粘性弱。
- 38 灰黄褐色土 10YR4/2 粘質土。粘土ブロックφ1～10cm密に含む。締り・粘性強。
- 39 褐色土 10YR4/6 ローム状密。粘土粒・炭泥層石中量含む。締り・粘性有。
- 40 近い黄褐色土 10YR4/3 ローム状多量含む。締り有、粘性弱。全体にボンボン。
- 41 灰黄褐色土 10YR4/2 粘質土。粘土ブロックφ5～10cm中、炭泥層石少量含む。締り・粘性強。
- 42 黒褐色土 10YK3/1 砂質土。ローム状多量含む。締り有、粘性弱。
- 43 黄褐色土 10YR5/6 砂質土。小礫・砂粒密に含む。締り強、粘性なし。
- 44 暗褐色土 10YK3/4 砂質土。ローム状密に含む。締り有、粘性弱。
- 45 暗褐色土 10YK3/3 ローム状・炭泥層石中量含む。締り・粘性弱。
- 46 暗褐色土 10YK3/3 ローム状中量含む。締り強、粘性弱。
- 47 暗褐色土 10YK3/4 ローム状・炭泥層石多量、粘土粒少量含む。締り・粘性弱。
- 48 近い黄褐色土 10YR4/3 ローム状・炭泥層石多量含む。締り強、粘性弱。
- 49 黒褐色土 10YR2/2 ローム状多量、ロームブロックφ1～3cm中量、粘土粒少量含む。締り強、粘性弱。
- 50 黒褐色土 10YR2/2 ローム状多量、炭泥層石少量含む。締り有、粘性弱。全体にボンボン。
- 51 近い黄褐色土 10YR4/3 ローム状多量、炭泥層石少量含む。締り有、粘性弱。
- 52 黒褐色土 10YR2/3 ローム状多量。粘土粒少量含む。締り有、粘性弱。
- 53 近い黄褐色土 10YR4/3 ローム状・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締り有、粘性弱。全体にボンボン。
- 54 近い黄褐色土 10YR5/3 ローム状多量。炭泥層石少量含む。締り有、粘性弱。
- 55 黒褐色土 10YR2/1 ローム状・ロームブロックφ1～3cm・炭泥層石少量含む。締り・粘性弱。
- 56 暗褐色土 10YK3/4 ローム状多量含む。ローム土混入。締り有、粘性弱。
- 57 褐色土 10YR4/4 ローム状多量含む。褐色土混入。締り有、粘性弱。
- 58 褐色土 10YR4/6 ローム状密に含む。締り有、粘性弱。
- 59 褐色土 10YR4/6 ローム状中量含む。締り有、粘性弱。
- 60 暗褐色土 10YK3/4 粘土ブロックφ1～3cm密に含む。締り・粘性有。
- 61 黄褐色土 2.5Y5/3 砂利層。締り強、粘性弱。
- 62 黒褐色土 10YR2/3 砂質土。ローム状密に含む。締り有、粘性弱。
- 63 黒褐色土 10YR2/3 砂質土。ローム状多量含む。締り有、粘性弱。
- 64 近い黄褐色土 10YR5/3 ローム状・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締り有、粘性弱。全体にボンボン。
- 65 暗褐色土 10YK3/4 ローム状多量。炭泥層石微塵含む。締り・粘性弱。
- 66 黒褐色土 10YR2/3 ローム状・炭泥層石多量含む。締り・粘性弱。
- 67 黒褐色土 10YR2/2 ローム状・炭泥層石少量含む。締り・粘性弱。全体にボンボン。
- 68 黒褐色土 10YR2/2 ローム状・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締り・粘性有。
- 69 近い黄褐色土 10YR5/4 ローム状・粘土ブロックφ1～5cm中量、炭泥層石少量含む。締り・粘性強。
- 70 近い黄褐色土 10YR4/3 ローム状・炭泥層石多量含む。締り・粘性強。
- 71 褐色土 10YR4/4 ローム状多量含む。締り・粘性有。
- 72 黒褐色土 10YR2/2 ローム状・炭泥層石多量、粘土粒少量含む。締り・粘性強。
- 73 黄褐色土 10YR5/6 ローム状・粘土粒・炭泥層石多量含む。鉄分沈着する。締り・粘性強。



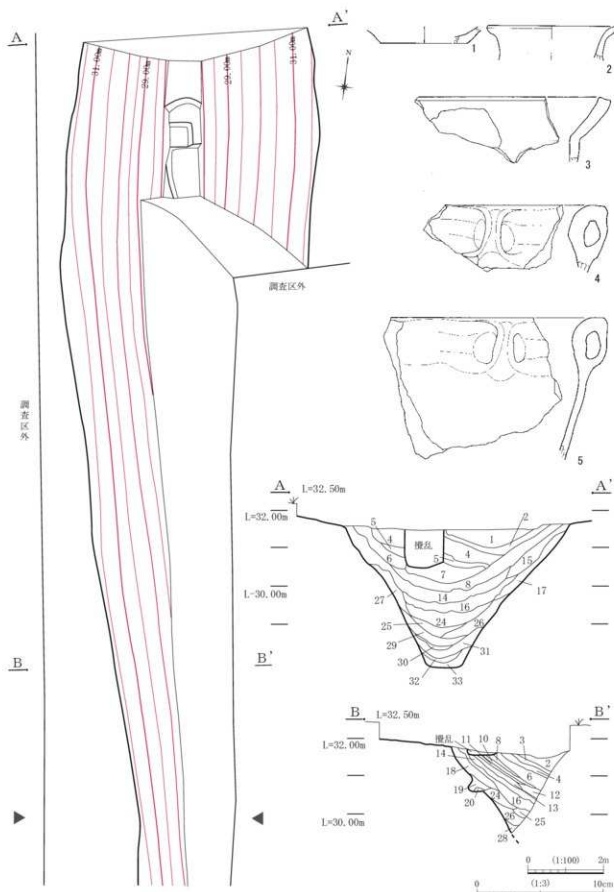
第28図 SA02. 出土遺物



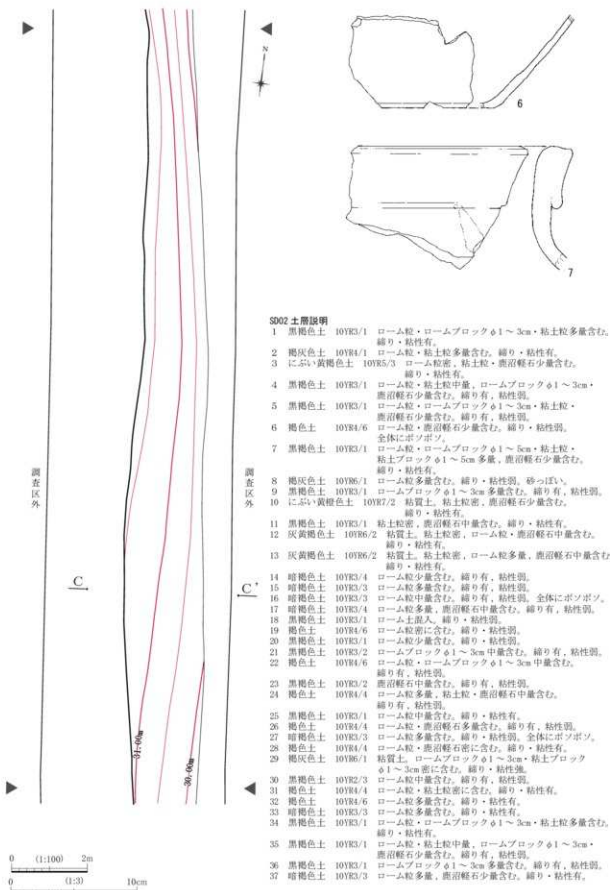
第29図 SD02 全体図と遺物の分布

SD02 (第29・30・31・32図, 第8表,
巻頭図版2, 図版7・8・15)

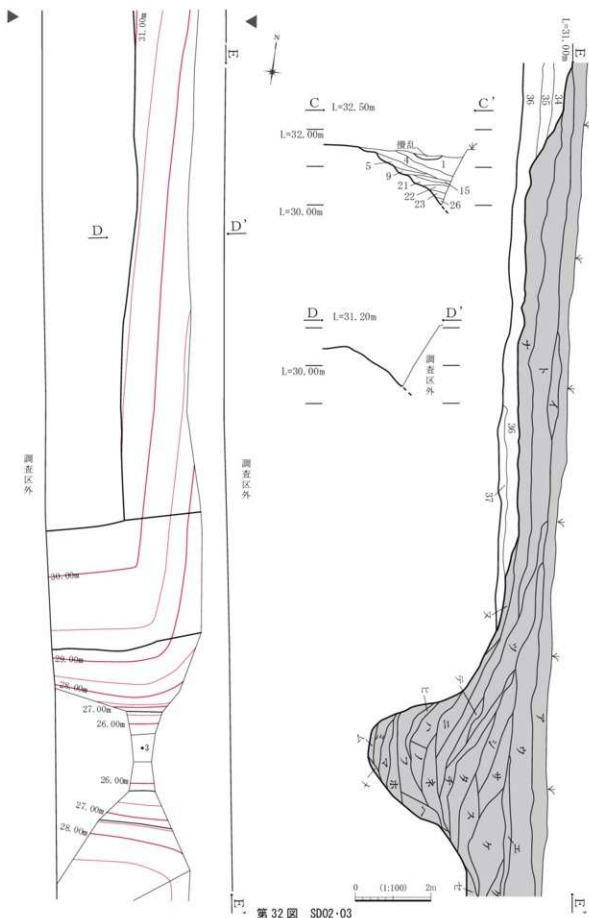
調査区を直線状に南北方向へ縦断し、南端はSD03、北端はSD01により壊されている。形態が把握できたのはE-1グリッド部分であり、東部分の大半は調査区外になる。また、堀跡の他SI04・07, SD04・12, SK23, P22と重複し本跡が新しい。検出全長は54.00m、走行方向はN-8°-Wである。断面にみる水平方向を基準とした傾斜角度は両壁とも53°で、形態は明瞭な底面を持つものの幅は狭く、葉研塚の範略に含まれるとみられる。上端幅は6.65m、下端幅は0.80m、深度は北端で3.65mを測る。底面が検出されたのは長さ3.70mの範囲でしかないが起伏がある。埋没状況の記録は横断して3ヵ所と、SD03との新旧関係把握のため調査区際を利用して行った。下層には壘壁及び土塁の崩落による自然堆積層が確認され、上層は人為的な埋め戻しである。ただし、南部分にはSD03の堆積土層である第9層が確認されることからSD03の廃絶時期まで南の西壁際は溝状に開口していた。中世の遺物は、常滑製品の甕1点、土師質土器皿1点・香炉1点・内耳鍋9点である。1はロクロ成形の土師質土器の皿、2は土師質土器の香炉で、袴腰香炉の口縁部片である。3～6は内耳鍋で良く使用されている。7は常滑の甕で縁部部が頭部に接合することから11型式に比定される。時期は堆積土層を考慮し、SD03以前の16世紀後半とした。



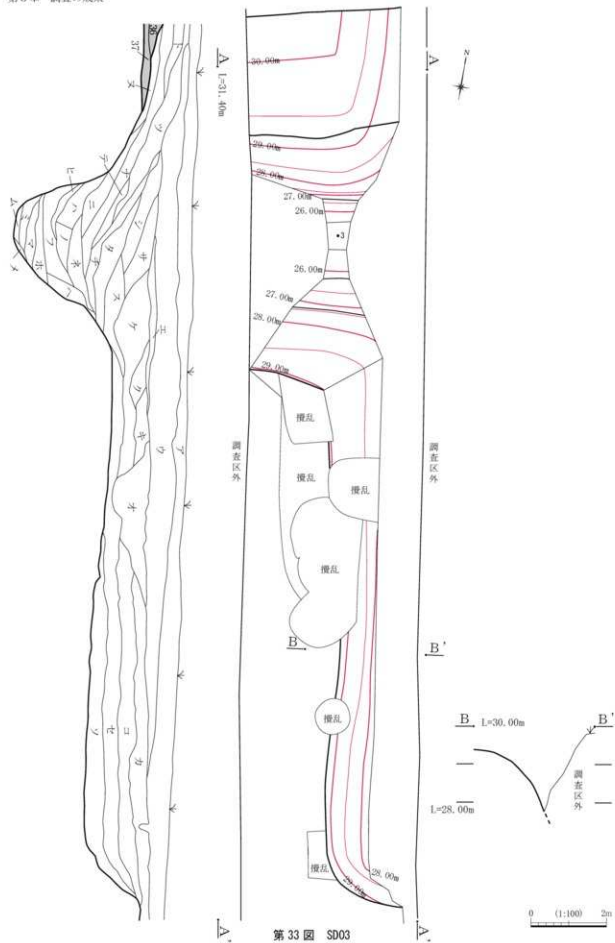
第30図 SD02. 出土遺物 (1)



第31図 S002. 出土遺物(2)



第32図 SD02-03



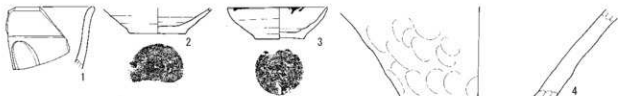
第33図 S003

SD03 (第32・33・34図, 第8・9表, 巻頭図版2, 図版7・8・15)

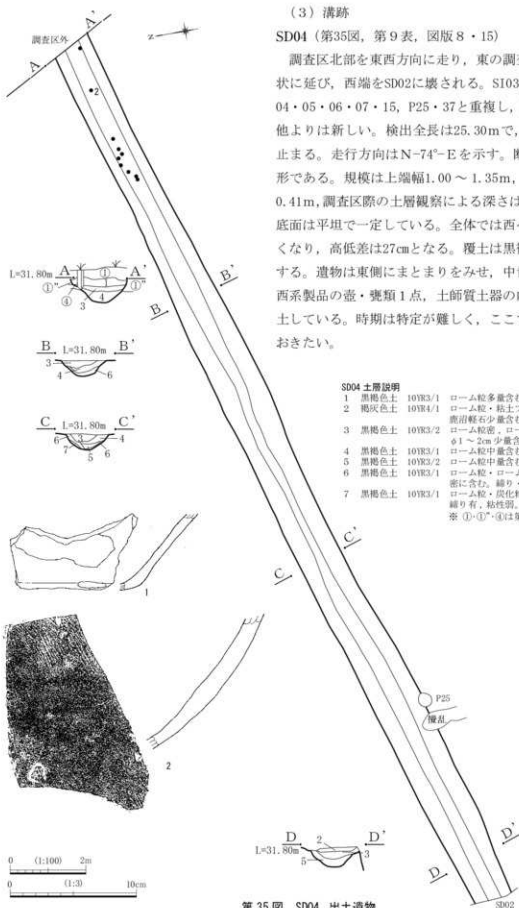
調査区南部を直角に2度折れて東西方向へ横断し、両端は調査区外となってさらに延びる。形態が把握できたのは僅かな範囲であり、大半は調査区外となる。SD02と重複し本跡が新しい。検出されたのは東西5.00m, 南北13.50mの合計18.50mで、走行方向は、N-82°-EからN-9°-W, そして再び東へ向きを変え10mの横次を掛ける。調査区内に土塁の痕跡は検出されなかったが、東西の調査区外に土塁の残存が認められる。特に西側は二重土塁となっている。断面にみる水平方向を基準とした傾斜角度は北側が70°, 南側が51°で、中央部が最も深く「U」字状である。SD01と同じく毛拔堀の範疇に含まれるとみられるが、本遺構は北側の上部が大きく開く。上端幅は6.40m, 下端幅は0.90m, 北側を基準とした深度は3.40mを測る。僅かな検出範囲の底面をみると、礫層に掘り込まれてやや起伏がある。埋没状況は調査区際を利用し南北方向に記録した。これによると基本的には、下層は鼠壁の崩落による自然堆積層が確認され、中層は砂質土、上層は礫を混入した人為堆積である。全体として強固な埋め戻しであり、SD01と同じく破城の痕跡と理解した。中世の遺物は、貿易陶磁の青磁蓮弁文鉢1点, 常滑製品の捏鉢1点, 土師質土器の皿2点・内耳鍋1点である。1の青磁蓮弁文鉢は、南端のL-2グリップの上層から出土した龍泉窯系の製品で、千葉県木更津市の真里谷城跡に類似がある。2・3は口クロ成形の土師質土器の皿であり、形態では2の方が古い。3は底面から出土した小型品で、SD01-1と類似する。4の常滑の捏鉢は体部下半の残存となっており、型式は不明である。時期は3の遺物から16世紀末には機能していたと位置付けたい。

SD03 土層説明

ア 暗褐色土 10YR5/3	小礫多量含む。締り有、粘性弱。客土。	チ 灰黄褐色土 10YR5/2	粘質土。小礫中量含む。締り・粘性強。
イ 黄褐色土 10YR5/6	小礫密に含む。締り有、粘性弱。客土。	ツ 黒褐色土 10YR3/1	ローム粒・粘土ブロックφ1~2cm・小礫密に含む。締り・粘性強。
ウ 暗褐色土 10YR3/3	小礫・鹿沼軽石密に含む。締り強、粘性弱。	テ 褐色土 10YR4/4	ローム粒・粘土ブロックφ1~2cm多量含む。締り・粘性強。
エ 黒褐色土 10YR3/2	砂質土。砂粒密に含む。締り有、粘性弱。	ト 黒褐色土 10YR3/2	ローム粒・小礫多量含む。締り有、粘性弱。
オ にぶい黄褐色土 10YR5/4	礫層。小礫密に含む。締り強、粘性弱。	チ 灰黄褐色土 10YR6/2	砂質・粘土ブロックφ1~2cm密に含む。締り強、粘性有。
カ 暗褐色土 10YR3/4	小礫多量含む。締り強、粘性弱。	ニ 褐色土 10YR4/6	ローム粒多量、小礫少量含む。締り・粘性弱。全体にボソボソ。
キ にぶい黄褐色土 10YR5/4	小礫中量含む。締り弱、粘性弱。	ヌ 暗褐色土 10YR3/4	ローム粒多量含む。締り有、粘性弱。
ク にぶい黄褐色土 10YR5/3	小礫・鹿沼軽石中量含む。締り強、粘性弱。	ネ 黒褐色土 10YR3/1	小礫密に含む。締り強、粘性弱。
ケ 暗褐色土 10YR3/4	小礫・鹿沼軽石密に含む。締り強、粘性弱。	ノ 黒褐色土 10YR2/2	小礫密に含む。締り強、粘性弱。
コ 暗褐色土 10YR3/3	小礫多量含む。締り強、粘性弱。	ハ 灰黄褐色土 10YR4/2	ローム粒中量、小礫少量含む。締り有、粘性弱。
サ 黒褐色土 10YR2/3	ローム粒・ロームブロックφ1~3cm・小礫中量含む。締り有、粘性弱。	ヒ 灰黄褐色土 10YR5/2	粘土粒密に含む。締り・粘性有。
シ 黒褐色土 10YR3/1	ローム粒・ロームブロックφ1~3cm・鹿沼軽石中量含む。締り有、粘性弱。	フ 暗褐色土 10YR3/4	小礫多量含む。締り有、粘性弱。
ス 黒褐色土 10YR3/2	ローム粒・ロームブロックφ1~5cm・鹿沼軽石中量含む。締り弱、粘性有。全体にボソボソ。	ブ 灰黄褐色土 10YR6/2	粘質土。締り・粘性強。
セ 暗褐色土 10YR3/3	粘土ブロックφ1~3cm・小礫多量含む。黒色土混入。締り・粘性強。	ボ 暗褐色土 10YR3/3	ロームブロックφ1~3cm・小礫中量含む。締り・粘性有。
ソ にぶい黄褐色土 10YR4/3	粘土ブロックφ1~5cm・小礫多量含む。締り・粘性有。	マ 褐色土 10YR6/1	鹿沼軽石中量、小礫少量含む。締り・粘性有。
タ 褐色土 10YR4/4	ローム粒・ロームブロックφ1~2cm 粘土土混入。締り・粘性強。全体にボソボソ。	ミ 暗褐色土 10YR3/4	小礫多量含む。締り・粘性有。
		ム 暗褐色土 10YR3/4	ローム粒・砂粒多量含む。締り・粘性有。
		メ 暗褐色土 10YR3/3	小礫密、砂粒多量含む。締り・粘性有。



第34図 SD03 出土遺物

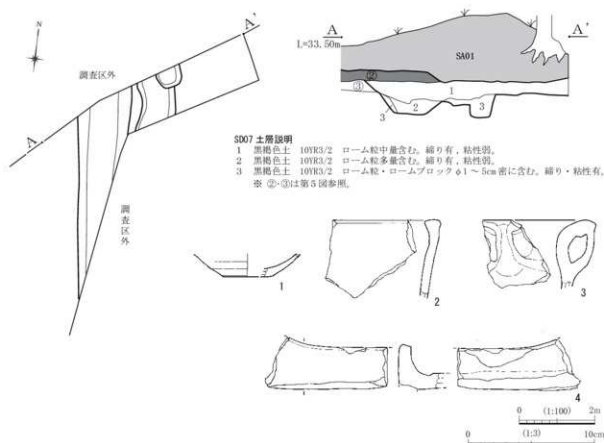


SD07 (第36図, 第9表, 図版8・15)

調査区北東部の土塁下からの検出で、地形に添う形で直線状に延びる。SD09と直角に接続する可能性もあるが、調査範囲が僅かなため詳細は不明である。検出全長は5.50mで、走行方向はN-4°-Wを示し、断面形状は逆台形形で2本が併走する可能性もある。規模は上端幅1.40m, 下端幅0.70m, 調査区際の土層観察による深さは0.89mを測り、東側の掘り込みは、上端幅0.85~1.05m, 下端幅0.55~0.70m, 深さ0.58mである。底面は平坦で一定し、覆土は黒褐色土を主体とする。中世の遺物は、ロクロ成形の土師質土器皿1点・香炉1点・内耳鍋4点, 風炉とみられる瓦質土器1点が出土した。なお、4の風炉とみられる資料は土塁との境から得られたもので、SA01に帰属する可能性もある。時期は特定が難しく、ここでは15世紀前半の旧表土形成以前の中世としておきたい。

SD09 (第37図, 第9表, 図版8・16)

調査区北部の土塁下から検出され、東西方向の調査区外へ直線状に延びる。SD07と直角に接続する可能性がある。S105・06, SX01, SD11, SK16と重複し、SK16より古いもの他よりは新しい。検出全長は17.50mを測り、走行方向はN-77°-Eを示す。断面形状は逆台形形である。規模は上端幅0.90~1.50m, 下端幅0.50~0.90m, 深さ0.50mを測り、底面は平坦で一定している。全体では西へ向け僅かに深く、高低差は24cmである。覆土はローム粒の含有が顕著な黒褐色土を主体とする。中世の遺物は、板目状圧痕が残るロクロ成形の土師質土器皿とみられる底部片が1点出土している。時期は15世紀前半の旧表土形成以前の中世としておきたい。

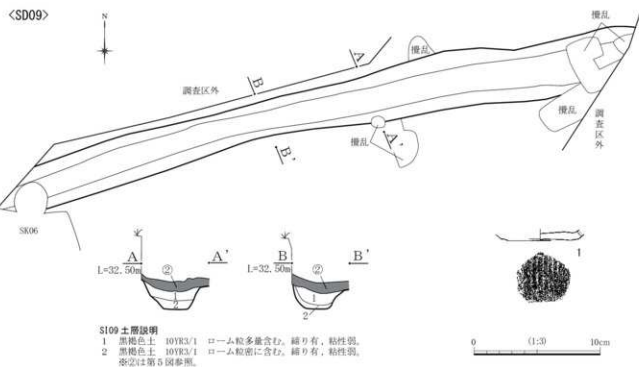


第36図 SD07, 出土遺物

第3章 調査の成果

SD12 (第37図, 図版8)

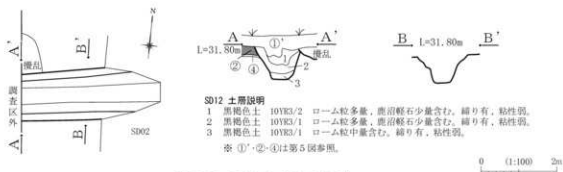
調査区中央部から検出され、東西方向へ直線状に構築される。検出範囲は僅かであり、SD02によって東側を大きく壊されているため詳細は不明であるが、調査区外へさらに延びるとみられる。検出全長は3.70mで、走行方向はN-82°-Eを示す。断面形状は逆台形である。規模は上端幅1.33m、下端幅0.45m、調査区際における土層断面の観察では深さは0.88mを測り、底面は平坦で一定している。覆土はローム粒の含有が顕著な黒褐色土の堆積を主体とする。中世の遺物は、土師質土器の内耳鍋が1点出土している。時期は旧表土を掘り込んでいることから15世紀前半後で、SD02以前の中世としておきたい。



SD09 土層説明

- 1 黒褐色土 10YK3/1 ローム粒多量含む。締り有、粘性弱。
 - 2 黒褐色土 10YK3/1 ローム粒密に含む。締り有、粘性弱。
- ※①②第5図参照。

<SD12>



SD12 土層説明

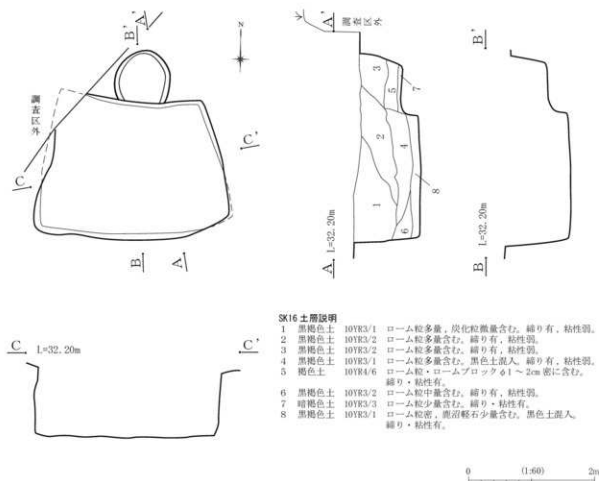
- 1 黒褐色土 10YK3/2 ローム粒多量、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。
 - 2 黒褐色土 10YK3/1 ローム粒多量、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。
 - 3 黒褐色土 10YK3/1 ローム粒中量含む。締り有、粘性弱。
- ※ ①'・②・③は第5図参照。

第37図 SD09-12, SD09 出土遺物

(4) 大型土坑

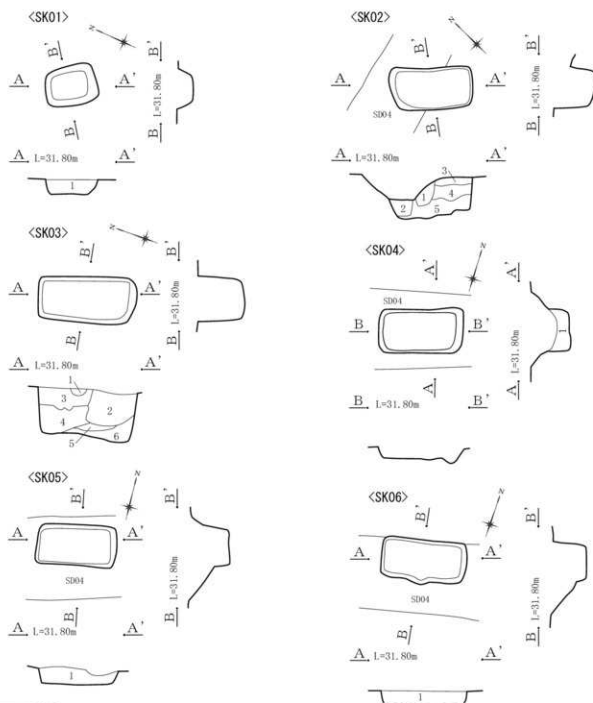
SK16 (第38図, 図版8・9)

調査区北部, C-2 グリッドに位置する。土塁下からの検出である。SI05, SD09・10と重複し, 本跡が新しい。平面方形の主室に, 円形で竪坑状の掘り込みを伴う。平面形は地下式坑に類似するも, 掘り込みが地下式坑とするにはやや浅く, 天井部の痕跡もない。ただし, 第2地点では地下式坑が発掘され, SD01の壁面には僅かに地下式坑などの大型土坑を推測できる痕跡が残されていた。地下式坑は密集する傾向にあるため, ここでは地下式坑の可能性を考慮し, その用語を用いながら報告する。主室の平面は方形であるがやや台形状に歪み, 規模は中軸線上で東西2.90m, 南北2.23m, 検出面からの深さ1.05mを測る。竪坑は東西0.80m, 南北0.90m, 深さ0.64mで, 段を持って主室と接続する。竪坑を含めた主軸長は3.00mとなり, 主軸方向は $N-3^{\circ}-W$ を示す。主室の底面は平坦で, 壁は垂直に立ち上がり, 部分的に内傾する。覆土はローム粒の含有が顕著な黒褐色土を主体としている。遺物は古代の土器類が大多数を占め, 中世に帰属する資料は出土していない。時期は旧表土が確認できないことから旧表土形成の15世紀前半後で, 土塁構築以前である。仮に地下式坑とするならば, 水戸市近辺の地下式坑は15世紀後半以降に増加するので, 15世紀後半～16世紀後葉までの間とみられる。



第38図 SK16

第3章 調査の成果



SK01 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・ロームブロックφ1～4cm多量含む、締り有、粘性弱。

SK02 土層説明

- 1 にぶい黄褐色土 10YR6/3 砂質土。締り有、粘性弱。
- 2 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・粘土粒・炭屑軽石多量含む。締り・粘性弱。
- 3 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・ロームブロックφ1～2cm中量含む。締り有、粘性弱。
- 4 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締り・粘性有。
- 5 黒色土 10YR2/1 ローム粒少量含む。締り有、粘性弱。
- 6 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm密に含む。締り・粘性有。

SK03 土層説明

- 1 にぶい黄褐色土 10YR6/3 砂質土。締り有、粘性弱。
- 2 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・粘土粒・炭屑軽石多量含む。締り・粘性弱。
- 3 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・ロームブロックφ1～2cm中量含む。締り有、粘性弱。
- 4 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締り・粘性有。
- 5 黒色土 10YR2/1 ローム粒少量含む。締り有、粘性弱。
- 6 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm密に含む。締り・粘性有。

SK04-05 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・ロームブロックφ1～2cm少量含む。締り有、粘性弱。

第39図 SK01～06

(5) 土坑

SK01 (第39図, 図版9)

調査区北部, D-3グリッドに位置する。平面は長方形である。規模は東西0.64m, 南北0.83m, 深さ0.22mを測り, 主軸方向はN-34°-Wを示す。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土はローム粒・ロームブロックの含有が顕著な黒褐色土の単層で, 人為的な埋め戻しである。遺物は出土していない。時期は覆土の状況から中世と判断される。

SK02 (第39図, 図版9)

調査区北部, D-3グリッドに位置する。SD04と重複し本跡が古い。平面は長方形である。規模は東西0.66m, 南北1.32m, 最深部は0.68mを測り, 主軸方向はN-40°-Wを示す。底面は凹凸があり, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とし, ビット状ににぶい黄褐色土と暗褐色土が認められる。遺物は出土していない。時期は覆土の状況と重複関係から中世と判断される。

SK03 (第39図, 図版9)

調査区北部, D-3・4グリッドに位置する。平面は長方形である。規模は東西0.73m, 南北1.55m, 最深部は0.79mを測り, 主軸方向はN-20°-Wを示す。底面は南側が低くなり, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黄褐色土・黒色土・黒褐色土・暗褐色土が堆積し, 土層断面の観察では, 上部にSK02と同じくビット状ににぶい黄褐色の砂質土が認められる。堆積状況は, 人為的な埋め戻しである。中世の遺物は出土していない。時期は覆土の状況から中世と判断される。

SK04 (第39図, 図版8・9)

調査区北部, D-3グリッドに位置する。SD04と重複し本跡が古い。平面は長方形である。規模は東西1.35m, 南北0.68m, 深さ0.64mを測り, 主軸方向はN-72°-Eを示す。底面は多少の凹凸を持って東側壁際が一段低くなり, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は覆土の状況と重複関係から中世と判断される。

SK05 (第39図, 図版9)

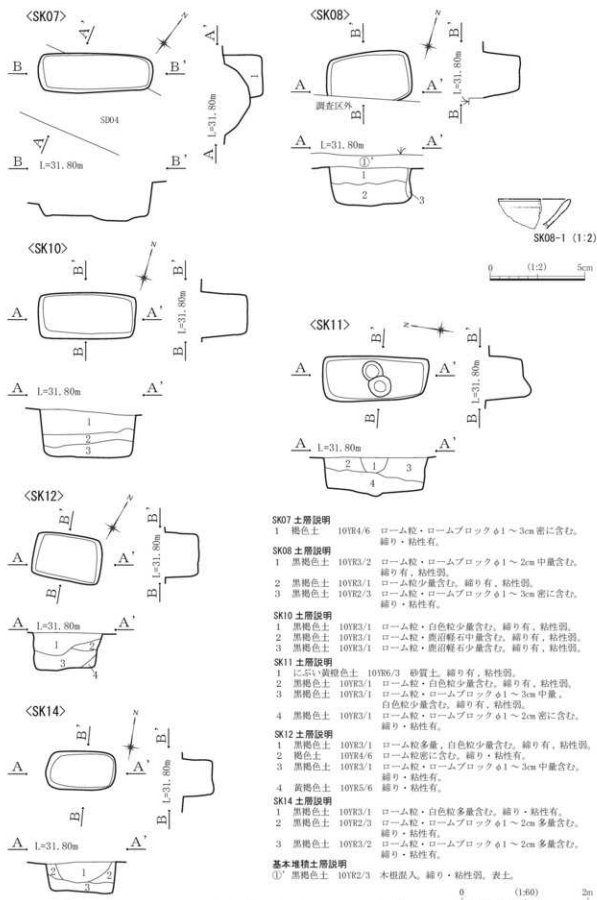
調査区北部, D-3グリッドに位置する。SD04と重複し本跡が古い。平面は長方形である。規模は東西1.26m, 南北0.65m, 深さ0.64mを測り, 主軸方向はN-72°-Eを示す。底面は平坦で, 壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は覆土の状況と重複関係から中世と判断される。

SK06 (第39図, 図版9)

調査区北部, D-3グリッドに位置する。SD04と重複し本跡が古い。平面は長方形である。規模は東西1.42m, 南北0.64m, 深さ0.53mを測り, 主軸方向はN-72°-Eを示す。底面は多少の起伏はあるものの全体的には平坦で, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は覆土の状況と重複関係から中世と判断される。

SK07 (第40図, 図版9)

調査区北部, D-2グリッドに位置する。SD04と重複し本跡が古い。平面は長方形である。規模は東西1.83m, 南北0.63m, 深さ0.58mを測り, 主軸方向はN-48°-Eを示す。底面は起伏があり東側が一段低く, 壁は垂直に立ち上がる。覆土はローム粒・ロームブロックを含有した褐色土の単層で, 人為的な埋め戻しである。遺物は土師器・須恵器の甕のみで, 中世に帰属する遺物は出土していない。時期は覆土の状況と重複関係から中世と判断される。



第40図 SK07-08-10～12-14, SK08 出土遺物

SK08 (第40図, 第9表 図版10・16)

調査区北部, E-3グリッドに位置し, 南部分が調査区外になる。平面は長方形と判断され, 規模は東西1.35m, 南北0.77m, 深さ0.57mを測り, 主軸方向はN-68°-Eを示す。底面は多少の起伏はあるもののほぼ平坦で, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする。中世の遺物は, ロクロ成形の土師質土器皿1点の出土である。時期は覆土の状況から中世と判断される。

SK10 (第40図, 図版10)

調査区北部, E-3グリッドに位置する。平面は長方形である。規模は東西1.54m, 南北0.72m, 深さ0.73mを測り, 主軸方向はN-75°-Eを示す。底面は平坦で, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。時期は覆土の状況から中世と判断される。

SK11 (第40図, 図版10)

調査区北部, D-2・3グリッドに位置する。平面は長方形である。規模は東西0.70m, 南北1.68m, 深さ0.55mを測り, 主軸方向はN-8°-Wを示す。底面は中央が直径35cmのビット状に17cm窪み, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とし, 土層観察では上部にSK02・03と同じくビット状ににぶい黄褐色の砂質土が認められる。堆積状況は, 人為的な埋め戻しである。遺物は須恵器の坏のみで中世に帰属する資料は出土していない。時期は覆土の状況から中世と判断される。

SK12 (第40図, 図版10)

調査区北部, D-2グリッドに位置する。平面は長方形で, 規模は東西1.08m, 南北0.72m, 深さ0.57mを測り, 主軸方向はN-68°-Eを示す。底面は起伏を持ちながら西部分が一段低くなり, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土・褐色土・黄褐色土が4層に分層され, 黒褐色土を主体とした人為的な堆積である。遺物は土師器の甕のみで, 中世に帰属する資料は出土していない。時期は覆土の状況から中世と判断される。

SK14 (第40図, 図版10)

調査区北部, D-3グリッドに位置する。平面は隅角が丸い長方形である。規模は東西1.07m, 南北0.66m, 深さ0.49mを測り, 主軸方向はN-82°-Eを示す。底面は起伏があるもののほぼ平坦で, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とし, 人為的な埋め戻しである。中世の遺物は, 土師質土器の皿2点と内耳鍋2点である。時期は覆土の状況と遺物から中世と判断される。

SK17 (第41図, 第9表, 図版10・16)

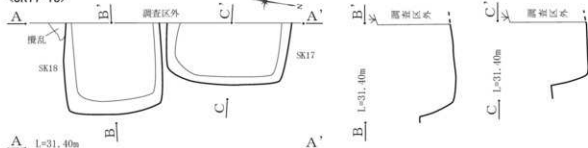
調査区中央部, I-1グリッドに位置し, 西部分が調査区外になる。平面は方形基調とみられる。規模は東西1.00m以上, 南北1.95m, 調査区際土層断面にみる深さは0.82mを測り, 主軸方向は南北に仮定するとN-5°-Wを示す。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土と黒褐色土が確認され, ローム粒・ロームブロックを含有し, 人為的な埋め戻しである。遺物はロクロ成形の土師質土器皿1点と, 内耳鍋1点が出土している。時期は遺物と旧表土を掘り込むことから16世紀後半とみられる。

SK18 (第41図, 第9表, 図版10・16)

調査区中央部, I-1グリッドに位置し, 西部分が調査区外になる。平面は方形基調とみられる。規模は東西1.50m以上, 南北1.50m, 調査区際土層断面にみる深さは0.70mを測り, 主軸方向はN-78°-Eを示す。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土と黒褐色土が確認され, ローム粒・ロームブロックを含有し, 人為的な埋め戻しである。中世の遺物は, 土師質土器の内耳鍋1点, 砥石1点である。時期は遺物と旧表土を掘り込むことから15世紀後半と判断される。

第3章 調査の成果

<SK17-18>



SK17土層説明

- 1 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒多量、ロームブロックφ1~3cm・炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。
 - 2 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・ロームブロックφ1~2cm多量、炭屑軽石中量含む。締り有、粘性弱。
 - 3 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒多量含む。締り有、粘性弱。
 - 4 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒・ロームブロックφ1~2cm多量含む。締り有、粘性弱。
 - 5 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒多量含む。締り有、粘性弱。
 - 6 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒中量含む。締り有、粘性弱。
- ※ ①-②は第5図参照。

SK18土層説明

- a 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・ロームブロックφ1~5cm密、炭屑軽石中量含む。締り有、粘性弱。
- b 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒・ロームブロックφ1~5cm密、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。
- c 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・ロームブロックφ1~2cm密、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。

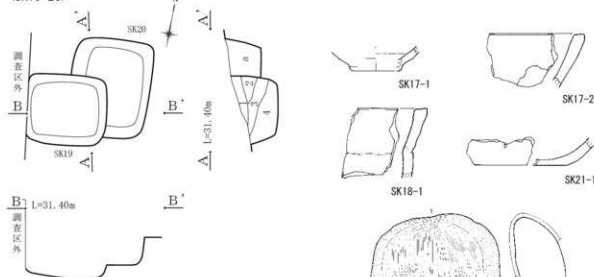
SK19土層説明

- 1 に近い黄褐色土 10YR4/3 ローム粒多量、ロームブロックφ1~2cm中量、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。
- 2 に近い黄褐色土 10YR4/3 ローム粒多量、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。
- 3 褐色土 10YR4/4 ローム粒多量、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。
- 4 に近い黄褐色土 10YR4/3 ローム粒密、ロームブロックφ1~2cm・炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。

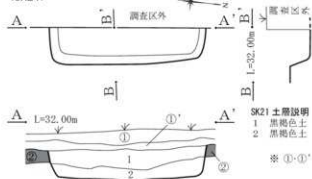
SK20土層説明

- a に近い黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ロームブロックφ1~2cm密、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。

<SK19-20>



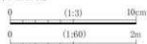
<SK21>



SK21土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒多量、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。
- 2 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロックφ1~2cm多量、炭屑軽石少量含む。締り有、粘性弱。

※ ①-②は第5図参照。



第41図 SK17~21, SK17-18-21 出土遺物

SK19 (第41図, 図版10)

調査区中央部, I-1 グリッドに位置する。西部分が調査区外になる。SK20と重複し本跡が新しい。平面は方形で, 規模は東西1.25m以上, 南北1.10m, 深さ0.72mを測り, 主軸方向はN-80°-Eを示す。底面は平坦で, 壁は垂直気味に立ち上がる。覆土はにぶい黄褐色土を主体とする。中世の遺物は, ロクロ成形の土師質土器皿1点と内耳鍋5点である。時期は遺物から15世紀後半と判断される。

SK20 (第41図, 図版10)

調査区中央部, I-1 グリッドに位置する。SK19と重複し本跡が古い。平面は方形と判断され, 規模は東西1.26m, 南北1.56m, 深さ0.55mを測り, 主軸方向はN-6°-Wを示す。底面は平坦で, 壁は垂直気味に立ち上がる。覆土はにぶい黄褐色土の単層で, 人為的な埋め戻しである。遺物は出土していない。時期は旧表土を掘り込むことから15世紀後半と判断される。

SK21 (第41図, 第9表, 図版10・16)

調査区中央部, H-1 グリッドに位置し, 西部分の大半が調査区外になる。平面は方形基調とみられ, 規模は東西0.60m以上, 南北2.45m, 深さ0.47mを測り, 主軸方向を南北に仮定するとN-7°-Wを示す。底面は平坦で, 壁は垂直気味に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とし, 埋め戻されている。遺物は中世の土師質土器内耳鍋1点である。時期は旧表土を掘り込むことから15世紀後半と判断される。

SK23 (第42図, 図版11)

調査区中央部, G-1 グリッドに位置し, 東部分がSD02に壊される。平面は隅角が丸い長方形とみられ, 規模は東西1.50m以上, 南北1.23m, 深さ0.46mを測り, 主軸方向はN-76°-Eを示す。底面は平坦で, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とし, 人為的な埋め戻しである。遺物は出土していない。時期は覆土の状況と重複関係から中世と判断される。

SK24 (第42図, 第9表, 図版11・16)

調査区中央部, G・H-1 グリッドに位置する。地下式坑などの大型遺構を考慮し調査に臨んだが, 竪坑がなく土坑として報告する。平面は隅角が丸い長方形で, 規模は東西1.28m, 南北2.20m, 深さ0.86mを測り, 主軸方向はN-15°-Wを示す。底面は平坦で, 壁は垂直に立ち上がり一部内傾する。覆土は黒褐色土を主体とし, 埋め戻されている。中世の遺物は, ロクロ成形の土師質土器皿2点・播鉢1点, 内耳鍋3点, 瓦質土器の鉢類1点である。時期は遺物から15世紀後半と判断される。

SK25 (第42図, 図版11)

調査区北部, E-2・3 グリッドに位置する。SI02・08と重複し本跡が最も新しい。平面は長方形で, 規模は東西0.73m, 南北1.82m, 深さ0.60mを測り, 主軸方向はN-35°-Wを示す。底面はほぼ平坦で, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とし2層に分層され, 埋め戻されている。中世の遺物は出土していない。時期は覆土の状況から中世と判断される。

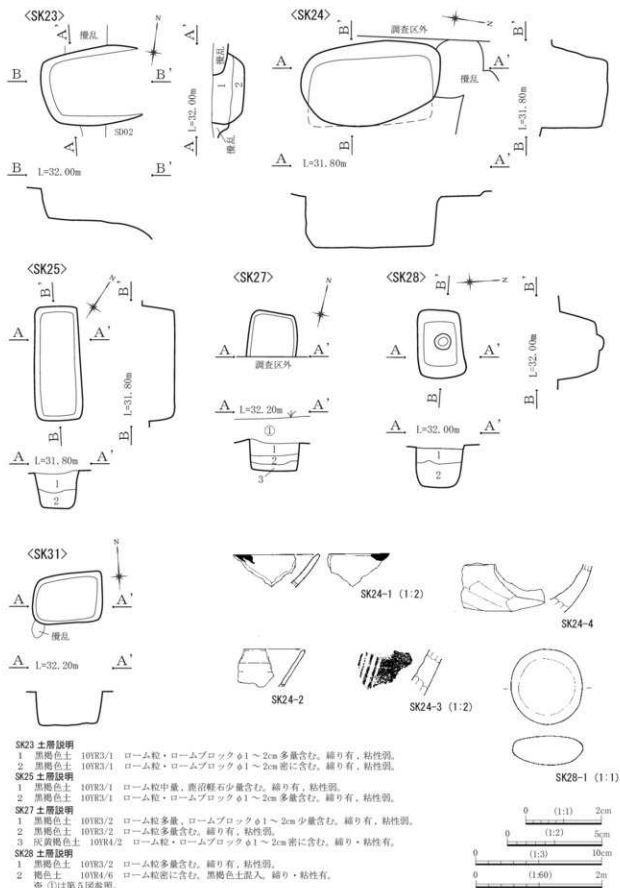
SK27 (第42図, 図版11)

調査区北部, E-2 グリッドに位置する。南部分が調査区外になる。SI01・02・08と重複し本跡が最も新しい。平面は方形基調で, 規模は東西0.75m, 南北0.78m以上, 深さ0.43mを測り, 主軸方向はN-10°-Wを示す。底面は平坦で, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は底面に灰黄褐色土, 上層に黒褐色土の堆積を主体とする。中世の遺物は出土していない。時期は覆土から中世と判断される。

SK28 (第42図, 第9表, 図版11・16)

調査区北部, E-2 グリッドに位置する。SI01, SD05と重複し本跡が最も新しい。平面は長方形で,

第3章 調査の成果



第42図 SK23～25, 27-28-31, SK24-28 出土遺物

規模は東西1.08m, 南北0.70m, 深さ0.63mを測り, 主軸方向はN-86°-Wを示す。底面は平坦で, 中央に直径27cmの掘り込みを伴い, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は褐色土と黒褐色土が堆積する。中世の遺物は出土せず, 時期不明の基石が上層から出土した。時期は覆土から中世と判断される。

SK31 (第42図, 図版11)

調査区北部, E-2グリッドに位置する。S101, SD05と重複し本跡が最も新しい。平面は長方形で, 規模は東西1.10m, 南北0.87m, 深さ0.52mを測り, 主軸方向はN-90°を示す。底面は平坦で, 壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層で埋め戻されている。中世の遺物は出土せず, 古代の土器及び帯金具の鈍尾と時期不明の銅の塊が上層から出土した。時期は覆土から中世と判断される。

(6) ビット (第6図, 第4表, 図版11)

中世のビットは36基である。調査区北東部A・B-3・4グリッド, 北部D・E-2・3グリッド, 中央部G-1グリッドにまとまりをみせるも, 建物など構造物の復元はできなかった。平面は円形基調が多く, 規模は長軸30~88cm, 深さ14~72cmの範疇に収まり, 長軸30~50cm台, 深さ20~30cm台に集中する。覆土はローム粒を含む黒褐色土で, 時期は遺物が出土しないため特定は難しいが, P01~10・12~14は土塁構築以前, P25はSD04より新しく土塁よりも古い構築である。

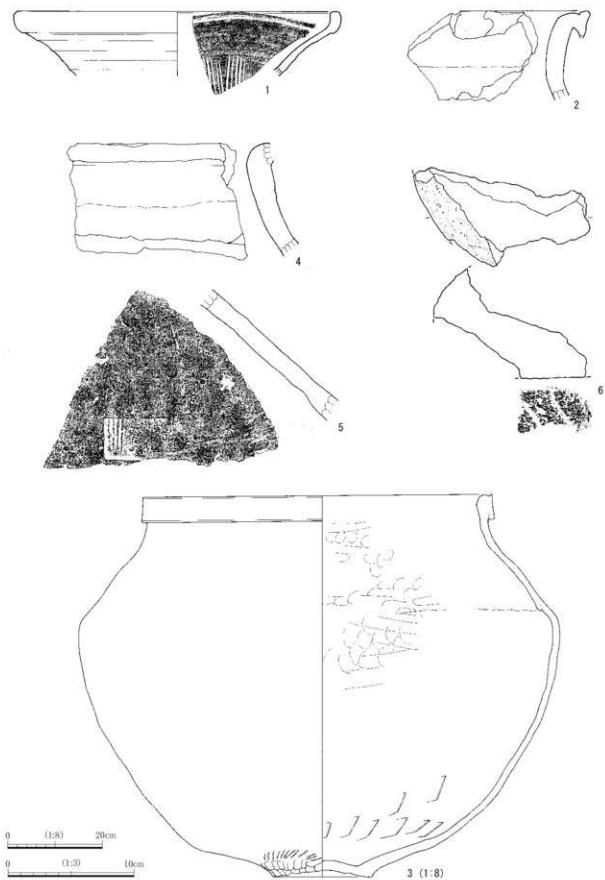
第4表 中世ビット一覧表

() は残存値 単位=cm

No.	位置	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ	主な覆土	No.	位置	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ	主な覆土
1	A-4	円形	杭状	31×30×44	黒褐色土	20	G-1	円形	円筒形	45×45×24	黒褐色土
2	A-4	円形	円筒形	70×58×58	黒褐色土	21	G-1	円形	杭状	30×27×27	黒褐色土
3	A-3・4	円形	杭状	30×28×37	黒褐色土	22	H-1	円形	円筒形	70×62×37	黒褐色土
4	A-4	円形	杭状	45×40×28	黒褐色土	24	E-2	楕円形	杭状	52×37×64	黒褐色土
5	A-3・4	楕円形	杭状	(56) ×39×48	黒褐色土	25	D-2	円形	杭状	38×35×21	黒褐色土
6	A-3	円形	杭状	38×(32)×37	黒褐色土	26	D-2	楕円形	杭状	52×38×41	褐色土
7	B-4	方形	円筒形	70×60×63	黒褐色土	27	E-2	円形	杭状	35×32×38	黒褐色土
8	B-4	円形	杭状	48×44×51	黒褐色土	28	D-2	円形	杭状	50×45×49	褐色土
9	B-3	円形	円筒形	38×35×23	黒褐色土	29	D-3	円形	円筒形	40×35×19	黒褐色土
10	B-3・4	円形	杭状	48×42×37	黒褐色土	30	D-2	円形	円筒形	45×40×21	黒褐色土
12	B-4	楕円形	杭状	53×41×22	黒褐色土	31	D-2	円形	杭状	50×47×29	黒褐色土
13	B-3	楕円形	皿状	55×36×16	黒褐色土	32	D-3	楕円形	円筒形	60×30×43	黒褐色土
14	B-3	円形	皿状	50×42×14	黒褐色土	33	D-3	楕円形	杭状	32×24×38	黒褐色土
15	G-1	円形	円筒形	70×(53)×72	黒褐色土	34	D-3	円形	杭状	40×33×55	黒褐色土
16	G-1	楕円形	円筒形	74×56×31	黒褐色土	35	D-3	楕円形	円筒形	52×40×39	黒褐色土
17	G-1	円形	円筒形	58×50×38	黒褐色土	36	D-4	円形	杭状	40×38×36	黒褐色土
18	G-1	円形	円筒形	55×(24)×35	黒褐色土	38	C-3	円形	杭状	65×57×33	黒褐色土
19	G-1	円形	杭状	35×29×29	黒褐色土	39	C-3	楕円形	杭状	88×55×60	黒褐色土

(7) 遺構外出土遺物 (第43図, 第9表, 巻頭図版3, 図版16)

中世の遺構に伴わない遺物を報告する。1は播鉢の口縁部片で, 産地不明の石器である。2の常滑の甕は8型式に比定される。3~5の常滑の甕は, B-3グリッド調査区外の攪乱状の掘り込みから出土した。この掘り込みは調査区外に位置し, 詳細は明らかでないが, 第28図の土層断面図が示す通り, SA02, SD08より新しく, 現地表から130cmの深さを測る。常滑の甕は破片の状態で重なっており投棄されたと判断される。3・4は縁帯部が頸部に接合する。3は9~10型式で, 最大径が101cmを計る大甕, 4も同型の大甕である。6は安山岩製の石臼の上白片とみられ僅かに目が残る。(間宮)



第43図 中世遺構外出土遺物

第5表 SK09・26. 先史時代遺構外, S101出土遺物観察表

遺構番号	遺物種類	図種	計測値 (cm) 口径・底径・高さ	形状・製作技法, 特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
SK09	縄文土器 深鉢	---	(4, 4)	胴部片, 外面に貝殻条痕文, 内面に散点状が認められる。 平山式。	①長石・石英・白色粘多量, 繊維混入 ②外・明褐色 (7.5B5/6) 内: にぶい褐色 (7.5B5/3)	覆土
				胴部片, 内外面横方向の貝殻条痕文。 平山式。	①長石・石英・白色粘多量, 繊維混入 ②不良 ③外・黒褐色 (7.5B3/1) 内: 明褐色 (7.5B5/6)	覆土
先史時代遺構外	縄文土器 深鉢	---	(5, 5)	石器 二次加工のある割片 長さ7.5, 幅4.4, 厚さ2.2, 重さ74.0g。 ほぼ完全, 縦長の割片を素材とする。表面に表皮が残り, 右下に調整痕が認められる。流紋岩(メノウの集合体)製, 縄文時代早期以降とみられる。		E-1 グリップ
				胴部片, 内外面貝殻条痕文。 平山式。	①長石・石英・白色粘多量, 繊維混入 ②普通 ③褐色 (7.5B4/6)	E-1 グリップ
				胴部片, 外面無筋織文 (R.L横とL.R縦) を斜状に施文する。 黒山式。	①長石・石英・白色粘多量, 繊維混入 ②普通 ③外: にぶい黄褐色 (10YR4/3) 内: にぶい黄褐色 (10YR6/4)	SK13
				胴部片, 外面無筋織文 (L.横) を施文する。 黒山式。	①長石・石英・白色粘多量, 繊維混入 ②普通 ③外: にぶい黄褐色 (10YR4/3) 内: 灰黄褐色 (10YR4/2)	S402
				胴部片, 外面無筋織文 (L.R横とR.L縦) を斜状に施文する, 内面ナズ。 黒山式。	①長石・石英・白色粘多量, 繊維混入 ②普通 ③灰黄褐色 (10YR5/2)	SI06
				口縁部片, 口唇部外面に刺列列を施し, 下部に波状及び変形爪形文を配置する, 内面ナズ。 浮島目式。	①長石・石英・白色粘多量 ②良好 ③明褐色 (7.5B5/6)	SD09
				胴部片, 外面上位に横広の変形爪形文, 下部に刺列列を施す, 内面ナズ。 浮島目式。	①長石・石英・白色粘多量 ②普通 ③外・褐色 (7.5B4/3) 内・明褐色 (7.5B5/6)	SK16
				胴部片, 外面無筋織文 (R.横) を施文し, 内面にナズを施す。 栗島台式。	①長石・石英・白色粘多量 ②普通 ③にぶい黄褐色 (10YR5/3)	SD04
				胴部片, 口縁部直下とみられる, 外面に縄文器体の結束面を押し出し, 下部に横位の結束彫刻文を施す。栗島台式。	①長石・石英・白色粘・褐色粘多量 ②普通 ③明褐色 (7.5B5/6)	SD11
				口縁部片, 横平かな女状口縁, 裏に字状の沈凹面を施す。外面内は磨り出し, 各個には半周縄文 (L.R縦) を施文する。加曾利B1式。	①大粒の長石・石英・雲母・白色粘多量 ②普通 ③にぶい黄褐色 (10YR5/3)	SI06
				胴部片, 沈凹面内に半周縄文 (L.R縦) を施文する。称名寺目式。	①長石・石英・白色粘多量 ②普通 ③灰黄褐色 (10YR5/2)	SD06
				胴部片, 沈凹下に刺列列を施し, 下部に斜行波状文を配置する, 加曾利B2式。	①長石・石英・褐色粘多量 ②良好 ③にぶい黄褐色 (10YR7/3)	SI05
				口縁部片, 口唇部及び口縁部の外面に附加集積織文を施文する。 弥生時代前期。	①長石・石英・雲母, 白色粘多量 ②良好 ③外: 褐色 (7.5B6/6) 内: 黄褐色 (10YR8/4)	SK08
S101	土師器 平皿	---	(15, 6) (10, 3)	2/3存, 口縁部コナダ, 体部外面ヘラケズリ, 内外面赤黒。	①長石・石英・チャート多量 ②普通 ③明褐色 (2.5YR5/8)	床土 7cm
				底部片, 底部部転ヘラケズリ裏面台を貼り付けコナダナ。	①長石・石英・白色粘多量, チャート少量 ②還元型 ③灰黄色 (2.5Y7/2)	覆土
				4/5存, 明瞭なナガリを持つ, 天井部転ヘラケズリ, 突出部調整の製品。	①長石・石英・雲母, 白色粘多量, 褐色粘多量 ②未還元 ③灰黄色 (2.5Y6/2)	床土 6cm
				2/3存, 短頸部の蓋, 外面に自然焼付着。	①石英・白色粘多量, チャート少量 ②還元型 ③灰色 (5Y6/1)	床面
				口縁部一胴部上平片, 口縁部コナダ, 胴部外面の上平縦方向のヘラケズリ, 覆付着。	①石英, 白色粘・黒色粘, 褐色粘中量, 海綿骨粉微量 ②良好 ③外: にぶい褐色 (5YR6/4) 内: にぶい褐色 (7.5B5/3)	床面
				胴部下平一底部片, 胴部外面の下平縦方向, 下部端部方向のヘラケズリ, 内面ヘラナダ, 底部外面ヘラケズリ, 被焼。	①石英, 白色粘・黒色粘, 褐色粘中量 ②普通 ③外: にぶい黄褐色 (10YR4/3) 内: にぶい黄褐色 (10YR7/3)	床面
				光面, 口縁部コナダ, 胴部外面縦方向, 下部端部方向のヘラケズリ, 内面刺列調整不明, 底部ヘラケズリ。	①大粒の長石・石英・白色粘多量 ②良好 ③褐色 (7.5B6/6)	床面
				1/3存, 胴部外面の下平縦方向のヘラケズリ, 内面ヘラナダ, 底部外面ヘラケズリ。	①大粒の長石・石英・雲母・白色粘多量 ②普通 ③外: 褐色 (10YR4/4) 内: 黒褐色 (10YR3/1)	床面
				胴部片, 外面に自然焼, 内面に僅かながら磨り出しが着する。	①石英・白色粘中量 ②還元型 ③灰色 (5Y6/1)	覆土
				胴部片, 外面下部部転ヘラケズリ, 内面及び胴口には漆が付着する。	①長石・石英・白色粘多量 ②還元型 ③灰色 (5Y6/1)	覆土
				胴部片, 長頸の器形とみられる, 内面及び胴口には漆が付着する。	①大粒の長石・石英・チャート・白色粘密 ②還元型 ③灰色 (N4)	床土 6cm

第6表 S101・03～06出土遺物観察表

遺物番号	遺物種類	計測値 (cm) 口徑・底径・器高	成・整形技法・特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
S101	12 須恵器 壺・瓶類	---・(12.4)	胴部片。胎土型である。用塩あるいは磁釉の使用が、同口径の須恵ヘラケズリ。内外面及び割れ口に漆付着。	①長石・石英・雲母・白色粘多量 ②木炭灰 ③灰黄色 (2.517/2)	床土 12 cm
	13 瓦 平瓦	全長 18.4、幅 18.30、厚さ2.3、重さ 133.2 g。 側縁部片。棟巻部か。凹部ナデ。凸面縁方向のケズリ。側縁ケズリ。切欠を意図したものの。側縁から表裏両面に横方向の顕著な線跡。S106・05・03、S301-9と産地が同一とみられる。		①長石・石英・雲母・白色粘多量 ②木炭灰 ③灰黄色 (2.517/2)	覆土
	14 土製品 写口	長さ 15.3、直径 15.9、口径 1.9、重さ 385.2 g。先端部片。接痕により先端部は溶解し、断面が不揃いの付着が認められる。		①長石・石英・白色粘多量 ②不良 ③にぶい褐色 (7.0186/4)	床土 25 cm
	15 鉄製品 不明	長さ 13.7、最大幅 10.6、最小幅 10.3、重さ 19.47 g。 両端部を欠損。断面は矩形であるが、両端が縁中央が幅広になる。時期不明。			覆土
	16 鉄製品 不明	長さ 4.2、幅 2.6、厚さ 0.2、重さ 17.15 g。 破片。板状であるが外縁が肥厚する。時期不明。			床土 30 cm
	17 伊壁	長さ 11.7、幅 7.7、厚さ 1.1、重さ 172.43 g。 内面は熱を受けて溶解する。磁力は認められない。			覆土
	18 鉄片	長さ 9.6、幅 8.6、厚さ 3.6、重さ 321.4 g。 塊型押か。磁力は弱い。			床土 30 cm
	19 伊壁	長さ 16.1、幅 7.4、厚さ 1.1、重さ 132.9 g。 内面は熱を受けて溶解する。磁力は認められない。			床面
	20 石製品 硯石	長さ 6.3、幅 8.4、厚さ 4.1、重さ 84.3 g。 完成。表面が丸く磨かれている。硯石。			床土 11 cm
	S103	1 須恵器 壺・瓶類	(13.0)・---・(1.2)	口縁部片。明確なかたまりを持つ。天井部凹陥・コナデナデ。	①長石・石英・白色粘・黒色粘多量 ②還元 ③灰色 (5.016/1)
S104	須恵器 壺・瓶類	---・(8.6)・(12.4)	1/3存。長頸型とみられる。胴部内面の下半部 へラケズリ。底部片を貼り付け口コナデナデ。 内外面及び割れ口に漆付着。	①長石・白色粘・黒色粘多量。海綿骨針微量 ②還元状態 ③灰白色 (N7)	床面
	1 土師器 坪	(12.4)・---・(4.2)	1/5存。口縁部コナデ。体部外面ヘラケズリ 後ナデ。内面ナデ。	①長石・石英・雲母・白色粘・褐色粘多量 ②良好 ③褐色 (5.017/6)	床面
S105	2 土師器 甕	(12.2)・---・(7.7)	口縁部へ胴部片。口縁部コナデ。胴部外面 ヘラケズリ。内面ヘラケズリ。	①長石・石英・雲母・白色粘多量 ②普通 ③外：にぶい赤褐色 (5.0185/3) 内：黒褐色 (5.0182/1)	床面
	3 土師器 鉢	(20.0)・---・(11.1)	1/3存。口縁部コナデ。体部外面ヘラケズリ。 内面ヘラケズリ。	①長石・石英・白色粘・褐色粘多量 ②普通 ③にぶい褐色 (7.0187/4) ④普通 ⑤良好	床面
	① 土師器 坪	10.7・---・4.1	完成。口縁部コナデ。体部外面ヘラケズリ。 内面全面と外面の一部に漆付着。漆層のバ ットとみられる。	①長石・石英・白色粘・黒色粘多量 ②普通 ③にぶい褐色 (7.5185/3)	床面
② 土師器 坪	9.8・---・2.7	4/5存。口縁部コナデ。体部外面ヘラケズリ。	①長石・石英・チャート・白色粘・褐色粘多量 ②良好 ③褐色 (7.0186/8)	床面	
③ 土師器 坪	(13.9)・---・3.9	1/2存。口縁部コナデ。体部外面ヘラケズリ。 内面ナデ。	①長石・石英・雲母・白色粘多量 ②普通 ③外：暗褐色 (7.5183/3) 内：明赤褐色 (5.0185/8)	床面	
④ 土師器 坪	---・(3.6)	2/3存。口縁部欠損。体部外面ヘラケズリ。内 面ヘラケズリ。	①大粒の長石・石英・白色粘多量。 ②木炭灰 ③外：褐色 (7.0184/3) 内：明赤褐色 (5.0185/8)	床面	
⑤ 須恵器 坪	(14.0)・---・(4.2)	1/3存。底部凹陥ヘラケズリ。 木葉下葉群の製品。	②還元状態 ③灰色 (5/4)	床土 9 cm	
⑥ 須恵器 高台付坪	13.6・8.7・5.0	1/2存。取り付け高台。 木葉下葉群の製品。	②還元状態	床土 8 cm	
⑦ 須恵器 壺	19.1・---・3.8	4/5存。かたまりを持つ。天井部凹陥ヘラケズリ。 木葉下葉群の製品。	①大粒の長石・石英・白色粘多量。 チャート少量 ②還元状態 ③灰色 (5/4)	床面	
S106	⑧ 須恵器 高台付坪	(14.8)・(9.4)・9.9	2/3存。丁字状口コナデ。ソケット状に膠を 接合したものか。木葉下葉群の製品か。	①長石・石英・白色粘多量。チャート少量 ②還元 ③灰色 (5.016/1)	覆土
	⑨ 須恵器 壺・瓶類	---・(5.5)	1/3存。長頸型とみられる。内外面及び割れ口 に漆付着。	①長石・石英・雲母・白色粘多量 ②木炭灰 ③黄灰色 (2.516/1)	床面
	⑩ 土師器 小型甕	---・(8.7)	1/3存。口縁部コナデ。胴部外面ヘラケズリ 後ナデ。内面ヘラケズリ。二次焼成。	①長石・石英・白色粘・黒色粘多量 ②普通 ③外：浅黄色 (2.517/3) 内：黒色 (N2)	床土 8 cm
	⑪ 土師器 小型甕	(12.4)・---・(10.8)	1/4存。口縁部コナデ。胴部外面割れ方向の ヘラケズリ。内面ヘラケズリ。外面赤彩か。	①長石・石英・白色粘・褐色粘多量 ②普通 ③外：褐色 (7.0184/6) 内：浅黄色 (10.0185/2)	床土 6 cm
	⑫ 瓦 平瓦	全長 13.1、幅 29.7、棟厚幅 24.5、瓦厚 5.9、重さ 3,820.0 g。 ほぼ完成。棟巻部か。凹凸両面ヘラケズリ。側縁及び両面 縁面ヘラケズリ。S101-13、S106-05、S301-9と産地が同一とみられる。		①長石・石英・雲母・白色粘多量 ②還元状態 ③灰色 (N6)	PI。 床土
	⑬ 瓦 平瓦	全長 13.0、幅 18.6、厚さ 2.0、重さ 699.8 g。 破片。棟巻部か。凹凸両面ヘラケズリ。側縁ヘラケズリ。 S101-13、S106-05、S301-9と産地が同一とみられる。		①長石・石英・雲母・白色粘多量 ②還元状態 ③灰黄色 (2.517/2)	覆土
	⑭ 瓦 平瓦	全長 14.5、幅 13.5、厚さ 2.2、重さ 607.5 g。 破片。凹凸両面ヘラケズリ。側縁及び両面ヘラケズリ。		①長石・石英・白色粘多量 ②還元状態 ③灰色 (N6)	床土 7 cm

第7表 S107・08, SX01, SD05・06・10, P11, 古代遺構外出土文物観察表

遺構	遺物番号	部種	計測値 (cm) 口径・底径・高さ	成・整形技法, 特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
S107	1	土師器 坪	13.8 × - × 6.3	ほぼ完成。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	①長石・石英・白色粘中量 ②良好 ③外: ①に黄褐色 (10197/3) 内: ①に②に褐色 (1.5387/4)	床土 30cm
	1	土師器 坪	(13.0) × - × (2.5)	1/6存。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後ナデ。内外面は黒色処理とみられる。	①長石・石英・白色粘・褐色粘中量 ②普通 ③①に黄褐色 (10197/4)	床面
S108	2	土師器 壺	- × - × (3.4)	口縁部片。ヨコナデ。	①長石・石英・白色粘・褐色粘中量 ②普通 ③明褐色 (7.5195/6)	床面
	1	土師器 壺	(10.8) × - × (2.7)	口縁部へ体部片。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	①長石・石英・白色粘・褐色粘中量 ②普通 ③明褐色 (7.5195/6)	覆土
	2	須恵器 坪	(13.5) × (9.2) × (3.7)	1/5存。底部回転ヘラケズリ。 木葉下窯跡群の製品。	①長石・石英・チャート・白色粘中量 ②未還元 ③灰白色 (2.519/2)	覆土
	3	須恵器 蓋	15.0 × - × 2.5	ほぼ完成。口縁部は折れて垂下する。天井部 回転ヘラケズリ。木葉下窯跡群の製品。	①長石・石英・白色粘中量。チャート微量 ②還元型 ③灰色 (96/)	床土 16cm
	4	須恵器 蓋	(21.4) × - × (2.8)	1/4存。ホネリを持つ。天井部回転ヘラケズリ。 新出窯跡群の製品。	①長石・石英・雲母・白色粘中量 ②未還元 ③灰白色 (10194/2)	床面
	5	須恵器 蓋	- × - × (1.8)	断面片。天井部回転ヘラケズリ。	①長石・石英・白色粘・褐色粘中量 ②還元型 ③灰色 (519/1)	覆土
	6	須恵器 長頸壺	- × - × (9.9)	断面片。口唇部欠損。外面自然釉付着。	①長石・石英・雲母・白色粘中量。黒斑顕著 ②還元型 ③灰色 (519/1)	底土 8cm
	7	須恵器 短耳壺	(12.6) × - × (25.0)	1/3存。口縁部ヨコナデ。胴部外面平打削。内 面周用瓦敷及びヘラナデ。 木葉下窯跡群の製品。	①長石・石英・白色粘中量。チャート・ 海綿骨針中量 ②還元 ③灰白色 (2.517/1)	床面
	8	土師器 壺	- × 13.0 × (28.7)	1/3存。口縁部ヨコナデ。胴部外面の下半縦ナ デのヘラミガキ。内面ヘラナデ。底部外面ヘラ ミガキ。	①長石・石英・雲母・白色粘中量 ②普通 ③外: 褐色 (7.5384/6) 内: 黒色 (7.5193/1)	床面
	9	瓦 平瓦	全長 (19.9) × 幅 (8.5) × 厚さ 2.3 × 重さ (350.0) g。 頂凸両面ヘラケズリ。端面ヘラケズリ。S101-13, S106-①と産地 が同一とみられる。	破片。植務池か 既出両面ヘラケズリ。端面ヘラケズリ。S101-13, S106-①と産地 が同一とみられる。	①未還元 ③灰黄色 (2.517/2)	床面
SX01	10	石製品 砥石	長さ (3.9)、幅 3.0、厚さ 1.4、重さ (21.0) g。 ほぼ完成。割れ口以外全面を使用する。縦紋割製。			覆土
	11	石製品 砥石	長さ 19.0。幅 19.1、厚さ 11.7、重さ 5,770.0 g。 完成。大型。側面を中心に縦紋が強く残る。金床石の可能性も考えたが縦行は認められない。ホルンフェルス製か。			底面
	12	石製品 砥石	長さ 3.4、幅 4.3、厚さ 3.4、重さ 19.3 g。 完成。部分に認められるとみられるをみず。縦石製。			床土 5cm
	13	土製品 埴壇	長さ (8.4)、幅 (4.8)、厚さ (2.5)、重さ (71.3) g。 1/3存。底面は平坦で割れとみられる。		①大粒の長石・石英・白色粘中量 ②不良 ③灰黄色 (2.519/2)	床土 16cm
	14	土製品 埴壇	(13.0) × - × (3.9)	1/5存。内面は焼熱し緑青の付着が認められる。	①大粒の長石・石英・白色粘中量 ②還元 ③灰色 (519/1)	覆土
	15	伊勢 瓦	長さ (5.2)、幅 (7.9)、厚さ (3.4)、重さ (53.5) g。 破片。スサを混入し内面は溶解する。			床土 6cm
	16	伊勢 瓦	長さ (8.0)、幅 (7.6)、厚さ (3.2)、重さ (96.4) g。 破片。スサを混入し内面は溶解する。			床面
	17	伊勢 瓦	長さ (7.5)、幅 (6.2)、厚さ (3.1)、重さ (84.0) g。 破片。スサを混入し内面は溶解する。			床面
	18	鉄滓	長さ (4.0)、幅 (6.4)、厚さ (2.6)、重さ (90.8) g。 破片。焼製滓の一部。			覆土
	19	伊勢 瓦	長さ (5.3)、幅 (5.1)、厚さ 2.3、重さ (54.4) g。 破片。内面に熱を受けて溶解し緑青の付着が認められる。			床土 20cm
SD05	1	須恵器 蓋坪	- × - × (3.3)	1/3存。胴部に3ヶ所の透かしを持つ。	①長石・石英・チャート・白色粘・海綿骨針中量 ②還元型 ③灰色 (55/)	底土 23cm
SX00	1	須恵器 長頸壺	- × - × (6.3)	胴部片。胴部外面の下半に回転ヘラケズリを施 す。胴部に現に帯が認められる。胴部に自然 釉が付着する。	①長石・白色粘・褐色粘中量 ②還元型 ③黄灰色 (2.516/1)	底土 44cm
	2	土師器 坪	- × 8.0 × (2.9)	胴部下端へ底部片。胴部外面下端及び底部外面 にヘラケズリ。	①大粒の長石・石英・白色粘・褐色粘中量。 雲母微量 ②普通 ③褐色 (7.5197/6)	底土 11cm
SD10	1	須恵器 蓋	- × - × (2.5)	断面片。完成形。天井部回転ヘラケズリ。	①長石・石英・白色粘・褐色粘中量 ②未還元 ③灰黄色 (10195/2)	C-2 ダクト
	2	瓦 平瓦	全長 (11.3)、幅 (12.6)、厚さ 2.5、重さ (486.1) g。 断面片。頂面に布目状瓦敷が認められる。端縁ヘラケズリ。凸面 ヘラケズリ長縁曲状工具による成状文。		①長石・石英・白色粘中量 ②良好 ③灰色 (54/)	底土 22cm
P11	1	須恵器 高台付坪	- × - × (2.6)	体部下平へ底部片。底面は高台を隠り付けロ コナデ。木葉下窯跡群の製品。	①長石・石英・白色粘中量。海綿骨針中量 ②還元型 ③灰色 (515/1)	覆土
	1	土師器 坪	14.0 × - × 4.3	1/2存。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。 内面焼熱により剥離著しい。	①長石・石英・白色粘・褐色粘中量 ②普通 ③褐色 (5196/6)	S02 SK16
S101	2	土師器 高台付坪	(14.9) × (8.4) × 6.3	1/6存。体部内外面ヘラミガキ。高台隠り付け ロコナデ。内外面黒色処理。	①長石・石英・白色粘・褐色粘中量 ②良好 ③外: 黒褐色 (10193/1) 内: 黒色 (10192/1)	SX01
	3	須恵器 壺・瓶	- × - × (4.3)	断面片。長頸部とみられる。外面に自然釉付着。 内面に漆付着。	①長石・白色粘・褐色粘中量 ②還元型 ③灰色 (515/1)	SK21

第8表 古代遺構外、SA01・02、SD01～03 出土土物観察表

遺構 番号	物種 番号	物種	計測値 (cm) 口径・底径・高さ	成・整形技法・特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土 位置	
古代遺構外	4	須恵器 小型壺	(5.6)・(3.8)・7.5	3/8存、胴部外面下端及び底部回転ヘラズバリ	①長石・石英・白色粒・黒色粒多量 ②還元程度 ③灰色 (S6/7)	SD01	
	5	須恵器 壺・瓶類	(6.0)・(→)・(5.5)	胴部片、内面及び割れ口に捺付着。 木下葉群器の製品。	①長石・石英・白色粒多量、海綿骨針中量 ②還元 ③暗赤灰色 (S6C/1)	SA02	
	6	灰釉陶器 壺類	(→)・(6.6)・(3.3)	底部片、胴部外面の下端回転ヘラズバリ。僅か ながら灰釉の付着が認められる。底部外面高台 を盛り付けロコナデ、内面に自然輪付着。	①石英・白色粒中量 ②還元 ③黄灰色 (2.516/1)	SD02	
	7	瓦 軒丸瓦	全長(5.8)、瓦当部直径(5.8)、脊区厚1.8、脊区外周断面幅1.2、重 さ(14.7)g、1/10存。外周縁は直線状で、幅広い脊区外周断面を持つ。 脊区から中周区に丸腕、丸瓦区凸面ヘラズバリ。	①長石・石英・白色粒中量、海綿骨針少量 ②木炭塵 ③灰白色 (S17/1)	SD09		
	8	瓦 平瓦	全長(7.8)、幅(6.2)、厚さ1.8、重さ(103.3)g。 破片、内面にヘラズバリ(土師器小口)とみられる別瓦、凸面に糸切り痕、 被熱、製斗瓦の可能性もある。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②木炭塵 ③表面：灰黄色 (2.537/2) 凸面：黄灰色 (2.535/1)	SK16		
	9	銅製品 蛇尾	長さ(1.4)、幅(1.5)、厚さ0.5、重さ(2.8)g。 ほぼ完全。幅は狭く輪周もあるが形状から蛇尾の表板としておく。			SK31	
	10	銅板	長さ3.5、幅2.1、厚さ0.8、重さ17.8g。 ほぼ完全。質量があるため製品ではなく銅のインゴットが溶解したものか。			SK31	
	SA01	1	土師質土器 鉢鉢	(34.0)・(→)・(8.6)	口縁部片。ヨコナデ。外面僅け付着した転用さ れたとみられる。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②良好 ③外・黒色 (7.5382/1) 内：明褐色 (7.5385/8)	覆土
		1	古瀬戸 平碗	(15.6)・(→)・(7.4)	1/5存。体部は直線状に伸び、腰の直物は低い 内面に自然輪。 後期様式1～2期類。	①白色粒中量 ②良好 ③黄褐色 (7.537/3)	C-2 グロッド 下層
		2	古瀬戸 平碗	(15.0)・(→)・(2.5)	口縁部片。口縁部は外反し、体部はやや丸味を 持つ。 後期様式1～2期類。	①白色粒少量 ②普通 ③オリーブ黄褐色 (536/4)	C-2 グロッド 下層
SA02	3	土師質土器 内耳罐	(36.0)・(→)・(11.0)	口縁部～体部片。耳の断面は紐状で、体部への 取り付け部分は外側に押されて歪む。ヨコナデ。 外面僅け付着。	①長石・石英・雲母・白色粒・黒色粒・ 褐色色粒多量 ②良好 ③外・暗褐色 (10383/4) 内：にじみ・黄褐色 (10386/4)	B-3 グロッド 下層	
	4	常滑 壺	(→)・(→)・(12.5)	胴部片。大塚とみられる。外面に「大日大月 の文字」の押印あり。	①大粒の長石・石英・白色粒 ②不良 ③外・灰褐色 (5385/2) 内：黒褐色 (5382/1)	C-3 グロッド 下層	
	5	鉄製品 不明	長さ(2.8)、幅(3.6)、厚さ0.7、重さ(16.5)g。 破片。板状で一端が折り曲げられる。時期不明。			B-3 グロッド 下層	
6	鉄製品 不明	長さ1.5、幅(4.6)、厚さ1.3、重さ24.5g。 完全。縦やりに筋を織く。金具により留められていたとみられる。時期不明。			B-3 グロッド 下層		
SD01	1	土師質土器 皿	7.0・3.6・1.9	2/3存。ロコ成形(右回転)。底部回転糸切り。 見込み横方向のナデ。	①長石・石英・白色粒・黒色粒・褐色粒多量 ②良好 ③黄褐色 (10383/3)	底上 20cm	
	1	土師質土器 皿	(→)・(7.0)・(1.3)	体部下平～底部片。ロコ成形。底部回転糸切 り。見込み横方向のナデ。	①長石・石英・白色粒・黒色粒多量 ②良好 ③黄褐色 (10383/3)	E-1 グロッド 上層	
	2	土師質土器 香炉	(10.0)・(→)・(2.7)	口縁部片。ヨコナデ。神腰香炉の模倣品とみ られる。	①石英・白色粒・黒色粒多量 ②良好 ③にじみ・黄褐色 (10387/4)	D-1 グロッド 下層	
SD02	3	土師質土器 内耳罐	(31.0)・(→)・(3.1)	口縁部片。ヨコナデ。外面僅け付着。	①長石・石英・雲母・白色粒・黒色粒多量。 ②良好 ③にじみ・黄褐色 (10387/4)	E-1 グロッド 上層	
	4	土師質土器 内耳罐	(29.0)・(→)・(5.3)	耳部片。耳の断面は紐状で、体部への取り付け 部分は外面に押されて歪む。ヨコナデ。外面僅 け付着。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②良好 ③外・灰黄色 (10382/1) 内：にじみ・黄褐色 (10387/4)	I-2 グロッド 下層	
	5	土師質土器 内耳罐	(32.0)・(→)・(11.2)	口縁部～体部上平片。耳の断面は紐状で、体部 への取り付け部分は外側に押されて歪む。ヨコ ナデ。外面僅け付着。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②普通 ③外・黒色 (7.5382/1) 内：褐色 (7.5384/6)	D-1 グロッド 上層	
	6	土師質土器 内耳罐	(→)・(15.0)・(7.3)	体部～底部片。体部下端に丸味を持つ。外面僅 け付着。ヨコナデ。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②普通 ③外・黒色 (7.5382/1) 内：褐色 (7.5384/6)	D-1 グロッド 上層	
	7	常滑 壺	(40.0)・(→)・(9.6)	口縁部片。口縁部は折り返し縁部には頸部に 縁付する。 11.型式。	①大粒の長石・石英・白色粒多量 ②良好 ③還元色 (2.5384/2)	D-1 グロッド 中層	
SD03	1	青磁 蓮華文鉢	(→)・(→)・(4.9)	口縁部片。陰刻された縁部の下に無縁蓮華文を 織く。蓮華葉系の製品。	①褐色粒多量 ②良好 ③緑灰色 (7.5036/1)	L-2 グロッド 上層	
	2	土師質土器 皿	(→)・4.4・(2.0)	1/4存。ロコ成形。底部外面回転糸切り。見 込み縦線にナデ。	①石英・雲母・白色粒・褐色粒多量。 ②還元少量 ③普通 ④明褐色 (10387/6)	底面上 15cm	

第9表 SD03・04・07・09, SK08・17・18・21・24・28, 中世遺構外出土土物観察表

遺構番号	遺物番号	部種	計測値 (cm) 口径・底径・器高	成・整形技法, 特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
SK03	3	土師質土器 皿	7.8・3.9・2.5	2/3存。ロクロ成形(右回転)。底部回転糸切り。足込み筒縁部にナズ。口唇部に油煙付着。灯明使用。	①石質・雲母・白色粒・褐色粒多量 ②普通 ③明褐色 (7.5385/3)	底面
	4	常滑 段鉢	→ → (7.1)	体部下平片。体部下半に指頭瓦筋。内面は良く使用され薄らである。	①長石・石英・白色粒・褐色粒多量 ②良好 ③にぶい黄褐色 (5194/4)	L-2 グリッド 上層
SK04	1	土師質土器 内耳鉢	→ (18.0)・(6.0)	体部下平~底片。体部下端は丸味を持つ。外面腐付着。ヨコナズ。	①石質・雲母・白色粒・褐色粒多量。 海面骨針少量 ②良好 ③外・黒色 (10192/1) 内：にぶい黄褐色 (10197/4)	覆土
	2	雑瑛・河内式 壺・甕	→ → (10.5)	胴部下平片。外面ナズ。内面指頭瓦筋。	①石質・白色粒多量。褐色粒少量 ②良好 ③褐色 (5194/1)	底上 16cm
SK07	1	土師質土器 皿	→ (4.0)・(1.8)	1/3存。ロクロ成形。体部は直線的で器壁は薄い。	①石質・雲母・白色粒・褐色粒多量。 褐色粒・海面骨針少量 ②良好 ③にぶい黄褐色 (10192/4)	覆土
	2	土師質土器 内耳鉢	→ → (6.2)	口縁部~体部下平片。ヨコナズ。外面腐付着。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②普通 ③外・黒色 (10192/1) 内：にぶい黄褐色 (10196/4)	覆土
	3	土師質土器 内耳鉢	→ → (5.4)	耳部片。耳の断面は紐状で、体部への取り付け部分は外側に押し当てて歪む。ヨコナズ。外面腐付着。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②普通 ③外・黒色 (7.5381/7) 内：褐色 (7.5386/6)	覆土
	4	瓦質土器 鉢型ナズ	→ → (4.0)	破片。方型とみられる。側面に孔を持ち台をかけた可能性が有る。	①石質・白色粒多量。雲母少量 ②普通 ③黒褐色 (10193/2)	覆土
SK09	1	土師質土器 皿	→ 5.0・(0.9)	底部片。ロクロ成形。底部回転糸切りと板目状瓦筋。内面に横方向のナズ。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②不良 ③外：にぶい黄褐色 (10197/3) 内：褐色 (7.5394/1)	B-3 グリッド
SK08	1	土師質土器 皿	→ → (1.6)	口縁部片。ロクロ成形。	①石質・雲母・白色粒・褐色粒多量 ②良好 ③灰白色 (10198/1)	下層
SK17	1	土師質土器 皿	→ (3.2)・(1.9)	体部~底部片。ロクロ成形。底部は高台状となる。	①石質・雲母・白色粒・褐色粒・褐色粒多量 ②普通 ③外：灰褐色 (7.5394/2) 内：明褐色 (7.5395/6)	覆土
	2	土師質土器 内耳鉢	→ → (4.3)	口縁部片。ヨコナズ。外面腐付着。	①石質・白色粒・褐色粒多量 ②良好 ③外・黒色 (10192/1) 内：灰白色 (10198/2)	グリッド
SK18	1	土師質土器 内耳鉢	→ → (3.5)	口縁部片。ヨコナズ。外面腐付着。	①石質・雲母・白色粒・褐色粒多量 ②普通 ③外・黒色 (7.5392/1) 内：にぶい褐色 (7.5398/4)	覆土
	2	石製品 磁石	長さ(10.1)、幅10.4、厚さ4.0、重さ(555.0)g。1/2存。使い込まれた結果中央が窪み破損する。形類は方形状で表面及び側面が使用され、特に側面の使用は顕著で面を為す。砂岩製。		覆土	
SK21	1	土師質土器 内耳鉢	→ → (2.2)	体部下端~底部片。体部下端に丸味を持つ。ヨコナズ。蒸熱。	①長石・石英・白色粒・褐色粒多量。 海面骨針少量 ②普通 ③外：にぶい黄褐色 (10196/3) 内：黄褐色 (10198/4)	覆土
SK24	1	土師質土器 皿	→ → (1.8)	口縁部片。ロクロ成形。口唇部の内側に油煙付着。灯明使用。	①石質・雲母・白色粒・褐色粒多量。雲母・褐色粒中量 ②良好 ③褐色 (7.5386/6)	覆土
	2	土師質土器 皿	→ → (3.0)	口縁部片。ロクロ成形。体部は直線的である。	①石質・雲母・チタード・白色粒多量。 褐色粒中量 ②良好 ③浅黄褐色 (10198/3)	覆土
	3	土師質土器 種鉢	→ → (2.4)	体部下平片。5本の指目が認められる。	①石質・雲母・白色粒・褐色粒多量 ②普通 ③褐色 (10194/6)	覆土
	4	瓦質土器 鉢型	→ → (3.4)	体部下平片。体部下端部にヘラケズリを施す。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②不良 ③黒褐色 (10193/1)	覆土
SK28	1	石製品 磁石	長さ2.0、幅1.9、厚さ0.7、重さ3.6g。完全。良く磨かれている。砂岩製か。時期不明。		上層	
中世遺構外	1	産地不明 種鉢	(25.0)・→ (5.0)	口縁部片。指筋。口縁部は肥厚し、口唇部は丸味を持つ。指筋はしっかりとしている。	①白色粒多量。きめ細か。②良好 ③暗赤褐色 (583/1)	D-2 グリッド
	2	常滑 壺	→ → (7.0)	口縁部片。指筋が破損しているため測定はできないが側面に自然輪が認められたいことから輪止の縁部を持つと判断した。8型式。	①大粒の長石・石英・白色粒多量 ②良好 ③灰赤色 (2.5384/2)	H-1 グリッド
	3	常滑 壺	(72.5)・21.0・80.0	1/2存。大甕。自重により下へ歪む。口縁部は折れて縁部部となり縁部に接合し、口唇部は上方につきまみ上げられる。胴部下端へラケズリ。内面の上半指頭瓦筋。下半へラケズリ。9~10型式。	①大粒の長石・石英・白色粒多量 ②良好 ③灰赤色 (1084/2)	B-3 グリッド
	4	常滑 壺	→ → (8.9)	口縁部片。大甕。縁部部は欠損しているが頸部に接合していたとみられる。破損。9~10型式。	①大粒の長石・石英・白色粒多量 ②良好 ③灰赤色 (7.584/2)	B-3 グリッド
	5	常滑 壺	→ → (9.9)	胴部片。大甕。外面に文字彫りの押印文(大月)が内面に指頭ナズ。	①大粒の長石・石英・白色粒多量 ②不良 ③褐色 (5194/1)	B-3 グリッド
	6	石製品 石臼	長さ(8.0)、幅(13.9)、重さ(309.5)g。破片。上臼が、僅かだが目が確認できる。定山岩製。			E-1 グリッド

第10表 出土遺物集計表

種別	遺構	S1							SX		SA		SD											
		01	02	03	04	05	06	07	08	01	02	01	02	03	04	05	06	07	08					
縄文時代	土器	茅山				1														1	1			
		黒高					1	1			1	2			1									
		浮島Ⅱ									1	1	1									1		
		冨島谷														1								
		阿玉谷																						
		加曾利E層						1														1		
		中期						1							1							1		
		新石器																				1		
								1			1										2			
	後期																							
石器	二次加工のある削片																							
縄文時代	土器	遺・器																						
古代	土師器	埴	赤ロタロ鉢						4	1			1											
			赤ロタロ片	16	1	3	4			2	5	5	3								2	1		
			ロタロ片								1	2	3										1	
		盤						5		7	2	2	2	2										
		皿											1											
		鉢					1																	
		甕	甕	1																				
			片	33	1	2	13	39		2	41	56	1	27	2	26	3	12	5	39				
		須恵器	埴	甕				1																
	片			7			1	10			6	18	2	9	4		2	8	3					
	盤		盤				2	1					8	2	5	4							3	
			鉢						1														1	
	高埴		甕																				1	
			片																				3	
	高埴		甕	2				1			1													
			片	4	2			3			7	16	2	8	2	3							8	
	甕・瓶類		甕	12			2	8			2	2	1	2	1		2	2						
			甕					5			5	17	2	9	8	1	1							
	氏輪陶器		甕	1																				
		志箱												1										
	瓦	軒丸瓦																						
		丸瓦											2	1	1									
		平瓦						1																
	土製品	羽口	2										1				1							
		埴埴									6													
	石製品	埴埴蓋									1													
		砥石	1								3													
	鉄製品	不明	1																					
		釘	2																					
	銅製品	帯金具(控尾)																						
		銅塊																						
	時期不明	鉄洋	1									4												
		伊磨	2									10												
	中世	銅器	青銅	遺物・文様																				
			古瀬戸	平輪																				
			黒美・黒西	巻・変型																				
			常滑	埴鉢																				
			不明	盤																				
		土師質土器	皿	甕											1	1	1							1
				片											1	1	1	1						1
			香炉														1							1
			埴鉢										1											
			内房鉢										1	4	9	1	2							4
	瓦質土器	埴鉢																						
		風炉台																					1	
石製品	砥石																							
	石臼																							
時期不明	石製品																							
	銅製品	不明	3									2												
計		89	1	5	3	22	92	1	4	104	2	154	14	94	10	60	5	20	45	54				

第4章 長者山城跡出土土器付着物の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

水戸市に所在する長者山城跡は、中世の城郭とされているが、その所在地は古代の台渡里官衙遺跡群と重複している。発掘調査では、概ね7世紀末から8世紀前半までの時期に帰属するとされる須恵器や土師器などの遺物が多数出土しているが、それらのなかには内面や外面に多量の付着物を伴う遺物が確認されており、漆工房に関わるパレットのような道具である可能性が指摘されている。

本報告では、この付着物の材質確認を目的とし、有機化合物としての特性を調査する手法である赤外分光分析（フーリエ変換赤外線吸収スペクトル法;FT-IR）を実施するとともに、赤色顔料等の混和の有無を確認する目的で蛍光X線分析による元素分析及び薄片作製による顕微鏡観察を行う。

1. 試料

試料は、堅穴建物跡等から出土した須恵器や土師器の9点であるが、本分析では、SI01-11須恵器内面付着物、SI06-①土師器内面付着物、古外-5須恵器内面付着物の3点を分析に供する。

2. 分析方法

(1) 赤外分光分析

1) 赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素等の原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けた時に突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合には、電磁波のなかでも赤外線領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、様々な結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数 cm^{-1} で示す）、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるか調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標準化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することより、未知物質の同定をすることもできる（山田、1986）。

第11表 漆付着土器一覧

資料番号	種別	漆付着位置	分析対象
SI01- 9	須恵器 平瓶	内面	
SI01-10	須恵器 壺・瓶類	内面・割れ口	
SI01-11	須恵器 壺・瓶類	内面・割れ口	内面
SI01-12	須恵器 壺・瓶類	内外面・割れ口	
SI04- 1	須恵器 壺・瓶類	内外面・割れ口	
SI06- ①	土師器 坏	内外面	内面
SI06- ②	須恵器 壺・瓶類	内外面・割れ口	
古外- 3	須恵器 壺・瓶類	内面	
古外- 5	須恵器 壺・瓶類	内面・割れ口	内面

2) 赤外線吸収スペクトルの測定

付着物から採取した微量試料をダイヤモンドエクスプレスで加圧成型した後、顕微FT-IR装置（サーモエレクトロン（株）製 Nicolet Avatar 370, Nicolet Centaurus）を利用し、測定を実施した。

なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。本調査の測定条件を第12表に掲げる。

(2) 蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置JXSX-1000S（日本電子（株））を利用し、定性分析を実施した。

なお、本装置は下面照射型装置のため、測定は試料をプロレンフィルム（4 μm）（ケンプレックス製 CatNo426）に固定して行った。測定条件は、管電圧 50kV、管電流（自動）、測定時間120秒（live time）、コリメーター2mmφ、真空雰囲気である。

(3) 薄片作製観察

破片を合成樹脂で包埋し、塗膜の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレバラートとする。プレバラートを生物顕微鏡等で観察し、塗膜断面の構造・混和物等について観察する。

3. 結果

(1) 赤外分光分析

FT-IRスペクトルを第14図に示す。図中には比較資料として漆と炭化物の実測スペクトルを併記している。いずれの付着物も赤外線吸収特性は同様で、3400cm⁻¹付近の幅広い吸収帯の他、2930cm⁻¹、2860cm⁻¹、1710cm⁻¹、1600cm⁻¹、1460cm⁻¹、1270cm⁻¹付近の強い吸収帯や1370cm⁻¹、1080cm⁻¹、1050cm⁻¹付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、3400cm⁻¹付近の吸収帯はO-H基の伸縮振動、2930cm⁻¹、2860cm⁻¹付近の吸収帯はメチル基及びメチレン基のC-H伸縮振動、1710cm⁻¹付近の吸収帯はC=O伸縮振動、1600cm⁻¹付近の吸収帯はC=C伸縮振動、1460cm⁻¹付近の吸収帯はC-H対称変角振動、1270cm⁻¹付近の吸収帯はメチル基の対称変角振動やC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。また、1050cm⁻¹付近の吸収帯はSi-O伸縮振動とみられる。

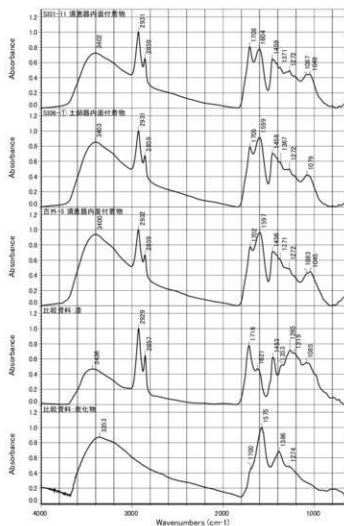
(2) 蛍光X線分析

蛍光X線定性分析結果を第46～48図に示す。SI01-11内面付着物ではAl（アルミニウム）、Si（ケイ素）、P（リン）、S（硫黄）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Cu（銅）、Br（臭素）、Sr（ストロンチウム）、Y（イットリウム）、SI06-①内面付着物ではAl、Si、P、S、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Cu、Sr、Y、Hg（水銀）、古外-5内面付着物ではAl、Si、P、S、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Cu、Br、Sr、Yが確認される。相対強度をみると、試料間でやや特徴が異なり、SI06-①内面付着物においてFeとHgが、古外-5内面付着物ではCaが比較的多い傾向がある。

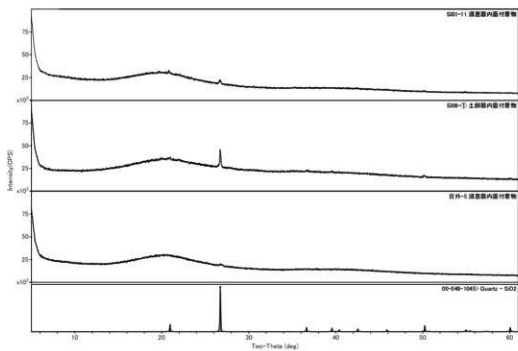
第12表 FT-IR 測定条件

光学系の構成	
光学系	Avatar System 370
光源	IR
ビームスプリッター	KBr
測定アクセサリ	Centaurus
検出器	MCT/A
測定情報	
サンプルスキャン回数	64
バックグラウンドスキャン回数	64
分解能	4.000
サンプルゲイン	8.0
ミラー速度	1.8988
アポダイゼーション	Happ-Genzel
位相補正	Mertz

第4章 長者山城跡出土土器付着物の自然科学分析



第44図 付着物のFT-IRスペクトル



第45図 付着物のX線回折図

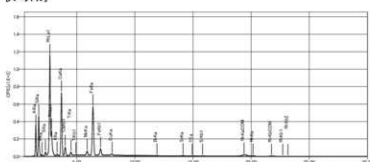
【分析条件】

測定機器 JISX-1000S
 管電圧 50 [KV]
 管電流 0.345 [mA]
 コリメーター 2.0 mm
 分析時間 120 [sec]
 一次フィルタ Open

【定性結果】

原子番号	元素名	積分強度	ライン	フィルタ
13	Al	340271	K	Open
14	Si	431392	K	Open
15	P	21434	K	Open
16	S	55650	K	Open
19	K	23525	K	Open
20	Ca	1062435	K	Open
22	Ti	65817	K	Open
25	Mn	98788	K	Open
26	Fe	1230220	K	Open
29	Cu	26599	K	Open
35	Br	3859	K	Open
38	Sr	24713	K	Open
39	Y	9930	K	Open

【スペクトル】



第 46 図 S101-11 内面付着物の蛍光 X 線定性分析結果

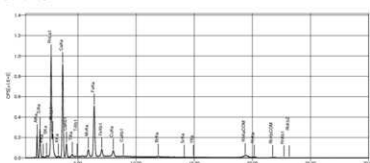
【分析条件】

測定機器 JISX-1000S
 管電圧 50 [KV]
 管電流 0.255 [mA]
 コリメーター 2.0 mm
 分析時間 120 [sec]
 一次フィルタ Open

【定性結果】

原子番号	元素名	積分強度	ライン	フィルタ
13	Al	212120	K	Open
14	Si	279993	K	Open
15	P	13223	K	Open
16	S	24734	K	Open
19	K	18742	K	Open
20	Ca	137990	K	Open
22	Ti	47223	K	Open
25	Mn	142199	K	Open
26	Fe	1096137	K	Open
29	Cu	128834	K	Open
35	Br	23182	K	Open
38	Sr	10670	K	Open
39	Y	6379	K	Open

【スペクトル】



第 47 図 S106-① 内面付着物の蛍光 X 線定性分析結果

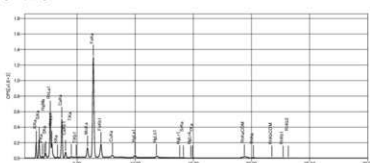
【分析条件】

測定機器 JISX-1000S
 管電圧 50 [KV]
 管電流 0.215 [mA]
 コリメーター 2.0 mm
 分析時間 120 [sec]
 一次フィルタ Open

【定性結果】

原子番号	元素名	積分強度	ライン	フィルタ
13	Al	194943	K	Open
14	Si	239222	K	Open
15	P	25709	K	Open
16	S	55130	K	Open
19	K	13403	K	Open
20	Ca	743005	K	Open
22	Ti	21645	K	Open
25	Mn	25527	K	Open
26	Fe	283094	K	Open
29	Cu	61775	K	Open
38	Sr	8911	K	Open
39	Y	10020	K	Open
80	Hg	194447	L	Open

【スペクトル】



第 48 図 古外-5 内面付着物の蛍光 X 線定性分析結果

(3) 薄片作製観察

巻頭図版3に薄片の写真を示す。塗膜片は、厚さ150～300 μm と不均一で、萎縮により被打っている。基質は赤褐色で光をやや透過することから、漆と思われる。光を透過することから、着色用の顔料等は混じっておらず、生漆の状態とみられる。混入物と思われるシルト粒径の微粒子が少量混じっており、これらは軽鉱物（石英や長石片）や炭粉である。

4. 考察

(1) 漆の可能性について

弊社では試料の出所が既知の物質について、同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつかあるが（未公表）、遺跡で検出される有機質遺物の代表としては漆、天然アスファルト、樹脂、動植物油、炭化物などの調査例がある。これらは、いずれも固有の吸収帯があり、漆では3400、2930、2860、1720、1620、1450、1270、1090 cm^{-1} 、天然アスファルトでは2960、2920、2860、1700、1610、1460、1380 cm^{-1} に脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯に特徴がある。また、樹脂は1700 cm^{-1} 、動植物油は1740 cm^{-1} 付近に特徴的な吸収帯があり、炭化物は3400 cm^{-1} 、1580 cm^{-1} 、1390 cm^{-1} 付近にみられる極大吸収によって特徴付けられる。

今回の分析試料である各付着物の赤外線吸収特性には、1600 cm^{-1} 、1400 cm^{-1} 付近に炭化物、1050 cm^{-1} 付近に無機ケイ酸塩鉱物と考えられる介在物の影響がみてとれる一方で、比較資料の漆にみられる3400 cm^{-1} 及び2930 cm^{-1} 、2860 cm^{-1} の吸収と2000 cm^{-1} 以下における1720 cm^{-1} （カルボニル基）、1620 cm^{-1} （糖タンパク）、1450 cm^{-1} （活性メチレン基）、1270 cm^{-1} （フェノール）、1090 cm^{-1} （ゴム質）の吸収が確認される。ただし、1270 cm^{-1} （フェノール）の吸収は比較資料の漆と比べて弱い。

おそらく介在物の影響のために、各試料と比較資料の漆との間におけるスペクトルパターン的一致性は乏しいが、漆の特徴は看取される。したがって、付着物の主体は漆である可能性があると考えられる。今後、漆である確証を得る方法としては、熱分解ガスクロマトグラフィー質量分析（Py-GC/MS）によってウルシオール等に代表される漆成分の熱分解生成物を確認するなどの方法がある。

(2) 赤色顔料等の混和有無について

試料から検出された元素のうち、赤色顔料の構成元素に相当するものはFe（ベンガラ）とHg及びS（水銀朱）が挙げられる。SI01-11内面付着物ではFe、SI06-①内面付着物ではS、Fe、Hg、古外-5内面付着物ではFeが認められており、相対強度をみるとSI06-①内面付着物においてFeとHgが比較的多い傾向がある。しかしながら、いずれの試料からも多様な元素が検出されている状況であるために、検出されたFeやHgが付着物に混和する赤色顔料を示唆するものか、あるいは付着物に介在するもしくは試料に付着する胎土や覆土に由来する鉱物の構成元素を検出しているのかは、現時点では判断出来ない。情報を付加することを視野に、X線回折分析による鉱物同定を行ったところでは（第45図）、いずれの試料とも石英（quartz）による弱い反射が認められるのみである。ベンガラを示唆する赤鉄鉱（hematite）や水銀朱を示唆する辰砂（cinnabar）の反射は確認出来ないため、現状では赤色顔料の混和は確認できない。薄片観察による状況も考慮すれば、土器付着物は炭粉や鉱物片などの不純物を若干含む生漆と考えられる。塗膜片が厚くかつ不均質なことから、漆は塗布されたものではなく、土器をパレットや保管容器として利用したものではないかと思われる。

引用文献

山田富貴子, 1986, 赤外線吸収スペクトル法, 機器分析のてびき第1集, 化学同人, 1-18.

第5章 総括

第1節 土地利用の変遷

今次調査は、長者山城跡の主郭から南東へ約160mの距離を隔てた台地縁辺において実施されたが、これまでの調査と比べまとまった面積を対象としたことや、調査区がトレンチ状に南北方向に設定されたこともあって、長者山城跡の構造を知ろうと多くの知見を得ることができた。遺構は中世に留まることなく、古墳時代後半、さらには縄文時代早期へと遡り、台渡里の台地における先史時代の活動が捉えられている。

縄文時代で遺構が検出されたのは早期後半であり、覆土はスコリアとみられる白色粒を含有し堅く締まっていた。底面にピットを伴う形態から、茅葺式期には陥穴が設けられ、猟場となっていたと考えられる。他の時期の様相は不明ながら前期黒浜式・浮島Ⅱ式・栗島台式、中期加曽利EⅢ式、後期称名寺Ⅱ式・加曽利BⅡ式の土器片が得られ、断続的であっても長期にわたる縄文人の活動を示している。また、1点のみ弥生時代後期の壺あるいは甕類の口縁部片も出土した。

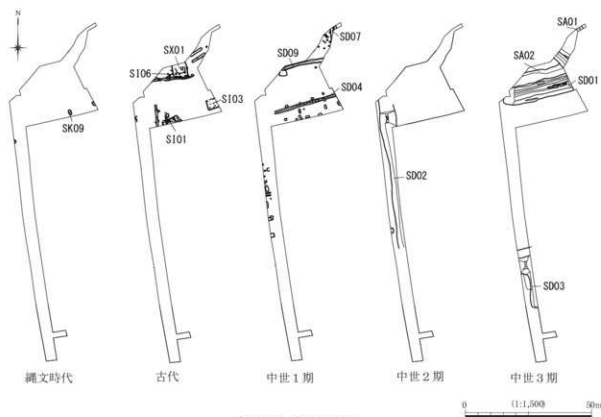
竪穴建物跡が構築されはじめるのは7世紀前半からで、8世紀前半へかけて性格不明遺構(SX01)、溝跡(SD05・06・08・10・11)、土坑(SK13・15・29・30)、ピット(P11・23・37・40)が検出され、工房が営まれていた。

工房跡の可能性のあるのは性格不明遺構としたSX01のみである。ただし、炉や被熱は認められず、多量の灰黄褐色砂質土と埴埴、埴埴蓋、鉄滓(100g)、スサを混入した炉壁(570g)が確認される。他の遺構からは、やはり木炭の堆積をはじめ直接的に炉の検出はなかったが、羽口や鉄滓(450g)、砥石が出土し、内面が溶解した炉壁(320g)が破片の状態で見られている。炉壁の重量は全体で890gになる。古代の製鉄炉は鉄塊を取り出すために炉外壁を壊すことからその一部と理解され、斜面を含めた調査区周辺で精錬段階の鉄生産を物語る。そして、この施設には、鍛造剥片の出土はみられなかったものの、椀型滓(SI01-18、SX01-18)や大型の砥石(SX01-11)を含んでいるなど鍛冶工房の併設を暗示する。また、時期不明ながら溶解した銅が認められ、埴埴や羽口、炉壁にも僅かながら緑青の付着がある。台渡里廃寺跡南方地区の第2次調査では、銅に関連する工房跡が調査されており注意を要する。

さらに、漆が付着した土器も9点を数え、この時期における大きな調査成果となっている。漆塗りのバレット(SI06-D)を除く漆が付着した土器は、壺・瓶類の口が狭い器形を主体とする。いずれも破損品で内面はもとより割れ口にも漆の付着が認められた。このことから原液を輸送する際容器として用いられ、壊すことで内容物の漆を取り出したと判断される。このような事例は、7世紀後半～8世紀初頭の工房遺跡として知られた奈良県の飛鳥池遺跡でも確認できる。

これまでの台渡里官衙遺跡群では、台渡里第64次調査で鍛冶工房とみられる竪穴建物跡が報告されているが、今次調査によって、直接的ではないものの台渡里官衙遺跡群の外縁にあたる台地東側縁辺部にも、製鉄(精錬)と金属加工、漆を扱う工房地区としての土地利用が明らかになった。特に、帯金具の鉈尾が出土したことは、寺を含む郡衙の造営に関わる官営工房の可能性を高め、国衙工房の鹿の子C遺跡を連想させる。

次に本遺跡を特徴付ける中世の土地利用についてみてみたい。中世の遺構は土壘・堀跡・溝跡・大型土坑・土坑・ピットで構成される。この遺構群は少なくとも三時期に大別できる。なお、中世に帰属すると判断した遺物は破片総数82点で、今次調査における全出土遺物の約8%を占める。



第49図 遺構変遷図

中世の1期は、主に土塁下の遺構であり、堀跡以前に位置付けられ、SD04・07・09・12、大型土坑のSK16、土坑のSK01～08・10～12・14・18～21・23～25・27・28・31、ピットがこれにあたる。さらに本期は旧表土形成以前と以後に二分される。

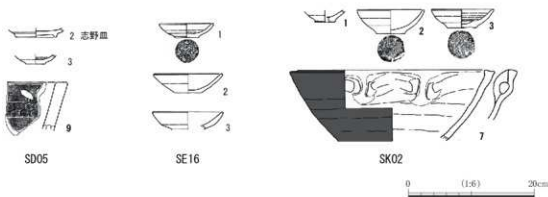
溝跡は区画を意図したものと理解されるものの、性格を決定付ける資料は得られていない。時期についても溝跡は土坑と重複するので、やはり本期のなかでもいくつかの小期には分かれる。中世に帰属する遺構の相対年代を重複関係や旧表土を手掛かりにみると、SD09⇒旧表土の形成⇒SK16、SK18～21・24、SD12（旧⇒新）となる。遺物では渥美・湖西系製品の壺・甕類が最も古く12～13世紀、常滑製品は8型式の14世紀後葉～11型式の16世紀前葉、古瀬戸は後期様式である。陶器については生産地の年代よりもやや下る期間を加えて検討すべきであるが、中世に帰属する遺物の大多数は15世紀代で占められていた。土塁下から検出された旧表土の上部には、口縁部が僅かながら外反し、腰の露胎部が低いなど後期様式Ⅰ～Ⅲ期に比定される古瀬戸の平碗が含まれており、旧表土は遅くとも15世紀前半には形成されている。大型土坑のSK16、SK18～21・24、SD12を除いた遺構の多くは旧表土形成以前にあたるが、絶対年代の提示は難しく、大きく城郭以前として捉えておきたい。

当地には、「一盛（守）長者」といわれる経済的優位者が居住し、後三年の役の折、源義家に滅ぼされたとする伝承がある。その背景には那珂川の水運と、東海道という陸上交通路との結節点にあたる当地の経済的な繁栄がうかがわれ、律令制衰退後、その営みは少なくとも鎌倉時代までは継続していた。本遺跡の南西方約1kmに位置する堀跡第4地点では、県下でも発見例の少ない滑石製石鏡が出土するなど、中世前期の遺物には留意する必要がある。

中世2期の遺構は、SD02の堀跡1条とSK17である。中世3期のSD01・03に先行するので16世紀後半としておくと、中世3期に極めて近い。出土遺物は貧弱であり、続く中世3期を含めた調査区は、城内において軍事的性格の強い場所と考えられる。

中世3期の遺構はSD01と03である。ともに底面近くから同じ系譜に属する小型の土師質土器皿(SD01-1, SD03-3)が出土し、埋め戻しの状況と土塁の残存により二つの堀跡が城郭終焉時に同時に機能していたことは明らかである。残念ながら構築の時期は定かではないがSD01に限っては中世遺物は少なく、堀の掘削から廃絶までは短期間であったと捉えられる。この出土した土師質土器の皿は両者ともに右回転のロクロ成形で、見込みにナデ調整を施しており、16世紀中葉～末の所産として理解した。さらに、口径に比して底径が小さく台状に立ち上がる本資料は、河和田城跡の第26地点でも類似品が出土している。第50図に参考資料として提示したが、これらは、井戸跡や溝跡への投棄資料なので根拠とするには脆弱さは否めないもの、志野皿が出土しており、16世紀末～17世紀前半に比定されている。これらのことから、SD01は16世紀末に機能が停止したと判断した。その状況は粘土・礫を含む土砂でしっかりと埋め戻され、破城行為によって終焉を迎えていた。この行為は単なる埋め戻しではなく、封印との印象が強い。

今次調査においては15世紀後半から遺物が増加するので、遅くともこの時期には築城が開始され、何度かの改修を経ながら16世紀末の破城によって機能が停止したと理解しておきたい。現在みられる長者山城跡の台地縁辺に沿う形で主要な郭を連ねる構造は、城郭の拡大過程を物語っており、城郭が長期にわたり機能し存続したとするならば、変遷は決して単純ではないと考えられる。



第50図 河和田城跡第26地点出土土師質土器組成図

第2節 長者山城における調査区の性格と構造

今次調査において明確な城郭関連遺構は土塁と堀跡のみである。ここでは中世3期を中心としつつ調査区の性格と構造を考える前提として、各遺構の調査成果について改めて概観しておこう。

調査区内に位置する土塁はSA01と02の2条である。SA01は、台地縁辺に地形に規定されつつ南北方向に構築されたもので、その外側には台地斜面を併走する横堀を伴っており、SA02はSD01の北に面していた。長者山城跡では主郭を圍繞する土塁をはじめ現在みられる土塁の規模は大きい。また、SA01・02の前面に位置する堀跡の規模を考慮すると、SA01・02の土塁もそれなりの大きさがあっても

不思議ではないが、いずれも2m以内の高さであったと推測される。構築技法についてSA01は、15世紀前半には形成されたとみられる旧表土を斜面側（東側）のみ除去し、その上に礫層を芯としつつ黒色土、ローム土を積み上げて緩衝材とし粘質土で覆っていた（巻頭図版2）。礫層だけでは崩壊のおそれがあるための工夫である。一方これと接続する可能性の高いSA02は、上部と南側1/3程が壊されているものの、黒褐色土を南の堀側に置きローム土やロームブロック、粘土ブロックを混入した土砂を層状に積み上げていた。基本的には同じ技術といえる。ただし、その芯を為す土砂は明らかに異なっていた。これはSA01に伴う堀跡が斜面に位置し、礫層に達しているために礫が得やすかった、あるいは構築場所により使用土を選択した結果、さらにはSA02との構築の時間差の三様の解釈が可能である。ここでは、基本的な造り方が類似することから時間差というよりも、立地上礫が得やすかったと考えておきたい。

堀跡は調査区を東西方向に走るSD01と南北方向のSD02が重複し、土層断面図作成部分の崩壊のため記録は残せなかったが観察ではSD01が新しかった。SD01の規模は上端幅7.20m、深さ4.50～4.67m、SD02は上端幅6.65m、深さ3.65mであり、SD02がやや小さい。断面形はSD01が「U」字状で「V」字状の葉研堀よりも毛抜堀に近い。一方、SD02は葉研堀の範疇に含まれよう。このSD02は調査区の南部で、上端幅6.40m、深さ3.40mを測るSD03に壊される。SD03は少なくとも二度折れて10mに及ぶ横矢掛けが認められ（図版7）、出土遺物からSD01・03は16世紀末、SD02はそれに極めて近い16世紀後半に機能したと判断した。

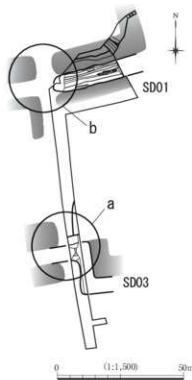
では、これらの知見から調査区の性格と構造についてどのようなことが導き出され、今後への課題となるのであろうか。以下の4点を提示しまとめとしたい。

（1）堀の配置からみた導線と虎口

SD03の大きな折れを持つ横矢掛けは、調査区外における虎口をうかがわせる。J・K-1グリッドの調査区際には土塁の存在が認められず約3mの土橋あるいは橋脚を伴う空間を経て再び西側に土塁が確認される。この空間には虎口が設けられていた可能性がある（第51図a）

また、南北に延びるSD02はSD01・03に先行するが、南北方向を基準にした調査区際における土層観察によると完全には埋められておらず、SD01・03の機能時に約14mの間、SD02の上部は溝状に開口していた。

さらに、西側には約15mのみ南北方向の土塁が認められる（図版7）。仮に古いSD02に伴う土塁とするならば、SD02の機能停止時に撤去されるものであり、配置状況からも違和感を覚える。ここを北上すると、西進してきたSD01が止まって西には東西方向の土塁が確認され、土塁とSD01の間は現状約4mの土橋状の空間となる。ここにも虎口が想定される（第51図b）。その場合、前述の土塁が移動を制限することになり、虎口間を繋ぐ導線の可能性が生じる。ただし、虎口2ヵ所ともに調査区外に位置し、実際に遺構が検出されたわけではない。



第51図 土塁・堀跡配置概念図

(2) 改修の時期とその要因

時期については、SD01・03の出土遺物から両者は16世紀末には機能していたと考えられる。したがってSD02はそれ以前の遺構になるが、SD01・03に近い時期と判断した。SD03の10mに及ぶ横矢掛けの規模もそれを物語ると理解できよう。さらに、その要因については、主郭のある北へ向け遮断となる堀を東西方向に構築していることから、主郭に対し縦深防御を意図して防御力を強化したことは明らかなのもの、直接的な要因までは言及できなかった。ただ、構造は南からの侵攻を想定しているようで、南には「宿屋敷」の地名が残るなど、この改修は単に戦闘の激化という社会情勢に留まるものではなく、「宿」の成立を視野に入れて検討すべき課題である。ここでは「宿屋敷」は武家地系宿として考えておきたい。

(3) 長者山城の勢力

通説では、江戸氏の重臣春秋駿河守の城郭と考えられている。今次調査の成果では直接それを裏付ける資料は得られていないが、一つの特徴として二重土塁の多用が挙げられる。

SD01の堆積土層を観察したところ南北両側から埋め戻されている状態で、南側からの堆積には粘土を含むなど、SA02に対峙する小型土塁の存在を示している。この他、SD03が延びるとみられる調査区外や主郭を囲繞する大規模な堀跡に伴う土塁も二重であった。

二重土塁は関東地方において広く用いられているが、江戸氏の城郭である河和田城跡や小幡城跡でも多用されている構造である。これに、遺物の貧弱さは否めないものの、羅掘を掘り込み大土木工事が行われている事実を考慮すると、築城主体は村落領主級よりは上位の勢力と考えられ、江戸氏の関与が想定される。

(4) 長者山城の終焉

天正18年(1590)12月、江戸氏領は佐竹氏の侵攻を受け、「十城十八警」といわれた城寨群は「風を開きて潰ゆ」と自落する(『水戸市史』)。長者山城も例外ではなかった。

前述した通り本報告では、土師質土器皿の形態から16世紀末以降にSD01・03は強固に埋め戻されたと判断している。昭和38年刊行の『水戸市史』には、今次調査区に堀跡の存在をうかがわせる記述があるので、その当時は堀が開口しており、現代の埋め戻しを考えたが、同書の昭和37年作成「長者屋敷実測図」には堀跡の記載がなく、堀跡が描かれているのは今次調査区の西際から西へかけてであった。調査を進めると堀跡の両側より土砂を投げ込んだ状況が明らかになり、SD01-D(巻頭図版2)の土層断面に基づき機能停止後早い段階で実施された破城の痕跡として理解した。

その実施者については江戸氏を滅ぼした佐竹氏、あるいは、徳川氏の二者が視野に入る。破城は地域社会の安定が前提であること、堀底より得られた土師質土器皿から、現時点では佐竹氏によるものと捉えておきたい。主郭及びSA01外側の堀跡をみると大掛かりな埋め戻しは実施されていないようであり、破城は一部分に対して行われた可能性が高い。群馬県太田市の金山城跡や千葉県いすみ市の大野城跡における事例を参考にとすると、一部分を対象とした場合には、その城の象徴的な部分の機能を停止させているようである。特に、大野城跡は深さ5mの堀跡を埋め戻し上部に岩盤ブロックを敷き詰めるなど、今次調査の事例と同じく封印との印象を持つ。これらのことから、調査区は本域域において軍事的な要となる場所と理解される。貿易陶磁は威信財とみられる1点のみで、土師質土器皿や日常雑器の出土量の少なさもそれを裏付けていよう。破城を「城郭の生命を絶ち切り、領域全体の無事＝平和回復を確定する神聖な手続き」(藤木, 2001)とするならば、長者山城跡は地域社会から軍事拠点と認識されていたことを示すものと解釈される。

台渡里地区では発掘調査が繰り返され、その多くは古代を対象とするものであった。そのなかで実施された今次調査の最大の成果は、城郭本来の機能である防御構造の一端を明らかにしたことである。これまでも台渡里官衙遺跡群の発掘では堀跡や瓦礫道など、中世に帰属する遺構が断片的ながら発見され、「宿」などの集落を含めた城域は広範囲に及んで、惣構構造をとる可能性が指摘されてきた。今後は城域を含めたより具体的な景観の復元が必要であり、これによって城郭運用の位置付け、つまり機能が明らかになると考えられる。そのためには、近年調査成果の蓄積が著しい河和田城跡をはじめ、江戸氏の城郭との比較検討が課題といえよう。長者山城跡、ひいては江戸氏の城郭における調査・研究ははじまっただけである。

(問宮)

主な引用・参考文献

- 浅井哲也 1993 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅱ)」『研究ノート』2号 茨城県教育財団
- 井上哲朗 2005 「南関東における城館跡出土陶磁器—その傾向と歴史的背景—」『城郭と中世の東国』高志書院
- 井上哲朗 2011 「房総における城館跡出土の貿易陶磁—国産陶器との伴伴関係を中心に—」『貿易陶磁研究』第31号 日本貿易陶磁研究会
- 大野城跡緊急発掘調査会 1978 『大野城跡発掘調査概報』
- 茨城県教育財団 1983 『鹿の子C遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第20集
- 茨城県考古学協会 2011 『茨城中世考古学の最前線—編年と基準資料—』
- 茨城大学人文学部考古学研究室 2014 『常陸国那賀郡家周辺遺跡の研究—報告編(地名・遺構・遺物)—』茨城大学人文学部考古学研究報告第11冊
- 佐々木義則 2013 「木葉下窯跡群産須恵器有台杯・有台杯蓋・有台盤の編年」『婆良岐考古』第35号 婆良岐考古同人会
- 全国シンポジウム「中世窯業の諸相」実行委員会 2005 『中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』
- 花田勝広 2005 「鉱物の採集と精錬工房」『暮らしと生業』列島の古代史2 岩波書店
- 藤木久志 伊藤正義 2001 『城織りの考古学』吉川弘文館
- 水戸市教育委員会 2007 『アラヤ遺跡(第2地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告第12集
- 水戸市教育委員会 2004 『台渡里廃寺跡』
- 水戸市教育委員会 2009 『台渡里1』水戸市埋蔵文化財調査報告第21集
- 水戸市教育委員会 2011 『台渡里3』水戸市埋蔵文化財調査報告第37集
- 水戸市教育委員会 2011 『台渡里4』水戸市埋蔵文化財調査報告第38集
- 水戸市教育委員会 2011 『台渡里6』水戸市埋蔵文化財調査報告第44集
- 水戸市教育委員会 2012 『古代常陸の原像 那賀郡の成立と台渡里官衙遺跡群』記録集
- 水戸市教育委員会 2015 『堀遺跡(第4地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告第65集
- 水戸市教育委員会 2016 『河和田城跡(第26・28地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告第71集
- 水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会 1995 『水戸市台渡里廃寺跡』
- 水戸市役所 1963 『水戸市史』上巻

写真図版







調査区全景（上空から）



同 全景（東上空から）



同 全景（北東から）



調査前現況（北東から）



調査前現況（南から）

図版 2



SK09 全景 (北から)



同 土層断面 (西から)



SK22 全景 (東から)



SK26 全景 (北から)



S101-02-08 全景 (北西から)



同 遺物出土状況 (北西から)



S101 遺物出土近景 (北から)



同 遺物出土近景 (北から)



S103 全景 (東から)



S104 全景 (南から)



同 遺物出土近景 (北から)



S105 全景 (北から)



S106, SX01 全景 (北から)



同 遺物出土状況 (北から)



S106 遺物出土近景 (北から)



同 遺物出土近景 (北から)

図版 4



S106-P1 遺物出土近景 (南から)



SX01 遺物出土近景 (北東から)



S107 全景 (北から)



同 遺物出土近景 (北西から)



SD05 全景 (南から)



同 土層断面 (北から)



S104, SD06 土層断面 (北から)



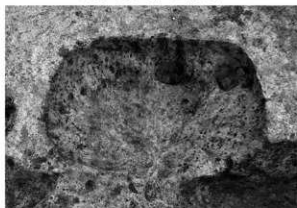
SD08・11 全景 (北東から)



SD09・10 全景 (西から)



SD10 土層断面 (西から)



SK13 全景 (西から)



同 土層断面 (北から)



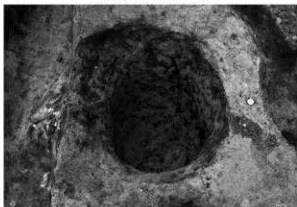
SK15 全景 (西から)



SK29 全景 (北から)



SK30 全景 (西から)



P40 全景 (東から)

図版6



SA01-02, SD01 全景 (西上空から)



SA01 全景 (西から)



同 土層断面 (北東から)



SA02 土層断面 (西から)



同 土層断面 (南東から)



SD02・03 全景 (南上空から)



SD01 土層断面 A (西から)



同 土層断面 C (西から)



SD02 全景 (北上空から)



同 全景 (北から)

図版8



SD02 土層断面 (北から)



SD03 全景 (上空から)



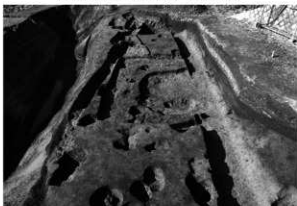
SD04 全景 (東から)



SD04, SK04 土層断面 (西から)



SD07 全景 (西から)



SD09 全景 (東から)



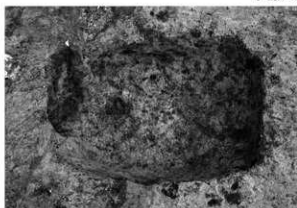
SD12 全景 (東から)



SK16 全景 (南から)



SK16 土層断面 (西から)



SK01 全景 (南東から)



SK02 全景 (南西から)



SK03 全景 (南から)



SK04 全景 (南から)



SK05 全景 (南から)



SK06 全景 (南から)



SK07 全景 (北東から)

図版 10



SK08 全景 (北から)



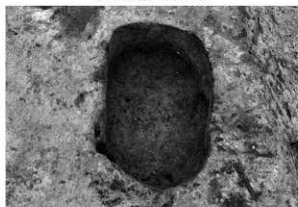
SK10 全景 (東から)



SK11 全景 (南から)



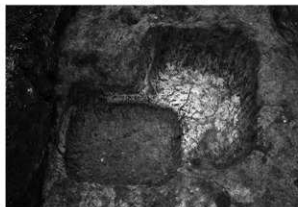
SK12 全景 (東から)



SK14 全景 (西から)



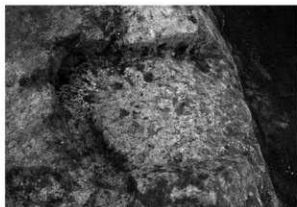
SK17-18 全景 (東から)



SK19-20 全景 (南から)



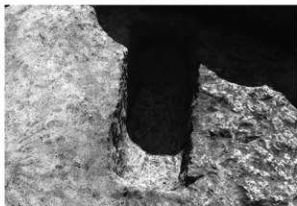
SK21 全景 (東から)



SK23 全景 (南から)



SK24 全景 (西から)



SK25 全景 (北から)



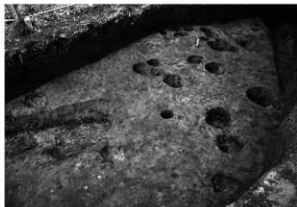
SK27 全景 (北から)



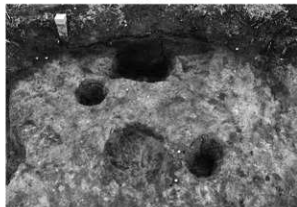
SK28 全景 (北から)



SK31 全景 (東から)

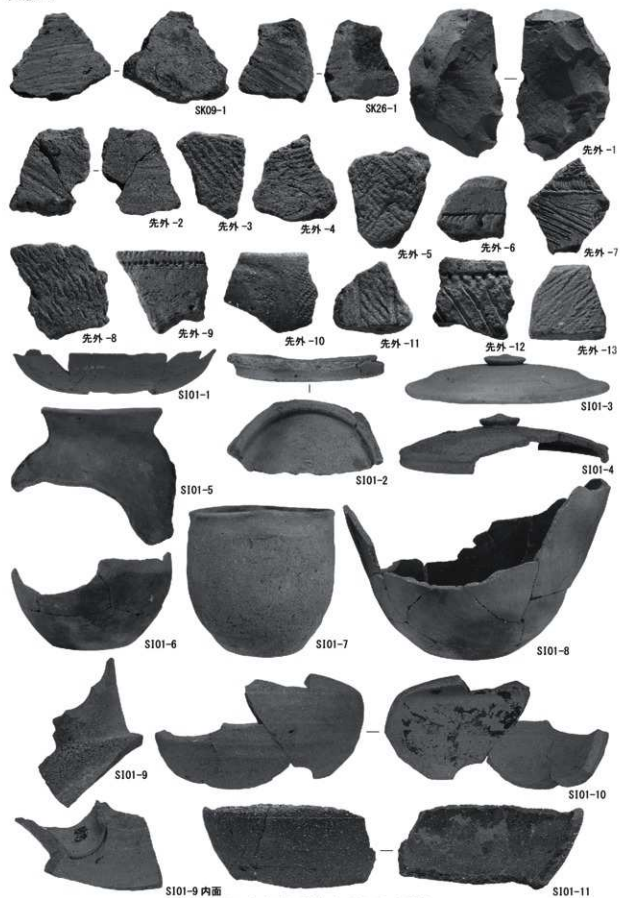


P01 ~ 14 全景 (南から)

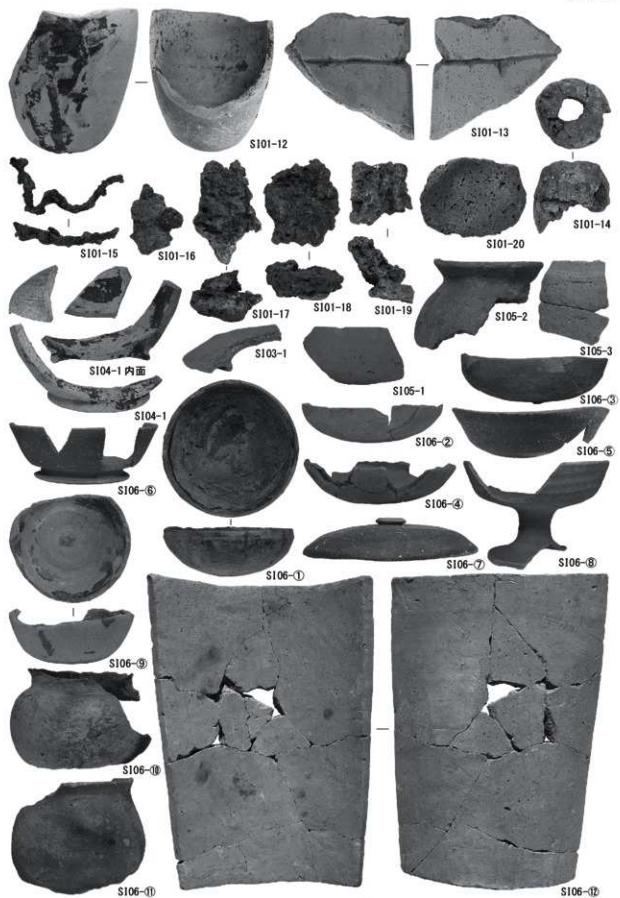


P18 ~ 21 全景 (東から)

图版 12

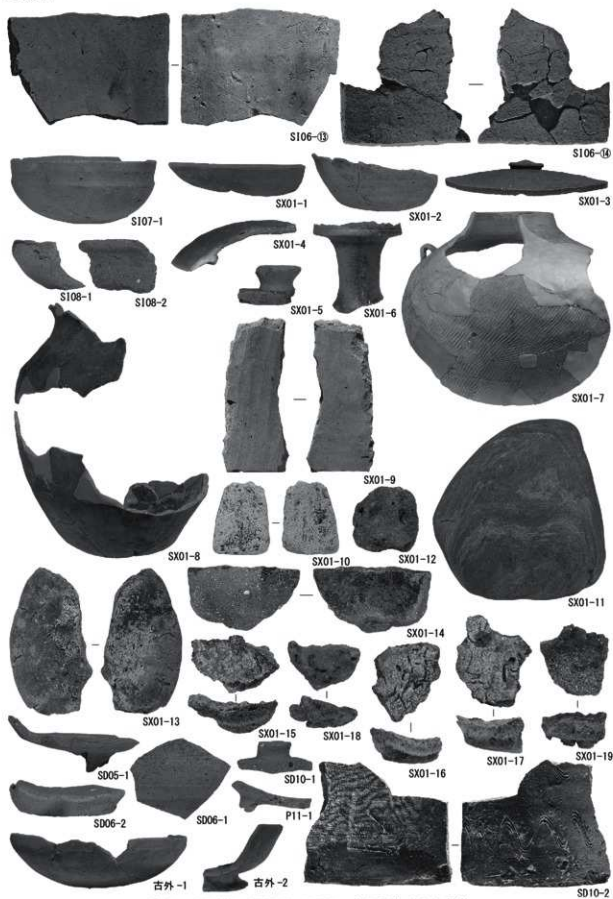


SK09-26, 先史時代遺構外, S101 出土遺物

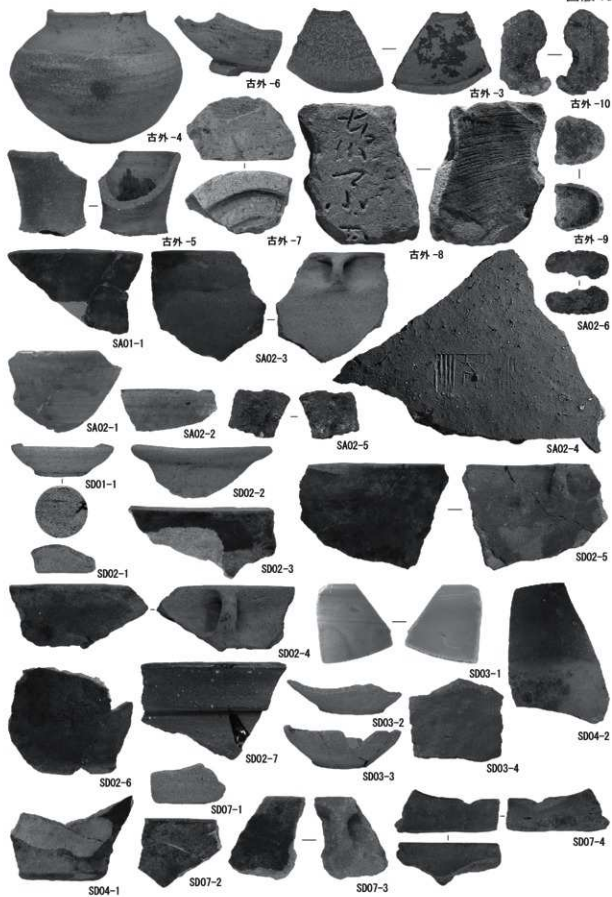


S101-03 ~ 06 出土遺物

圖版 14

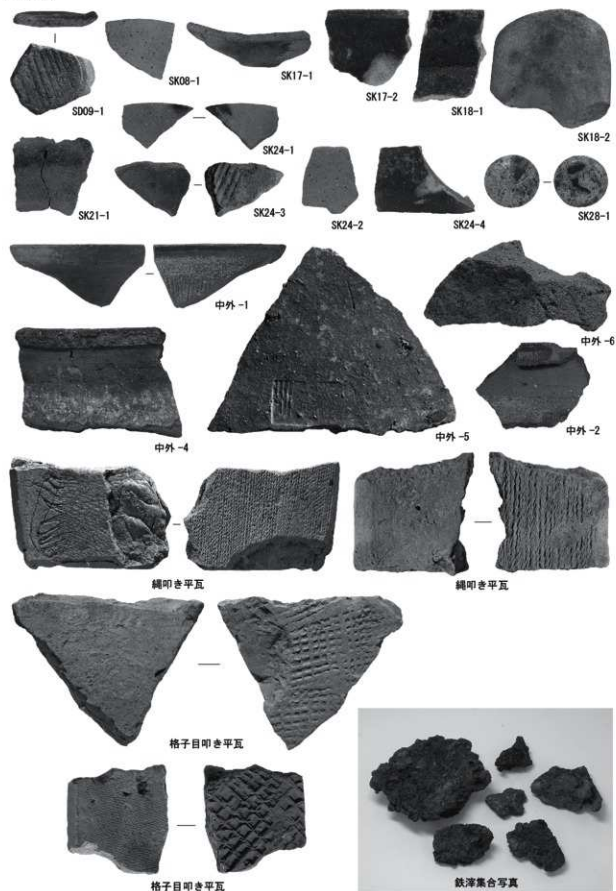


S106 ~ 08, SX01, SD05·06·10, P11, 古代遺構外出土遺物



古代遺構外，SA01・02，SD01～04・07 出土遺物

図版 16



SD09, SK08・17・18・21・24・28, 中世遺構外出土遺物

抄録

ふりがな	ちようじややまじょうあと (だいよんちてんだいにじ)								
書名	長者山城跡 (第4地点第2次)								
副書名	渡里揚水機場吐出し水槽工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	118								
編集者名	間宮正光								
著者名	間宮正光 米川暢敬								
編集機関	株式会社 地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 TEL0476-42-7820								
発行機関	水戸市教育委員会 〒310-8610 茨城県水戸市中央1丁目4番1号 TEL029-306-8132 (担当) 教育委員会事務局教育歴史文化財埋蔵文化財センター 〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町1064-1 大串貝塚ふれあい公園内 TEL029-269-5090 株式会社 地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 TEL0476-42-7820								
発行年月日	2020年(令和2年)3月10日								
ふりがな	ふりがな	コ	ード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "				
長者山城跡 第4地点 第2次	茨城県水戸市渡里町 字長者山3154- 5～7, 10, 43, 50 字アラヤ3041-1	201	100	36° 24' 39.62"	140° 26' 05.98"	20190729 ～ 20191101	1,100㎡	渡里 揚水機場 吐出し 水槽工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
長者山城跡	集落跡	古代	縄文時代	土坑 3基	縄文土器：早・前・中・後期		古代では製鉄(精錬)及び金属加工、漆に関わる工房が営まれていた可能性が極めて高い。特に内外面及び割れ口に漆が付着した壺・瓶類が出土し、漆の原液を輸送する容器として用いられ、取り出す際に壊したとみられる。 中世では16世紀末の幅7.20m、深さ4.67mの空堀が発掘され、封印との印象を持つため戻しによって機能が停止し、破壊行為が行われていた。		
			堅穴建物跡 8軒	石 器：二次加工のある剥片					
			性格不明遺構 1基	弥生土器：壺・甕類					
			溝跡 5条	土 師 器：環・盤・蓋・鉢・甕					
	土坑 4基	須恵器：環・盤・高坪・							
	ピット 4基	高盤・蓋・平瓶・							
	土壘 2条	壺・瓶類・甕							
	堀跡 3条	灰釉陶器：壺類							
	溝跡 4条	古 瓦：軒丸瓦・丸瓦・							
	大型土坑 1基	平瓦・文字瓦							
土坑 23基	貿易陶磁：青磁瀬丹文鉢								
ピット 36基	古瀬戸：平碗								
城館跡	中世	長身・須恵系：壺・甕類		常 滑：控鉢・甕		土師質土器：皿・香炉・権鉢・内耳鍋 瓦質土器：鉢類・風車 鉄 製 品：釘 銅 製 品：帯金具(蛇尾) 石 製 品：砥石・石臼・基石 土 製 品：羽口・埴壇・埴壇蓋 その他：鉄滓・炉壁・銅塊			
		土師質土器：皿・香炉・権鉢・内耳鍋		瓦質土器：鉢類・風車					
要約	長者山城跡は、眼下に那珂川を望む比高20mの台地を利用して築かれている。今次調査は城域中央東部の台地縁辺において実施され、縄文時代早期を最古に中世までの遺物が出土した。遺構からみた土地の利用は、縄文時代早期に集落となり、7世紀末～8世紀前半には製鉄(精錬)及び金属加工と漆を扱う工房、中世末には城郭として機能し、破壊によって終焉を迎えたことが明らかになっている。なお、工房は帯金具の出土から官営の可能性が指摘される。								

長者山城跡関連発掘調査報告書一覧

No.	書名	発行年
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007年
第12集	アラヤ遺跡(第2地点)	2007年
第37集	台渡里3	2011年

水戸市埋蔵文化財調査報告第118集

長者山城跡(第4地点第2次)

渡里揚水機場吐出水槽工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

令和2年3月4日(2020) 印刷
令和2年3月10日(2020) 発行
編集 株式会社 地域文化財研究所
発行 水戸市教育委員会
株式会社 地域文化財研究所
印刷 株式会社 ライフ ℡ 0476-24-1564
